

発行能楽の友社

名古屋市千種区千種2丁目18-18

(郵便番号 464-0858)

電話 (052) 731-7984

FAX (052) 733-2837

振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1100円

郵送の場合 1年 1800円

一部 100円

NHK放送予定(平成18年1月~2月)

●NHK-FM能楽鑑賞(毎週日曜午前7時15分~8時)

- 1月22日 「羽衣」(再)(観世流) 津村禮次郎ほか
1月29日 「節分」(大蔵流) 山本東次郎ほか
2月5日 「自然居士」(観世流) 観世鏡之丞ほか
2月12日 「海人」(宝生流) 高橋章ほか
2月19日 「桜川」(観世流) 観世喜之ほか
2月26日 「巴」(喜多流) 香川靖嗣ほか

●NHK教育テレビ「能・狂言」番組

- 1月28日(土) 14時35分~16時40分
観世流能 「卒塔婆小町」一度之次第
片山九郎右衛門、宝生閑、宝生欣哉
(笛)藤田六郎兵衛、(小)成田達志、(大)山本孝
(後見)橋保向、青木道喜、片山伸吾
(地謡)片山清司、梅田邦久、浦田保親、河村博重、味方玄、分林道治、大江信行、橋本中樹

能楽の友

名古屋市では平成十七年度名古屋市芸術賞の受賞者を一月十二日に発表、能楽関係では伝統芸能部門として、能楽小鼓・幸清流の福井啓次郎氏が芸術特賞を受賞した。

名古屋市芸術特賞 小鼓方幸清流

福井啓次郎氏受賞

福井啓次郎氏(五)は、本名林啓次郎、能楽小鼓幸清流職分、能楽協会名古屋支部、日本能楽会所属、名古屋市中区生まれ。昭和二十五年、九世福井五郎、後に十四世幸

薪能は8月5日 能楽協会名古屋支部 平成18年度公演予定

- 能楽協会名古屋支部(梅田邦久支部長)主催による平成十八年度の演能予定は次のとおりである。
◎熱田神宮奉納能
六月五日(月)
熱田神宮能楽殿
◎名古屋薪能
八月五日(土)
熱田神宮境内特設舞台
◎初秋能
九月三日(日)
名古屋能楽堂
◎歳末助け合い協賛能
十二月三日(日)
名古屋能楽堂

演能カレンダー

名古屋能楽堂

(TEL 052-231-0088)

- [平成18年1月]
22日(日) 名古屋宝生会定式能 (有料)
28日(土) あいち「農楽」(のうがく) フェスティバル (無料)
[2月]
11日(土) 富 耀 会 (無料)(番組②面)
12日(日) 名古屋観世会定式能 (有料)(番組②面)
18日(土) 名古屋梅若六郎の会 (有料)
19日(日) 青陽会定式能 (有料)(番組②面)

名古屋宝生会 創立50周年記念別会

3月19日 名古屋能楽堂

名古屋宝生会は、創立五十周年を迎え、きたる三月十九日(日)、創立記念別会を名古屋能楽堂で開催する。演能は次のとおり。

- 能「絵馬」衣斐正宜ほか
能「大原御幸」倉本雅ほか
能「七人狸々」佐野萌ほか
その他狂言、仕舞

能楽協会名古屋支部 新年謡初式

能楽協会名古屋支部では、一月三日午前十時半から恒例の新年謡初式を名古屋能楽堂で開催した。ひきつづいて同能楽堂の集客室で新年総会を開き、梅田支部長から平成十七年度の支部主催の催能に対する支部員の協力に感謝する年頭のあいさつが述べられた。

さらに担当役員から平成十八年度の支部主催の演能日程(別項)また名古屋能楽堂の定例公演について報告が行われた。



能楽協会名古屋支部の謡初式

金剛流謡初式

1月3日 金剛能楽堂
金剛流初式は、一月三日(火)正午から京都・金剛能楽堂で開催された。

能楽鏡座公演

3月4日 岐阜・未来会館

「神歌」金剛永護、金剛龍護
仕舞「老松」(廣田泰能)、
「雪」(廣田幸稔)、「芦刈」(種田道二)、「小鍛冶」(宇高通成)
仕舞「淡路」(今井清隆)、「熊野」(松野恭憲)、「葛城」(豊嶋三千春)、「雲林院」(廣田泰三)
舞囃子「祝言」高砂「金剛永護、笛・杉信太郎、小鼓・曾和靖、大鼓・石井保彦、太鼓・前川光範(入場無料)

新春能面展

鶴舞中央図書館で

能面研究会「面紹社」(保田紹雲主宰)は、新春(第十四回)能面展を一月五日から二月五日(日)まで名古屋市鶴舞中央図書館一階展示コーナーで開催している。開催時間は、火・金午前十時~午後五時、土・日・祝は午前十時~午後五時

謹賀新年

名古屋 観世会

観世 清和

幽謳 会

片山九郎右衛門

清司

鏡仙 会

観世 栄夫
観世 鏡之丞

梅猶 会
梅若 吉之丞

大槻清韻 会

大槻文蔵

〒540-0005 大阪府中央区上町A番七号
電話〇六六七六四一〇八九八番

山本勝一

大西智久

鳳鳴 会

武田 志房
武田 友志

稽古場 名古屋千種区今池四丁目15-3 浅井ビル
電話〇五二(七三三)三三三六

幽花 会

片山慶次郎
片山伸吾

〒603-8123 京都市北区小山下花ノ木町二二

名古屋観世九臈会

観世 喜之
観世 喜正

高橋 瞭一
外山 圭一

井上 嘉介
井上 裕久

〒603-8175 京都市北区紫野下鳥田町六

壺泉 会

泉 嘉夫

名古屋千種区山手通3-8-2 306
電話〇五二(八三三)三二八五
西宮市甲陽園目神山町二二二二五
電話〇七九八(〇二四)二四五八

演能案内

あいち「農楽」フェスティバル

一月二十八日(土)午後一時開場
名古屋能楽堂

◇和太鼓演奏
◇食と緑の表彰
◇狂言ふう音楽劇
森と水と農のハーモニー
—食と緑の豊かな愛知県民宣言—

名古屋狂言共同社狂言公演

水掛 御田
唐人相撲
出演 井上菊次郎 今枝 靖雄
大野 弘之 今枝 郁雄
佐藤 融 鹿島 俊裕
井上 清浩 鷺見 政行

【要応募】

主催 愛知 知 県
後援 水士里 ネット 愛知
(愛知県土地改良事業団体連合会)
問合せ 052-954-6431
(愛知県農林水産部)

富 耀 会

二月十一日(土)十二時三十分始
名古屋能楽堂

「舞囃子」「連調」など

【御来場歓迎】

主催 富 耀 会
柳原富司 会

名古屋観世会定式能

二月十二日(日)十二時半開演
名古屋能楽堂

素謡 神 歌

武田 邦弘 梅田 嘉宏
八神 孝充 小島 一英
親世 芳宏 清沢 一政

能 高

久田 勘晴 福王 知登 河村真之介 助川 治
親世 清和 福王 知登 柳原富司 藤田六郎兵衛
間 井上 清浩 高橋 嘉一 親世 芳伸
後見 梅田 邦久 地謡 梅田 嘉宏 古橋 正邦

狂言 末廣かり

井上菊次郎 佐藤 友彦
鹿島 俊裕 後見
田 村キリ 親世 芳伸
東 北キリ 藤井 完治
放 下 僧小歌 親世 芳宏
国 栖 片山 清司

能 羽

片山九郎右衛門 河村総一郎 助川 誠治
衣 高安 勝久 福井 兵衛 大野 誠治
彩色之伝 杉江 元 正樹
後見 久田 勘晴 地謡 本山 圭一 古橋 正邦
親世 芳伸 須部 敏彦 梅田 清久
加賀 敏彦 武田 邦弘

附祝言

【要会費券】
当日券八千円
主催 名古屋観世会
事務所 名古屋市昭和区台町2-16-15
TEL 052-841-4632
FAX 052-841-4632

名古屋梅若六郎の会

二月十八日(土)午後二時始
名古屋能楽堂

能 狸 卷

能 鐘 秀句 傘

【有料】
SS席一万三千円、S席一万円
A席七千円、学生席三千五百円
名古屋梅若六郎後援会
梅若六郎事務所
〇三・三三三・七七一八

青陽会定式能(第150期)

二月十九日(日)午前十一時開演
名古屋能楽堂

能 組

高 砂 星野 路子 生野 里翠
弱法師 今沢 美和 地謡 近藤 幸江
梅田 邦久 飯富 雅介 後藤嘉津幸 鹿取 希世

能 田

後見 前野 郁子 今沢 美和 梅田 嘉宏
祖父江修一 地謡 須部 敏彦 清沢 一政
後見 須部 敏彦 加賀 敏彦 梅田 嘉宏
梅田 邦久 井上 清浩 須部 敏彦 清沢 一政

能 東

高橋 瞭一 河村真之介 竹市 学
間 杉江 元 船戸 昭弘
後見 近藤 幸江 星野 路子 松山 幸親
梅田 邦久 地謡 黒田 孝充 祖父江修一
須部 敏彦 須部 敏彦 加賀 敏彦

狂言 昆布売

前野 郁子 佐藤 友彦 今枝 郁雄
白頭 橋本 幸 河村総一郎 加藤 洋輝
間 橋本 正樹 柳原富司 大野 誠

能 安達原

後見 今沢 美和 地謡 星野 路子 高橋 瞭一
久田 勘晴 三村 孝充 祖父江修一
附祝言 主催 青 陽 会
当日券三〇〇〇円
学生一〇〇〇円
お問合せ 名古屋市中東区一社三の一六二
電話〇五二・七〇五・一五八五



観世芳宏門人会

観世芳宏
観世芳伸

藤井徳三

邦謡会

梅田 邦久
清沢 一政
須部 敏彦
本 田 嘉和
今沢 美和
梅田 嘉宏

大垣浦声会

大垣市伝馬町大垣別院
電話〇五八四・七三三・六二
〒606-0804 京都市左京区下鴨芝本町五八
電話〇七五七・八一七・〇三〇

名古屋修諷会

梅若修一

久田観正会

久田 勘晴
久田 舜一郎
松野 郁子
星野 幸路

松音会

泉 泰孝
泉 雅一郎
〒201-0802 東京都狛江市東野川四一六八
電話〇三三・四八八・二四八五番

財団法人 鎌倉能舞台

中 森 晶三
中 森 貫太

下田雄三

豊中市曾根東町四一―一二
雄諷会中部地区連合会
名古屋和石会
一宮竹石会
岐阜花石会
下呂雄調会
倭文之屋社

春鶯会

梅若善高
〒560-0084 豊中市新千里南町三丁目18-12
電話〇六〇・六八三・一七八五
〒166-0003 東京都杉並区高円寺南4-27-7
電話〇三三・三三二・一〇五七

武田謳楽会

武田 欣司
武田 邦弘
武田 大志

名古屋淡交会

橋岡 慈観
三 交 会
久田 三津子
〒465-0803 名古屋市中東区一社3-162
電話〇五二・七〇五・一五八五

上田

上田 貴弘
上田 拓司
上田 大介

初陽会

武田 宗和
〒511-0801 三重県桑名市西別所一〇六一の五
TEL・FAX 〇五九四・三三四五八二

梅春会

井戸 和男
良祐

松盛会

小松 勝憲

平成18年度 名古屋宝生会 定式公演

第一回は既報のとおり、一月十二日開催。
「養老」和久莊太郎、「東北」衣斐愛

【第二回】六月十八日
半部 佐野 萌
野守 辰巳満次郎
【第三回】九月十八日
右近 倉本 雅

桜川 佐藤 耕司
藤戸 衣斐 正宜
【第四回】十一月十九日
野宮 竹内 澄子
弱法師 玉井 博祐
正会員 四回五枚綴二万円
当日券一万円(二枚綴・年内通用)

特別 蠟燭能「雪」

1月28日 金剛能楽堂

社団法人金剛能楽堂財団
では一月二十八日(土)、金剛能楽堂で、特別企画・豊臣秀吉将領の「雪の小面」で舞う蠟燭能「雪」が上演される。開演午後二時。

番組は次のとおり。
◇対談「能面の世界」ステイ・ブ・E・マーヴィン(能面愛好家、金剛水鏡(金剛流宗家、コイデインター・中西薫(能楽資料館館長)
◇「蠟燭能」午後三時半より
「仕舞」岩船」棹(シテ金剛龍護、地謡・今井清隆、宇高通成、451・1008

廣田幸稔、廣田泰能)
【蠟燭能】雪 雪路之拍子(シテ金剛水鏡、ワキ福王和幸、笛・森田保美、小鼓・曾和尙清、大鼓・河村大、後見・廣田泰三、廣田幸稔、地謡・松野共憲、今井清隆、宇高通成、廣田泰能、豊嶋晃嗣、豊嶋幸洋、今井克紀、宇高竜成)
全席指定 一般五〇〇〇円、学生四五〇〇円
お申込み、問い合わせ
金剛能楽堂/TEL075・41・7222、FAX075・451・1008

復曲能「巴園」

2月5日 大槻能楽堂

大槻能楽堂では、2006年自主公演能・研究公演として、二月五日(日)復曲能「巴園」(はえん)を上演する。
「巴園」は、観世小次郎信光(1450-1516)の作で、大鼓方の名人といわれ、能作者として「船弁慶」「紅葉狩」など多くの作品を残している。

「巴園」の上演は次のとおり。
開演・午後二時
お話し「巴園について」
天野文雄氏。
復曲能「巴園」監修天野文雄、大槻文蔵
シテ(園守の翁)上田拓司、前ツレ(園守の姥)武富康之、後ツレ

(龍神)上野雄三、子方(仙人)赤松裕一、子方(仙人)上田純音、ワキ福王和幸、ワキツレ福王知登、同喜多雅人、アイ善竹隆平
笛・藤田六郎兵衛、小鼓・大倉源次郎、大鼓・河村眞之介、太鼓・中田弘美、後見・大槻文蔵、赤松慎英、寺沢幸祐、地謡・多久島利之、齋藤信隆、山本博通、山本正人、生一知哉、長山耕三、齋藤信輔、水田雄吉
主催 財団法人大槻能楽堂(電話06・6761・8055)
大阪府、財団法人大阪都市協会
入場料 一般当日四三〇〇円(前売三八〇〇円) 学生当日二八〇〇円(前売二三〇〇円)

入場券発売所 電子チケットぴあ、ローソンチケット、大槻能楽堂(電話06・6761・8005)

幸田町で2月25日「狂言会」

野村万作、萬齋両師が来演

親子文化を育てる会主催による「はじめてみる子どもと大人のための「狂言会」が、野村万作、野村萬齋両師により、愛知県・幸田町の幸田町民会館で、きたる二月二十五日(土)開催される。協賛/NPO法人ももの木保育園、後援/幸田町、幸田町教育委員会、蒲郡教育委員会、岡崎市教育委員会、朝日新聞社。

一色神社例祭 奉納能

3月12日 一色町能楽保存会

伊勢の一色神社の神祭、奉納能として四五〇年の伝統をもつ「一色能」は、昭和三十三年に伊勢市無形民俗文化財に、神楽が三重県無形民俗文化財に指定され、保存会は平成九年に文部大臣より地域文化功労表彰を受賞しているが、きたる三月十二日(日)平成十八年一色神社例祭「奉納能」が一色町民会館仮設舞台で催される。この催しは第十二回みえ県民文化祭協賛事業として行われる。

今回の上演は「翁」「能」「羽衣」「難波」はじめ狂言「不須」で次のとおり。

能 組

翁 石原 進 神楽 喜多 寛治 芳夫
舞 藤原 隆明 笛 森 勇二郎
狂言 不須 太郎冠者 喜多 芳夫 主人 藤波 徹

舞 藤原 隆明 太鼓 大形いく子
舞 藤原 隆明 太鼓 福吉 恵子
舞 藤原 隆明 太鼓 福吉 恵子

舞 藤原 隆明 太鼓 福吉 恵子
舞 藤原 隆明 太鼓 福吉 恵子
舞 藤原 隆明 太鼓 福吉 恵子

舞 藤原 隆明 太鼓 福吉 恵子
舞 藤原 隆明 太鼓 福吉 恵子
舞 藤原 隆明 太鼓 福吉 恵子

舞 藤原 隆明 太鼓 福吉 恵子
舞 藤原 隆明 太鼓 福吉 恵子
舞 藤原 隆明 太鼓 福吉 恵子

舞 藤原 隆明 太鼓 福吉 恵子
舞 藤原 隆明 太鼓 福吉 恵子
舞 藤原 隆明 太鼓 福吉 恵子

舞 藤原 隆明 太鼓 福吉 恵子
舞 藤原 隆明 太鼓 福吉 恵子
舞 藤原 隆明 太鼓 福吉 恵子

舞 藤原 隆明 太鼓 福吉 恵子
舞 藤原 隆明 太鼓 福吉 恵子
舞 藤原 隆明 太鼓 福吉 恵子

舞 藤原 隆明 太鼓 福吉 恵子
舞 藤原 隆明 太鼓 福吉 恵子
舞 藤原 隆明 太鼓 福吉 恵子

舞 藤原 隆明 太鼓 福吉 恵子
舞 藤原 隆明 太鼓 福吉 恵子
舞 藤原 隆明 太鼓 福吉 恵子

舞 藤原 隆明 太鼓 福吉 恵子
舞 藤原 隆明 太鼓 福吉 恵子
舞 藤原 隆明 太鼓 福吉 恵子

舞 藤原 隆明 太鼓 福吉 恵子
舞 藤原 隆明 太鼓 福吉 恵子
舞 藤原 隆明 太鼓 福吉 恵子

舞 藤原 隆明 太鼓 福吉 恵子
舞 藤原 隆明 太鼓 福吉 恵子
舞 藤原 隆明 太鼓 福吉 恵子



名古屋正花会
山本博通

笙月会 中川雅章
〒256-0883 長浜市地福寺町八ノ二九
電話(075)795-0630

賀水会
桑名賀水会
名鉄百貨店友の会
加賀敏彦

洗心会 奥村富久子
〒606-8333 京都市左京区永観堂西町二〇
電話(075)777-0767

観修会 祖父江修一
〒507-0883 多治見市日ノ出町2の2
電話(057)231-3656

猶惠会 熊沢恵美子
〒465-0883 名古屋市中区東区平和ケ丘3-76
日車マンション四〇四

幸誦会 近藤幸江
〒444-0222 岡崎市鳴田本町十一番地ノ三
電話(056)442-2529

千早会 八神孝充
〒464-0822 名古屋市中区千種区徳波町3-60-1-1-201
電話(052)761-2101

恵誦会 三村徑布
〒445-0883 西尾市住吉町三-1-1-1-1-1-1-1
電話(056)333-2594

桜月会 加藤春枝
〒509-0883 可児市早ケ丘3-1-1-1-1-1-1-1
電話(057)444-1113

葵心庵 舞台
尾張旭市東大道町原田二四九三ノ二
若杉ビル(旭市役所南)
電話(056)151-3246
能舞台 電話(056)151-3698

近藤乾之助
〒170-0002 東京都豊島区東鴨島五-1-3-1-1-1-1-1
電話(03)391-5137

佐野由於
〒150-0001 東京都渋谷区東2-14-14-21
〒921-8304 金沢市泉野町4-15-18-301

倉本雅
〒658-0081 神戸市東灘区田中町1-13-22-809
電話(078)444-1546

恵美寿会
衣斐正宜
衣斐正宜後援会

宝生流 嘉宝会
〒466-0883 名古屋市中区昭和区川名本町二ノ五
〒468-0883 名古屋市中区天白区島田二丁目三〇-一
島田橋住宅二二三〇電話(052)777-3777

司宝会
〒468-0883 名古屋市中区天白区島田二丁目三〇-一
島田橋住宅二二三〇電話(052)777-3777

金剛流
名古屋周屋会
岐阜周屋会
吉川周子
〒464-0883 名古屋市中区千種区西崎町三三六
電話(052)761-1257

金春信高
金春安明
〒167-0001 東京都杉並区善福寺2-27-27
電話(03)338-7656

本田光洋
春敲会
名古屋春栄会
〒164-0002 東京都中野区上高田二ノ二五ノ二
電話(03)338-6264

金春穂高
廣瀬雅弘
廣田鑑賞会
廣田幸稔

伊勢金春会
宇仁田吉邦
〒516-0006 伊勢市八日市場町5-16
電話(059)521-5198

豊嶋能の会
豊春会
豊嶋三千春
菊之会
廣田泰三
廣田泰能

宇高徳成
宇高徳成
宇高徳成

金剛流
名古屋周屋会
岐阜周屋会
吉川周子

金春信高
金春安明
〒167-0001 東京都杉並区善福寺2-27-27
電話(03)338-7656

本田光洋
春敲会
名古屋春栄会
〒164-0002 東京都中野区上高田二ノ二五ノ二
電話(03)338-6264

金春穂高
廣瀬雅弘
廣田鑑賞会
廣田幸稔

伊勢金春会
宇仁田吉邦
〒516-0006 伊勢市八日市場町5-16
電話(059)521-5198

戦後名古屋能楽史 ⑫

〔第十六章〕 竹尾 邦太郎

昭和三十七年（一九六二）

――承前――

四月八日、名古屋淡交会橋岡久太郎先生芸術院賞（昭和三十五年）受賞の社中祝賀能。番外に「福の神」井上松次郎、仕舞五番「桜川クセ」飯田新子、「老松」加藤良久、「弓八幡」飯山嘉俊、「七騎落」増田十草、「国柄」中野寛兵衛、舞囃子「花月」羯鼓入「藤井千鶴子、連吟「難波」飯田賢・尾関健太郎、仕舞四番「田村キリ」高橋静夫、「梅」柴田初太郎、「芦刈キリ」奥善助、「絃上キリ」六車真三。

同日、宝生流・倉本雅の主宰する社中の梗雲会が第一回を名古屋巽会後援のもと素謡・仕舞・舞囃子など合わせて四十四番を金山神社で催す。

四月十四日は昭和三十六年度（第十二回）芸術選奨文部大臣賞の受賞式。八人・三団体のうち団体で早稲田大学坪内博士記念演劇博物館（館長・飯島小平）が古典芸能の能・狂言以下ラジオ・テレビまでを含む「演劇百科大事典」全六巻の出版によって芸能界に貢献したとして受賞する。

四月十五日、名古屋観世会定式能の第二回。素謡「巻絹」飯田賢、仕舞四番「田村」竹内六郎「小塩」石谷初蔵「桜川」杉村竹翠「鞍馬天狗」殿島修二、能「通盛」橋岡久馬、狂言「花盗人」河村丘造、能「百万」柴田初太郎、仕舞二番「鶴之段」高橋静夫「山姥」大槻文蔵、能「天鼓・弄鼓之楽」大槻秀夫、在名三役の他に大鼓谷口喜代三、太鼓小寺金七の来演。

四月二十二日、大鼓方石井流・吉田定男の曾祖父吉田方条五十回忌・父吉田秀夫十七回忌の追善能。番組は舞囃子「百万」大塚一二、仕舞六番「桜川」有賀滋子「三輪」加藤良久「屋島」杉村竹翠「殺生石」殿島修二「笠之段」

河村鉦二「玉之段」塚本秀雄、連吟「鶴飼」鬼頭五郎・増田一雄、舞囃子「胡蝶」内藤泰二、能「通小町・雨夜之伝」観世喜之・泉嘉夫、狂言「布施無経」河村丘造、一調「勸進帳」西尾孫太郎・柴田初太郎、能「道成寺」大槻秀夫（54）、ワキ高安滋郎（47）、アイ井上松次郎（48）、井上礼之助（47）、藤田六郎兵衛（54）、田鍋惣太郎（78）、吉田定男（34）、披キ・前川善雄（47）、地頭観世喜之（60）、鐘後見大槻十三（72）、後見柴田初太郎（76）、舞囃子「春榮」大槻文蔵、仕舞四番「雲雀山」小島芳雄「放下僧」塩谷武治「天鼓」小林義明「昭君」田村勇、一調一声「玉鬘」谷口喜代三、大槻十三、半能「石橋」観世武雄、の大能、石井流の追善能とあって京都から谷口喜代三、谷口正喜、谷口勝三、太鼓に前川善雄が来演。なお大槻十三は此の年一月に急逝してをり、代助は不明。

吉田方条は本名鉄三郎、記録では明治三年（一八七〇）五月一日、早川舞台（西区比米町）で「土蜘蛛」（シテ大野庄七郎）が初舞台。明治二十一年（一八八八）九月十三日、県社若宮八幡宮御神霊千六百年祭奉納に「船弁慶・前後之替」（シテ青山鏡次郎）を本名で勤めたあと五年余の空白期間（病床にあつたか）があり、明治二十七年（一八九四）六月十日、愛知県博物館内舞台披露の「翁」（シテ観世清康）から方条を名のり、明治四十四年（一九一〇）二月十九日、柴田邦彦（殺彦嗣子）舞台に於ける柴田舞謡会囃子会での舞囃子「岩船」（シテ西脇栄太郎）が最後の舞台である。激動の御維新あと、文字通り明治時代と共に生き、活躍する。

吉田秀夫は明治四十一年（一九〇八）七月七日、豊橋の魚町能楽社が主催する安海熊野神社御祭

典奉納能の「俊成忠度」（シテ伊藤武定）が初舞台、昭和十九年（一九四四）十一月五日、布池・名古屋能楽堂での三社会「鉄輪・早鼓」（シテ観世喜之）が最後の舞台。

四月二十八日は喜多流観賞会五周年記念能。仕舞五番「羽衣」新熊弘憲「網之段」中尾栄一「田村」岡村保道「国柄」和谷亀二郎、独吟「小原御幸」二井栄逸、能「巴」和島富太郎、狂言「鐘の音」野村又三郎、能「鉢木」喜多實・高安滋郎、仕舞四番「嵐山」大島政允「俊成忠度」狩野秀生「女郎花」粟谷菊生「飛鳥川」喜多節世、能「狸々乱」長田驍（披キ）。昭和三十三年から五年間続いた此の会もこの年で終了する。

五月十三日、シテ方五流の社中が集う名古屋能楽倶楽部は第十回大会。「翁」に始まる舞囃子一番、仕舞七番、能四番、狂言一番に充実ぶりをみせる。

五月十七日、金春流七十八世宗家金春八条死去、享年七十五歳（明治十九年九月三十日生）。名古屋での縁は薄いが本名光太郎のとき、昭和三年（一九二八）四月七日、呉服町能楽倶楽部舞台に於ける名古屋能楽会（金春流演能で「石橋」を勤めたのが初、その後、昭和二十六年、家元を嫡男・信高に譲った翌年十一月二十四日、のちに中目五流能初回に直る名古屋



永田虎之助氏

藤友彦（掛川）井上祐一「景清」和泉保之、「祢宜山伏」井上松次郎（山伏）、佐藤卯三郎（祢宜）。なお「茶子味梅」は和泉流専有曲だが当地に上演の記録なく初演という珍しさ。因に岩田豊雄（獅子文六）作の「東は東」は本曲に依拠する。



昭和31年（1956）金春八条、古希の「関寺小町」於大機能楽堂（平成10年・金春円満井会特別公演パンフレットより転載）

能楽堂建設基金造成・五流宗家能（御園座特設舞台）で信高シテ「橋弁慶」の後見を勤め、昭和二十九年、八条を名乗ってからは昭和三十四年三月二十八日の第四回中日五流能（愛知文化講堂特設舞台）が当地最後の舞台である。因に八条は昭和二十一年（一九四六）秋、京都金剛能楽堂で還暦に一子相伝の老女物深奥「関寺小町」を披キ（金春流としては宝暦九年から一八七年ぶりという）十年後の古希には二度目の関寺を勤め、その芸術の高さが喧伝される。

五月二十日、中部金剛会定式能は舞囃子「実盛」豊嶋弥左衛門、能「巻絹」大塚一二、独吟「玉之段」伊藤鉄之進、仕舞五番「春日龍神」片岡道子「敦盛」重本昌三「藤」広田泰三「春榮」片野東四郎「阿古木」山田仁三郎、狂言「蟹山伏」佐藤卯三郎、一調「杜若」鬼頭八郎・今井幾三郎、能「雲雀山」金剛巖。

五月十七日、金春流七十八世宗家金春八条死去、享年七十五歳（明治十九年九月三十日生）。名古屋での縁は薄いが本名光太郎のとき、昭和三年（一九二八）四月七日、呉服町能楽倶楽部舞台に於ける名古屋能楽会（金春流演能で「石橋」を勤めたのが初、その後、昭和二十六年、家元を嫡男・信高に譲った翌年十一月二十四日、のちに中目五流能初回に直る名古屋

六月五日は恒例の熱田神宮奉納能。舞囃子二番「養老」柴田初太郎「巻絹」内藤泰二、独吟三番「鶴之段」前田昌広「笠之段」二井栄逸「長谷」西村弘敬、囃子二番「唐船」大塚一二「山姥」高野瀬透、狂言小舞二番「石河藤五郎」佐藤卯三郎「番匠屋」河村丘造、舞囃子二番「小鍛冶」高安滋郎「狸々」山田仁三郎・西村欽也、という洒落た番組で、中でも脇方の独吟と舞囃子が耳目を集める。なお終演後、永年斯道に貢献してきた大鼓方大倉流・永田虎之助（78）が老齢のため引退表明をするに当たり、その労をねぎらう記念品の贈呈式がある。因に「道成寺」披キは二十九歳、大正二年（一九一三）四月二十七日、観世清久（18）名古屋での二十四世宗家継承披露能で片山九郎三郎（二十二世清孝の三男で寿、片山家へ入り九郎三郎を名宣り、のち復帰して観世元義、清久の実父）がシテ、同時に木下敬賢シテの「弱法師」も勤めている。

六月十日、掬水青陽会第六期第一回。素謡「羽衣」石谷初蔵、舞囃子「安宅」加藤丈太郎、能「那耶」久田秀雄、仕舞四番「賀茂」佐藤太後「敦盛」竹内六郎「三輪」塚本秀雄「熊坂」柴田取武、能「半部」山本勝一、狂言「杭か人か」河村丘造、能「春日龍神」河村鉦二。

六月十四日、名匠を聴く会は主催者も同じ呼称で観世鏡之丞・梅若六郎・観世喜之を招聘しての素謡と仕舞の会。番組は仕舞三番「西王母」有賀滋子「通盛」塚本秀雄「殺生石」山崎英太郎、素謡「善知鳥」梅若六郎、仕舞三番「笠之段」観世武雄「駒之段」観世静夫「玉之段」梅若景英、素謡「隅田川」観世鏡之丞、仕舞三番「實盛」観世喜之「井筒」梅若六郎「難波」観世鏡之丞、素謡「安達原」観世喜之。

六月十六日は喜多流和島富太郎の主宰する和調会の社中会だが番外に仕舞三番「田村」長田驍「玉葛」粟谷菊生「天鼓」和島富太郎があり、当地日本舞踊・西川流の西川司津が切能で「船弁慶・真之伝・波間之拍子・早装束」を勤め

六月十六日は喜多流和島富太郎の主宰する和調会の社中会だが番外に仕舞三番「田村」長田驍「玉葛」粟谷菊生「天鼓」和島富太郎があり、当地日本舞踊・西川流の西川司津が切能で「船弁慶・真之伝・波間之拍子・早装束」を勤め

謹 賀 新 年

長田驍後援会

〒514-2211 津市高野尾町三三五一―四六
電話（五九）〇五九二〇〇六九七番

喜多流

和楽会
和谷 衡 市

〒516-0067 伊勢市中島二丁目26―12
電話（五九）〇〇一五九番

喜多流

二井 英 世

〒515-0073 松阪市殿町一四二―三
電話（五九）〇三三〇二番

福王茂十郎

藤田 舞 台

藤田六郎兵衛

〒451-0041 名古屋市西区幅下2―10―9
TEL&FAX 〇五二―五七一―六三〇四

高安勝久

幸友会

福井啓次郎

福井良治

柳原富司忠

桂 会

飯富雅介

杉江元

後藤孝一郎

嘉津幸

橋本 宰

〔4面よりつづき〕
華を添える。翌十七日は名古屋親
世会定式第三回で素謡「鶴飼」
真柄米次、仕舞四番「兼平」岩田
与司「班女」佐藤太「雲雀山」
河村鉦二「天鼓」塚本秀雄、能
「竹生島」親世喜之、狂言「悪太

郎」井上礼之助、能「芭蕉」親世
鏡之丞、仕舞二番「松風」片山博
太郎「藤戸」柴田初太郎、能「熊
坂・替之型」片山博通、地謡に藤
井久雄、三役に杉市太郎・山本孝
が来演。なお、「芭蕉」は明治四
十一年以来五十四年ぶりに上演の

稀曲。
六月二十三日、名古屋宝生会定
式能は第六期第三回。素謡「桜
川」倉本雅、仕舞三番「八島」金
井章「花籃」武田喜永「岩船」田
巻利夫、能「花月」辰巳孝、狂言
「鏡扇」佐藤卯三郎、能「国栖・

白頭」宝生英雄。
七月一日、謡調会満十周年記念
大会は番外に舞囃子「高砂」有賀
滋子と仕舞四番「現在七面」加藤
良久「嵐山」塚本英雄「田村キ
リ」親世武雄「松虫」柴田初太郎
がある。

七月六日、名古屋宝生会・宝生
素謡の夕は素謡三番「俊寛」辰巳
孝、「半部」と宝生英雄「船弁
慶」野口禄久、仕舞三番「藤」波
吉信和「班女」今井泰男「山姥」
松本忠宏。
——以下次号——

◆秋酣の舞台から(その二)◆

「鏡座リクエスト公演」「青陽会」
「金剛定期能」と「第26回名古屋金春会」

竹尾邦太郎

予め提示された
「昆布売」 狂言三番(他に
「寝音曲」)「仏
師」のうち演者の解説のあと見所
のリクエストに込める一番。
誰か他人に太刀を持たせたい何
某(アド高義)に脅され、拒み切れ
ない行きずりの昆布売(シテ小三
郎)、鬱屈した気持ちで太刀を持
つ優位に立場が逆転すれば、当初
は決る何某を意のままに操り、操ら
れる何某も調子づき踊らされると
ころ、間然するところがない。
(23分)

後は小書でワキは橋懸で幕に向
かいノット、膝つきへ自今以後、
と数珠爪繰り合掌から、撰取せ
よ、で私子取って戻ると、囃子に
段一つあって幕内で謡い出すシ
テ、此の石二つに、と走り出て
正中床几にかかる(面泥小飛出・
白頭・白地半切・萌黄地法被)。
曾て優女と変じ近付くと玉体は、
御悩となる、と面だけワキへアシ
ラフのが凄味を利かせ、ぎろりと
睨む怖さ。立ってからは妖狐の敏
捷、那須野の原に現れ、と一ノ
松勾欄に左足掛けて挑むかにワキ

を見込む所、へ矢の下に射伏せら
れて、と扇胸に突き立て三ノ松に
安座の所など、若手らしいスピー
ドのある鮮やかさが、安座でな
く仏倒れを見せて欲しかった。
(1時間・10月15日・鏡座リクエ
スト公演・熱田神宮能楽殿)

「通盛」 海女(ツレ美和)、平
凡な日常に慰めは黄
昏の浦の景色、そこへ風に聞こえ
る説経の声に舟を寄せれば、磯の
岩の上で平家一門を弔う僧(ワキ
元)。この情動的な場面に、へ芦
火の影を、と腰の扇を抜き取るシ
テが経の面を照らすのに煽る所、
ぎくしゃくするが、ワキに乞われ
シテとツレ連吟の小宰相ノ局入水
の哀話はしみりと中々。中入、
ツレの入水を止めんとシテが、御
衣の袖に、と取りつく所(写真)は
両手でしっかり止めるべき、ツレ
は振り切りようもないだろう。
後は源氏との合戦譚。シテ通盛

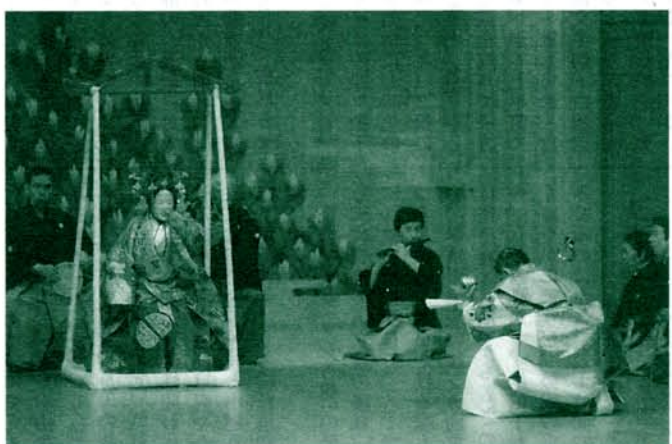
は面中將・黒垂・梨子打・襟白浅
黄・厚板着付・紫大口・萌黄長絹
(繪垣唐花文)の美々しさに気品。
クセに、出陣のシテは妻・小宰相
ノ局(ツレ美和)にへ名残惜しみ、
と扇開き立つと、へさす盃、とツ
レの前へゆくが酌する型は無く、
舎弟に連れへなほ恥しや、とツレ
にアシラヒ面伏せる所は如何にも
然もありなんを思わせる。拍子一
ツ踏みカケリだが少々腰の安定感
を欠き軽い感じ。へ抜き設けたる
太刀、もスラリと抜いて欲しい。
同日に「葵上」があるときはキリ
の詞章が替わる由だが、うっかり
して聞き洩らした。(1時間20
分)

「殺生石・白頭」

先の狂
言と同じ
趣向で選
ばれる(他に「花月」「羽衣」)。
玄翁道人(ワキ雅介)能力(アイ
小三郎)奥州から上洛の途次と次
第謡には言うが、那須野ヶ原に至
るだけに解せない。里女(シテ團)
に出会うと、玉藻前の故事詳しく
語るシテに訝るワキ、素姓明かす
シテは「あら恥しや」と居立ちワ
キにアシラフと、へ(立ち帰り)
夜になりて、と面バツと直ルやす
つくと立つ所、すらりとした長身
に妖気をもせる。地の裡に一ノ松
へ抜け、へ(懺悔の姿)現さんと、
ワキを見込み、へ夕闇の(空なれ
ど)、と右ウケ面切り、へこの夜
は、と左袖掴むと再度ワキを見込
んで二三歩勾欄へ出る所には鬼気
を。



青陽会「通盛」左より松山幸親、今沢美和 (杉浦賢次氏撮影)



青陽会「楊貴妃」近藤幸江、ワキ・高安勝久 (杉浦賢次氏撮影)

「楊貴妃・台留」 独り天
界に在る
楊貴妃
(シテ幸江)の孤愁、それが玄宗の
勅で方士(ワキ勝久)の来訪をみれ
ば弥増す追慕の情。抑制された挙
措にみる女流らしい感情移入の深
さ。口論の果て人を
殺めた夫が破半、
所在追及のため喚
問される妻(シテ三三春)は明かさ
ず入牢の憂き目、牢には番の時を
知らせる太鼓。入牢前、のち牢中
で狂気するシテと、領主・松浦某
(ワキ利宣)との問答、酸いも甘い
も噛み分けたワキと、夫の盾にと
思いついたシテ、惹きつける。放
免を告げられれば、夫の身替りは
牢の空気がこれこそ形見よ、の
強い語調、夫に恋着する我が身の
差し置かぬワキも、へなう
く心が乱れ、と肩脱ぎへ涙に咽
(6面へつづく)

謹 賀 新 年

<p>富 柳 原 富 司 忠 弘 船 戸 昭 弘 〒466-0836 名古屋市昭和区滝川町47-1 電話(八三三)一〇三二番 サザンヒル八事2-1703147 電話(八三三)一〇三二番 小鼓教室 朝日神社内 (丸善前)</p>	<p>長 生 会 鬼 頭 義 命 〒490-0302 愛知県稲沢市城西 電話(〇五六七)四一九六〇番</p>	<p>金 春 流 太 鼓 青 耀 会 上 田 悟 〒594-1133 和泉市青葉台2-17-25 電話(〇七二五)八五二一 名古屋 浅井能舞台 〒466-0836 名古屋市千種区今池4-15-3 電話(〇七五)四六二四二一五 電話(〇七五)四六二四二一五</p>	<p>亀 井 俊 一 保 忠 雄 實 雄 〒920-0861 金沢市香林坊2-18-17 電話(〇七六)二二六二四三四〇</p>	<p>大 藏 狂 言 会 大 藏 彌 太 郎 大 藏 吉 次 郎 〒177-0045 練馬区石神井台5-22-41 電話(〇三三九)一〇六七二七番</p>	<p>呉 竹 会 筧 鉦 一 〒602-0915 京都市上京区中立売通室町西入 室町スカイハイツ610号 電話(〇二二)二四二二〇</p>	<p>前 川 光 長 〒616-0805 京都市右京区御室芝橋町一の六 名古屋稽古場 名古屋市中区葵二-13-3 ツインクルガーデン801前野舞台 電話九三二-1880六番</p>	<p>谷 口 正 喜 谷 口 有 辞 〒520-0221 大津市緑町二四-二〇</p>	<p>茂 山 忠 三 郎 茂 山 良 暢 〒606-0805 京都市左京区北白川東小倉町28 電話(〇七五)七〇二〇二一 FAX(〇七五)七〇二〇二一</p>	<p>朝日カルチャーセンター 囃子教室 小鼓 後藤孝一郎 丸栄スカイル10階</p>
---	--	---	--	---	---	--	---	---	--

NHK放送予定(平成18年2月~3月)

●NHK-FM能楽鑑賞(毎週日曜日午前7時15分~8時)
2月26日 「巴」(喜多流) 香川靖嗣ほか
3月5日 「田村」(親世流) 遠藤六郎ほか
3月12日 「嵐山」(金春流) 金春安明ほか
3月19日 「百万」(親世流) 河村禎二ほか
3月26日 「藤戸」再放送(親世流) 坂井音重ほか
●NHK教育テレビ「能・狂言」番組
3月18日(午後2:50~4:50)
第20回NHK能楽鑑賞会
狂言「二人袴」「武悪」「金岡」

能 楽 の 友

発行能楽の友社

名古屋市中区千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-7984
FAX (052) 733-2837
振替口座 00800-6-36393
購読料 1年 1100円
郵送の場合 1年 1800円
一 部 100円

小鼓方 福井啓次郎改め
十一世 福井四郎兵衛襲名
5月14日 披露能を開催

幸清流小鼓方・福井啓次郎氏はこのたび喜寿を迎え、十一世福井四郎兵衛を襲名、きたる五月十四日(日)名古屋能楽堂で「襲名披露能」を開催する。
この披露能は、同師が主宰する第十六回清華能、幸友会別会鑑賞能を総合して行われる。
福井氏は、平成十七年春の叙勲で旭日双光章を受章、このたびは平成十七年度名古屋芸術特賞受賞、さらに歴史ある幸友会の百周年にもあたり、能楽協会名古屋支部長として斯界の発展にも尽力さ

能「道成寺」「恋重荷」
邦謡会能 4月1日上演

邦謡会(梅田邦久師主宰)は、きたる四月一日(土)、男の恋、女の恋のサブテーマで、能「恋重荷」「道成寺」の大曲を上演する。
「恋重荷」は、人間国宝・片山九郎右衛門師が来名上演。能「道成寺」は、催主梅田邦久師が所演する。小鼓は上田敦史師。
ほか狂言「寝音曲」(野村又三郎)一調(弱法師)(片山慶次郎、大倉源次郎)が上演される。
料金正面指定席八千円、自由席

平成17年度
芸術祭賞
新人賞に茂山正邦氏
廣田幸稔氏が受賞

平成十七年度(第六十回記念)芸術祭は、十七年十月二日から十一月十日の期間、関東、関西で催された参加公演とテレビ、ラジオの参加作品を対象に選考され、芸術祭大賞に「第五回佐伯紀久子之別会能」が、芸術祭新人賞には、茂山正邦氏の「彦市ばなし」、廣田幸稔氏が「第五回廣田鑑賞会記念能」の「葛城・神楽」の演技で受賞した。一月十三日ホテルニューオータニ大阪で贈呈式が行われた。
佐伯紀久子氏は、昭和二十一年一月生まれ、親世流シテ方準職分、親世左近、井上嘉介に師事、日本能楽会会員。
茂山正邦氏は、昭和四十七年七月生まれ、三世茂山千作、四世千作、父正義(現十三世千五郎)に師事、平成五年「釣狐」を披く。
十六年「花子」を披く。
廣田幸稔氏は、昭和三十三年十一月生まれ、金剛巖、金剛水護、父廣田隆一に師事、昭和六十年イタリア・パチカン市国訪能楽団に参加、日本能楽会会員。

演能カレンダー

名古屋能楽堂

(TEL 052-231-0088)

[2月]
18日(土) 名古屋梅若六郎の会 (有料)
19日(日) 青陽会定式能 (有料)
[3月]
11日(土) 名古屋能楽堂定例公演 (有料)(番組①面)
19日(日) 名古屋宝生会創立50周年記念別会能 (有料)(番組①面)
24日(金) 狂言風オペラモーツァルト「フィガロの結婚」
[4月]
1日(土) 第28回邦謡会能 (有料)(番組②面)
2日(日) 名古屋梅猶会定期能 (有料)(番組②面)
9日(日) 名古屋観世会定式能

青陽会平成18年
定式能(予定)
第2回 5月6日(土)

百 萬 星野 路子
江 口 梅田 幸親
山 姥 今沢 美和
清沢 一政

第3回 8月6日(日)

清 経 星野 路子
羽 衣 八神 孝充
善知鳥 梅田 嘉宏
三村 徑布
祖父江修一
第4回 9月9日(土)

俊 寛 八神 孝充
須部 甫
加賀 敏彦
近藤 幸江
熊 坂 美奈保之伝
黒田 博

演能案内
名古屋能楽堂定例公演

三月十一日(土) 午後二時開演
名古屋能楽堂

伊文字

佐藤 友彦
井上 菊次郎
井上 靖浩
鹿島 俊裕
後見 今枝 郁雄

百 萬

飯富 雅介
河村 総一郎
鬼頭 義命
小出 甚吉
和谷 衡市
松井 俊介
梅津 忠弘
森田 克彦
大島 政允
伊藤 英毅
大島 輝久

名古屋宝生会創立50周年
記念別会

三月十九日(日) 正午始
名古屋能楽堂

番組

素謡 鶴 鬼頭 嘉男
石黒 孝 地謡
寺部 一威 高橋 憲正
鬼頭 嘉男
石黒 孝
地謡
青木 村上
織田 哲也
高橋 憲正

生田敦盛クセ

稲川 寿一
佐藤 耕司
地謡
石黒 水山
山内 崇生
澤田 宏司

繪 馬

橋元 正樹
河村真之介
加藤 洋輝
柳原富司忠
竹市 学

狂言 文 荷

佐藤 友彦
井上 菊次郎
大野 弘之
後見 佐藤 融

大原御幸

飯富 雅介
橋本 幸
後藤孝一郎
寛 鉦一
鹿取 希世

七人狸々

後見 辰巳満次郎
和久 和英
地謡
柴田 玉井
道夫
賢治
辰巳大二郎

枕 船

高橋 章
和英
地謡
河村総一郎
福井啓次郎
藤田六郎兵衛

七人狸々

後見 辰巳満次郎
和久 和英
地謡
柴田 玉井
道夫
賢治
辰巳大二郎

七人狸々

後見 辰巳満次郎
和久 和英
地謡
柴田 玉井
道夫
賢治
辰巳大二郎

七人狸々

後見 辰巳満次郎
和久 和英
地謡
柴田 玉井
道夫
賢治
辰巳大二郎

七人狸々

後見 辰巳満次郎
和久 和英
地謡
柴田 玉井
道夫
賢治
辰巳大二郎

七人狸々

後見 辰巳満次郎
和久 和英
地謡
柴田 玉井
道夫
賢治
辰巳大二郎

平成17年度名古屋芸術特賞
平成17年春叙勲旭日双光章
幸友会百周年 記念

十一世福井四郎兵衛襲名披露能

喜寿 福井啓次郎改め
第十六回 濤華能
幸友会別会鑑賞能

五月十四日（日）十一時始
名古屋能楽堂

能 組

能子 翁 観世鏡之丞 梅若 猶義
舞獅子 三二 輪 金剛 永謙 河村總一郎 助川 治
神道 幸清次郎 藤田六郎兵衛

一調 鶴

本田 光洋 後藤嘉津幸

素囃子 延年之舞

一調 鉢 木

泉 嘉夫 後藤孝一郎

能 花

久田勘吉郎 野村 昌司
野村 四郎 飯富 雅介 元 河村總一郎 竹市 学
笹之伝 大志 橋本 幸 福井四郎兵衛 鹿取 希世

衣斐 正宜 幸 正昭

戦後名古屋能楽史 ⑬

〔第十六章〕

昭和三十七年（一九六二）

竹尾 邦太郎

七月七日、中部地区在住囃子方の技術向上を目指す研究会であると同時に、囃子方がイニシアチブをとって能会を主催する結社・調友会が田鍋惣太郎らの主唱のもとに発足。常の能会では演奏の機会が少ない素囃子や一調を含め、舞囃子を四六番、キリに能一番を据える斬新な番組で舞事の種々相が楽しめる。

番組は順に、舞囃子二番「翁」橋岡久馬・柴田初太郎（千歳）「高砂」内藤泰二、小舞「鮎」和

泉保之、舞囃子「胡蝶」山田仁三郎、一調「松虫」田鍋惣太郎・本田秀男、舞囃子二番「絃上」辰巳孝「唐船」大槻秀夫、素囃子「獅子」藤田六郎兵衛・田鍋惣一郎、河村總一郎・鬼頭喜太郎、半能「船弁慶・前後之替」観世武雄。翁之舞・千歳之舞・神舞・中之舞・早舞・楽などがたのしめる好企画である。

盛夏、社中会の外は装束納で暫く有料の催会は影をひそめていたが、八月二十五日、冷房完備の愛知文化講堂特設舞台で能楽協会名



初世 梅若万三郎（「亀堂閑話」より転載）

古屋支部の主催する第三回大衆普及能がある。

番組は能「鶴亀」内藤泰二、舞囃子「胡蝶」山本博之、仕舞四番「西王母」加藤良久「鶴ノ段」辰巳孝「実盛」宝生九郎「隅田川」豊嶋弥左衛門、舞囃子「山姥」桜間龍馬、能「松風」大塚一二・豊嶋三千春、狂言「棒縛」和泉保之、舞囃子「船弁慶」和島富太郎、能「夜討曾我」柴田収武・久田秀雄、仕舞・舞囃子に宗家や名家の来演があり、五流の揃う大能となる。

秋、重陽の節句の九月九日は先代初世梅若万三郎（一八六八—一九四六）の七十七回忌追善能、主催は遺児二世万三郎と猶義。当地観世流師

義。当地観世流師（③面へつづく）

栄謡曲クラブ月例会 25周年記念大会

栄謡曲クラブ（代表世話人三口謙介氏）は、昭和五十六年（一九八一）に月例謡会を発足して、ことし二月に発会満二十五周年を迎え、去る二月五日（日）名古屋・



今池の浅井能楽舞台で、二十五周年記念謡会を開催、同好者約四十人が参加してそれぞれの研鑽を発表した。

当日は素謡「老松」「景清」「鉢木」「花月」「海士」「弱法師」「那那」ほか独吟「勸進帳」、仕舞など。終演後懇親会が催された。

栄謡曲クラブは、謡曲愛好者の自主的な参加で運営、謡い歴、社中、所属会派をいっさい問わず、（観世流主体）誰でも自由に参加でき、堅苦しくなく、ただ能楽を楽しむという趣旨。同好者のなかには、名古屋に転動になったが謡曲をつづけた人、同好者グループの友達として参加している方など、気楽に来て謡える同好クラブとして楽しみながら月例会に参加している、またクラブとして謡曲名所めぐりなどの小旅行も行っている。

連絡は、名古屋千種区星が丘二の五〇、電話052・781・8856、三口方。

第28回邦謡会能 男の恋・女の恋

四月一日（土）十二時半開演 名古屋能楽堂

老松 本田 勲 武田 大志
自然居士 須部 甫 梅田 邦久
采女 今沢 美和 地謡 梅田 邦久
東僧 清沢 一政 橋本 忠樹

能 恋重荷

梅田 嘉宏 片山九郎右衛門
飯富 雅介 河村總一郎 上田 慎也
井上菊次郎 竹市 学

後見

青木 道喜 青木 智彦 片山 伸吾
片山 清司 地謡 武田 大志 武田 邦久
橋本 忠樹 片山慶次郎
味方 玄 古橋 正邦

狂言 寝音曲

野村又三郎 野村小三郎 後見 伴野 俊彦

仕舞 屋島

片山 伸吾 青木 智彦
片山 清司 地謡 分林 道治
青木 道喜 清沢 一政

一調 弱法師

片山慶次郎 大倉源次郎

能 道成寺

梅田 邦久 杉江 元 河村真之介 上田 悟
高安 勝久 橋本 正樹 上田 敦史 藤田六郎兵衛
赤頭 井上 靖浩 野村小三郎 本田 勲 味方 玄
後見 梅田 嘉宏 地謡 須部 甫 武田 邦久
片山九郎右衛門 青木 道喜 清沢 一政 片山 清司
（鐘後見） 片山 伸吾 橋本 忠樹 青木 智彦
分林 道治 武田 大志
佐藤 融 鹿島 俊裕
松田 高義 藤波 徹

〔有料〕

正面指定席 八〇〇〇円
自由席 五〇〇〇円

お問い合わせ・申し込み 邦謡会 名古屋千種区台町2-16-5
TEL・FAX 052・841・4632（梅田 邦久方）

名古屋梅猶会定期能

四月二日（日）十二時三十分始 名古屋能楽堂

狂言 鈍太郎

梅若 猶一 佐藤 友彦 今枝 郁雄 後見 大野 弘之

能 砧

梅若 猶一 飯富 雅介 河村總一郎 大野 誠
井上菊次郎 福井啓次郎

舞獅子 龍田

熊澤恵美子 寛 敏一 鬼頭 義命
柳原富司忠 鹿取 希世

仕舞 笠之段

岡田 晃一 小川 晴子
梅若 猶義 梅若 善高 井戸 良祐

能 羽衣

小松 勝憲 寛 敏一 鬼頭 義命
柳原富司忠 鹿取 希世

後見

梅若 猶義 地謡 小川 晴子 梅若 修一
梅若 善高 谷口 澄夫 井戸 良祐
熊澤恵美子 岡田 晃一
井戸 良祐 池内光之助

〔有料〕

〇〇〇〇円（全席自由席）
〇〇〇〇円 熊澤恵美子方（〇五二一七八二一九七三）

〇〇〇〇円

熊澤恵美子方（〇五二一七八二一九七三）

〇〇〇〇円

熊澤恵美子方（〇五二一七八二一九七三）

(2)面よりつづき

範も総参加の様相で、先ず連吟「誓願寺」飯田賢・高野瀬透・鬼頭五朗、仕舞四番「俊成忠度」河村鉦二「富士太鼓」加藤丈太郎「江口」杉村竹翠「野守」佐藤太俊、独吟「鶴飼」増田一雄、次いで素謡二番「半部」梅若万紀夫「通小町」観世鏡之丞、仕舞五番「野宮」柴田初太郎「花笠井戸良造」鉄輪「仙石三十三」女郎花「梅若善高」天鼓「梅若修一」舞囃子「松虫」岡田朗詠、と「野宮」を除き梅若一門、最後がメーンで能「卒都婆小町」一度ノ次第一梅若猶義・西村弘敬、狂言「呂運」野村又三郎、舞囃子「遊行柳」観世鏡之丞、仕舞三番「玉之段」梅若万紀夫「殺生石」梅若万佐晴「経正」梅若猶彦、舞囃子「熊坂」梅若盛義、能「融」十三段ノ舞「梅若万三郎・高安滋郎、当地三役のほか杉村太郎、大倉長十郎、斎田喜兵衛・山本孝、前川善雄の来演もあり、追善に相応しい豪華版。

初世梅若万三郎は明治の三名人の一、初代梅若實の嗣子、厳格な父の薫陶よろしきを得てよく芸統を継ぎ、斯道の第一人者となり、現行曲完演を果して演能は三千番という。昭和十二年、帝国芸術院創立と同時に能楽界からは宝生新と共に会員となり、昭和二十一年には文化勲章を受ける。名古屋初来演は明治三十三年(一九〇〇)四月一日から三日間に亘る那古野神社献能。毎日各一番、「二人静」(ツレ梅若六郎)「石橋」(盛久・恐ノ舞)を勧め、当地の最後は昭和十七年五月二十四日、自身主催の能楽鑑賞会で「卒都婆小町」一度ノ次第一「ワキ宝生新ワキツレ宝生弥一、囃子は一噌鉄二・北村一郎・高安道喜、布池の名古屋能楽堂。この間の来演は合わせて十七回、明治四十二年十月二十四日、呉服町能楽倶楽部の舞台披露には前日の「大原御幸」に続き「景清」(安宅・勳進帳・延年ノ舞)の二番を勧め、来名の折が少なく人気の万三郎の舞台を少しも多く、の見所の要望を満たすかである。一公演で能二番が六回、昼夜公演で二番が二回、一公演でも能一番と素謡など、それに

記録が不備で不明だが当然のように地謡や後見も加わろう。十七回の来名で演じた主な能は「隅田川」三、「松風」三、「小袖曾我」二、「景清」二、「朝長・磯法」一、「山姥・雪月花ノ舞」一、「碓」一、「木賊」一、「卒都婆小町」一度ノ次第一など重い曲が多い。なお、亀堂の雅号を持つ初世万三郎には沼津兩編輯になる「能楽随想」亀堂閑話「昭和十三年四月十五日・積善館刊」、「万三郎芸談」昭和二十一年二月二十日・積善館刊、の二著があり、後者の中、「隅田川」の子方、の題で次の記述がある。

私が名古屋で勤めます折に、「是非子方なしにやうて貰ひたい」と頼まれた事が御座いました。「私の一存では参りませんが、家元に向つてからに」と申して鏡之丞さんに御相談いたしました。「こちらでは今迄ない型だから、よく古い連中に尋ねて返事をしませう」と言ふことでそれきりになりました。

金春では金太郎さんがなしでやうてをられますやうですが、私の考へでは子方がなくては舞台にみる様な考へて型は出来ませぬ。子方に手をかけます時分に手が使ひにくいですが、幻を見て掴まへる型はやれさうです。いづれ子方なしにやる事も出来ませう。一度はやつて見たいです。

また、万三郎と度々舞台を共にした田鍋惣太郎は自著「小鼓芸話」(故人の思い出)の項で、「この方の安宅は、何といつても一番でした。目たつきをされなかつたですね。観世左近氏の鉢木の後見で、作り物を、どうして何時のまにもしたかわからないように出されたのには感心しました」と述べているが、当の万三郎も「亀堂閑話」後見に就いての中で、「後見も巧い人になりなすと、舞台へ出て来て、何時品物を取つて行つたか、解らない程、音もしないやうに持ち去ります。廣田豊作(梅若豊作氏)なんか真にうまいものでございまして」と、いみじくも言う。九月十六日、観世世第四回は仕舞三番「龍田」加藤良久「半部」

◆晩秋から冬の舞台◆

「豊田市能楽堂特別公演」

「観世会」

「名古屋能楽堂定例公演」

「忠三郎狂言会」

「宝生会」と「船戸昭弘職分披露能」

「萩大名」

「井筒」

「泣嘩」

「泣尼」



「井筒」高橋章 豊田市能楽堂特別公演



「萩大名」(左より)茂山千五郎 豊田市能楽堂特別公演



名古屋観世会「女象・兜」梅若吉之丞、②「殺生石・白頭」上田貴弘 (杉浦賢次氏撮影)



名古屋観世会「泣嘩」(左より)佐藤友彦・井上菊次郎・佐藤融(「こちへ御座れよ」) (杉浦賢次氏撮影)

有賀滋子「玉葛」福井道子、連吟「草子洗小町」芥川秀子・飯田新子、素謡二番「頼政」島沢啓次「三井寺」観世元昭、舞囃子「三輪」柴田初太郎、素謡「善知鳥」林喜右衛門、仕舞三番「弱法師」島沢啓次「松風」観世元昭「融」林喜右衛門、地謡に藤井徳三、大鼓亀井忠雄の来演もある。十月十三日、四月に引き続き山本博之来名廿五周年記念の名古屋山本観劇会大会の第二日、番外に仕舞三番「柏崎クルイ」柴田初太郎「土蜘蛛」山本勝一・真義「難波」山本博之がある。十月十四日は清水青陽会第六期第二回、素謡「菊慈童」竹内六郎、舞囃子「唐船」久田秀雄、能「小怪」佐藤太俊、仕舞三番「敦盛」加賀敏彦「富士太鼓」石谷初蔵「松虫」河村鉦二、能「班女」柴田取武、狂言「芥川」河村丘造、能「葵上」観世元昭。十月二十一日、風韻会・大槻十三先生追善御手向能大会。社中会で番外に仕舞十番がある。「田村」杉村竹翠「井筒」加藤良久「玉鬘」岡田光敏、「屋島」大槻文蔵「経正」水田博「兼平」里井順次郎「野宮」田村勇「遊行柳」宇治正夫「小鍛冶」泉嘉夫「弱法師」大槻秀夫。十月二十八日、第四十三回名匠鑑賞会、秋は例年名古屋芸術祭に参加。能「巴」本田秀男、狂言「武悪」三宅藤九郎、能「野宮」観世喜之、仕舞五番「善知鳥」金春信高「実盛」山中信之「玉ノ段」観世武雄「二人静」小島芳雄・南条秀雄「船弁慶キリ」大江又三郎、能「小鍛冶」黒頭別習「梅若六郎」金春会・九草会・梅若会の競演で好番組、当地三役の外に福王茂十郎・指吸雅之助、森田光春、山本敬一郎の参加がある。以下次号

「萩大名」者・茂が予て懸意の庭主・正邦を訪ねる大名シテ千五郎、歌を所望されるにあつて太郎冠者から事前の特訓を受けるが、いざその場ではまるで他人事、とんでもないことを言い出して太郎冠者に注意されるが、素直に体面取り繕つて恍惚の返りの無邪気はいそそ可愛い。共演の子息二人をいなし、あしらい、といった風も仄見えるか、千五郎の得意も、尚、大名に愛想尽かしの太郎冠者は途中で退かず、狂言座に残り大名の後から幕へ退

「井筒」在原寺に業平・紀有常ノ娘夫婦の跡を弔う旅僧ワキ閑が里

女シテ章と出遇う前場、荒れた境内。シテが「一叢すすき、と視線を遣り詰足、草花々として、と面使と見回すところ、懐旧に秋意自ずから深まる。後シテは業平を慕う有常ノ娘の亡霊、(形見の直衣身にふれて、と左袖を出し、右ウケて右袖、沁々眺めれば、業平に同化する思いは舞う序ノ舞の気品。(男なりけり、と双手を合わせ、井戸へ進むと業平の面影、と覗きこむところ(写真)も美しく、キリは「凋める花の、と扇左に抱えたよたよと安座、へむひ残り

て、と左ウケ、へ寺の鐘、に面伏せ聞き入り、膝を立て立つと、へばるる、行てこう」と気楽な太郎冠者に、「行てささしめ」と咲嘩。爆弾抱えた太郎冠者にすこしとを知らない咲嘩が可笑しい。(31分)

「殺生石・白頭」弘、前は面近江女の妖艶。玄翁ワキ雅介との問答・掛合に殺生石の謂れに触れ、往來の人に「仇を今、とワキへ詰メルところや、禁中の怪を聞かせる居グセの中、発光体となった玉藻前が暗中へ光に輝きて、とワキへアキラフところなど、凄味。中入は「懺悔の姿、と一ノ松でワキを見込み、夕闇の空を右ウケて眺め、燈火の、と左袖アキラヒ再度ワキへ見込むと「待ち給へ、と三ノ松へ走り、キリりと小廻りから静かに入る。後は小書で白頭・白装束、狐戴はつけず面は泥罷(か)、猛々しい鬼相に偉丈夫のシテの圧倒的な存在感。調伏されて逃れる那須野へ追討のところ、へ草を分つて、と両袖大きく掻き分ける様にサシ分け一ノ松へ。「現れ出しを、と勾欄に左足掛け面切ると、へ追つまくつと、と三ノ松に、へ矢の下に(射伏せられて)、と扇胸に突き立てるや、とと仏倒れのところ中、へなほ執心は、と両袖被き(写真)数拍子、トメは常座。目まぐるしい型の連続をきびく極め見事。(一時間四分・十一月十三日・観世会)

「泣尼」を頼まれる都ノ僧シテは眠気がさすといふ噂を氣遣い、お布施を与える約束で、涙脆い尼・友彦を同伴、有難涙を流させる心算。滔々と話をすすめる僧が氣掛かりは尼の様子、いつかこつくり仕出し果てはころんと横臥。その都度、法談中の「水の落つる」「泣く涙」「血の涙」などの言葉に注意を喚起せんと睨め付けてみたり、語氣強めたり、扇で卓を打つたり、とどこかしらに身悶えせんばかりの僧。法談が終(4)面へつづく

「女象・兜」

女象は琵琶の楽器、その道の攻究に渡唐を志す師長ツレ邦弘が太政大臣の風格をみせれば、仕える従者ワキ勝久は主君の名声を嵩の驕り、宿を求められる沙波ノ老翁シテ吉之丞との問答が面白い。一息は断るも、他意あつてさりと引き受け、姥ツレ猶義ともども師長の才を称え弾奏を勧めるところ、駆引きも思われて意味深長。板屋を叩く村雨に中断される演奏、シテは姥と立ち、へ諸共に、で扇開くと目付柱に向き、へさつと音き、と右へ勢よく扇を靡かせ板屋に苦(途・むしろ)を音く心、鮮やか。その行為、不審のワキに説く音響効果は調律のこと、師長は只者に非ずと見抜き、ワキを介しシテに己れの琵琶を弾かせ(写真)、名手の存在を知って渡唐を思い止まり、不明を恥じて逃げる。へ走り寄り、双手を掛け押し止めるシテ、この辺りの互いの心の裡が的確に描かれ、シテと姥が村上天皇・梨童女御と知れ恐懼下居の師長もよい。

「泣嘩」

連歌の宗匠に都の命に太郎冠者シテ友彦が連れ帰つたのは「見た物は請うても取る者」見請いの泣嘩の異名をとる大盗菊次郎。追い返そうとする愚直な太郎冠者に、後難を恐れる主は、穩便に帰そうと太郎冠者に接待を申しつけるが粗相も氣掛り。言う通りにせよと命ずれば、一言一行を真似、それを咲

「泣尼」

施主・融から法談を頼まれる都ノ僧シテは眠気がさすといふ噂を氣遣い、お布施を与える約束で、涙脆い尼・友彦を同伴、有難涙を流させる心算。滔々と話をすすめる僧が氣掛かりは尼の様子、いつかこつくり仕出し果てはころんと横臥。その都度、法談中の「水の落つる」「泣く涙」「血の涙」などの言葉に注意を喚起せんと睨め付けてみたり、語氣強めたり、扇で卓を打つたり、とどこかしらに身悶えせんばかりの僧。法談が終(4)面へつづく

発行能楽の友社

名古屋千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-7984
FAX (052) 733-2837
振替口座 00800-6-36393
購読料 1年 1100円
郵送の場合 1年 1800円

能楽の友

NHK放送予定(平成18年3月~4月)

Table with NHK-FM能楽鑑賞 (毎週日曜日午前7時15分~8時) and program details for March and April.

創立50周年を迎えて

名古屋宝生会記念誌刊行

名古屋宝生会は本年創立五十周年を迎え、三月十九日、名古屋能楽堂で記念別会を開催、同時に記念誌を刊行、昭和三十三年からの宝生会定式能の演能を回顧している。五十周年を迎え、名古屋宝生会職分として次のようにあいさつしている。(記念誌より)

2005年度芸術選奨 文部科学大臣賞 狂言方 山本則直氏

芸術の各分野で優れた業績をあげた人に贈られる二〇〇五年度芸術選奨(第五十六回)がこのたび文化庁から発表された。能狂言関係では、演劇部門で、狂言方大蔵流・山本則直氏(六七

宝生流・恵美寿会(衣裳正宜師主宰)は、きたる三月三十日(木)三十一日(金)の二日間、東京・千駄ヶ谷の国立能楽堂で「第十四回恵美寿会」を開催する。

恵美寿会が国立能楽堂で能会

3月30・31日 2日間

演能カレンダー

名古屋能楽堂

(TEL 052-231-0088)

Calendar of performances from April to May, including dates, titles, and cast members.

久田勘吉郎君 能「鷺」に出演
3月29日 藤田次郎師「笛の会」
「鷺」の出演はワキ工藤和哉、

名古屋梅猶会定期能

四月二日(日) 十二時三十分始
名古屋能楽堂

Cast list for the regular performance on April 2nd, listing roles and actors.

名古屋観世会定式能

四月九日(日) 十二時半開演
名古屋能楽堂

Cast list for the regular performance on April 9th, listing roles and actors.

春の素謡と仕舞の会

四月十六日(日) 午前九時半始
名古屋能楽堂

Large cast list for the Spring素謡と仕舞の会 performance, listing various roles and actors.

（③面よりつづき）との問答のあと、役を済ませてアイ座に戻るところで焚火の楚樹を地謡の一人がひいたが、シテ中入のところまでひくべきでは。

〔六浦〕

六浦は鎌倉に後背する地名。錦秋、此の地の地名を詠う旅僧（ワキ宗二朗）に、里女（シテ清隆）が呼掛け問答となつて不審を解いてゆく。前場、旅僧の訥々とした風な問ひかけに、勿体ぶらずさらりと応じる里女、両者の酸す温かな雰囲気がいよいよ。この楓の、昔は他に先がけた紅葉の美しさに、一首を留めた中納言が相脚を徳とし、以後は紅葉するのを止めた、と楓の心を読んだ里女、楓ノ精と明かして消える。

後シテ楓ノ精は襟白赤を白に替、撫子文白摺箔着付は前同断、浅黄大口に白地長絹（枝垂桜ト蝶二楓葉散シ文）、面増。春に始まる四季の移ろいは今や秋深く、クセ舞は旅僧からも一歩手向けられた感恩、序ノ舞へと楓ノ精の心延えの深癖は端正な舞ぶり。キリに、陰ろふ姿となりけり、と常座でくるくるくと小廻りに廻り、ほんやり薄れてゆく姿を象徴するトメが印象的だった。（1時間26分）

〔千鳥〕

ぬのに酒屋・千之丞へ遣らされる太郎冠者あきら、話好きの酒屋を巻き込み、樽をものに見立て津島祭の見聞を再現、酒屋の気を逸らせ樽を掠め取る魂胆は試行錯誤も再三。あきら臨機の対応に小気味よい才の發揮。一方、千之丞、「千鳥を伏すところ面白くない」の憮然とした低い語調が、「山鉦を早むるところ面白くない」では語気荒げるとも、なお話の続きに未練の風情。心象描写の巧み。（23分）

〔鉢木〕

途上、近江路は白銀世界、能が跳ね外へ出ると洛中も雪催いだつたが、上野国佐野は大雪。旅僧ワキ茂十郎、襟浅黄・濃紺無地髪斗目着付・黒水衣笠・右手数珠、寒色の装束付は如何にも冷え冷えとした空気を纏い、気持ちも屈まる前傾

の姿勢に運ぶ姿に的確な状況描写。出から道行・着詞・佐野源左衛門常世ノ妻ツレ道一との問答、と重々しい語調に詞は後の執権の品位を窺わせる沈着ぶり。

シテ常世は永遠、一ノ松で直り一呼吸、正面見据え「ああ降つた雪かな」と洩らす寂のある沈んだ歎声、逆境述懐の気重のあと、雪の中に立つ妻に背つき、更には宿を乞う旅僧との対峙では冷やかにならざるを得ない心境だが、立ち去る旅僧を憐れむ妻に、思い直し後を追う。このところの三者三様の心理を踏まえた問答が素晴らしい。袖の雪へ打ち払ひ打ち払ひ、と左袖を右手の扇で払う型をみせて常世は初同（三千春・通成ら）の裡に旅僧に追いつき三ノ松、「見苦しく候へど、と扇を旅僧の左肩へ。押し留める心に、旅僧は笠に手をやり振り返ると常世を直視、腹巻にみる男居士の直情である。

戻つて焚火で持て成すところは、鉢の木切るとても、と扇開き作物前、「惜しからじと、は言ひ条、（雪うち払ひて）見れば面白や、と二・三歩退つて眺めるに、惜しむ心が感じられて切ない。暖に寛き、旅僧の間に常世が素性、窮状を明かす問答は、恥を晒すのを潔しとしない抑えた慎重な語調も、「鎌倉に御大事あらば」から俄然気持ちは昂揚、床を扇で一つ打ち、右肩脱ぎ、扇を開いてすつくと立つところには悲壯感も。敵大勢ありととも、と敵中突破の心に正先へ出るところ凄まじい気迫をみせるが、身が貧弱の俤なら、の現実に戻れば、その間の気持ちの落差、機微鮮やかにみせる。中入は労りの思いに「縁になり申さん、と常世に左手を差し出す旅僧、（共に名残や、と一ノ松から常世夫妻を見込むと、シオル夫妻、しつとりした別れの情趣である。

後場、後ワキ最明寺時頼は沙門・白綾着付・白大口・淡金色水衣・掛緒・小刀の威風。後シテは段髪斗目着付は前同断、素袍袴を白大口・側次に替え、小刀、白鉢巻きりと締め、急げども急げども、と四ツ拍子の焦燥感、いざ最明寺の面前に引き出される不

安感に。「見忘れてあるか」に面上げ、はつとして恐懼退るところ、思い万感の面持ちがよく、雪の一夜のことも語る情味溢れるワキ語が出色。キリは安堵の御教書誇らしげに掲げ、乗込拍子に馬の態で二ノ松へ、長刀一ツ突きトメ。永遠・茂十郎、格調の高い清らかな舞台。（1時間40分・12月18日・金剛定期能納会・金剛能楽堂）

〔翁〕

大観能楽堂創立七十周年記念の新春公演に当主・文蔵がシテを勤める。注連縄の張り渡された舞台は神域の森厳の趣、正先、深々と頭を垂れる敬虔な姿は、正に天下泰平国土安穩を願う今日の御祈禱である。厳肅な中にも晴朗な翁舞は、天人ノ拍子の最後、左袖被キ扇で面を掩ういわゆる翁ノ型の端麗、文蔵の品位の高さを示す。先立つ千歳・康之の舞も洗滌として気持ちよい。三番三は千五百郎、採ノ段は先ず目付柱一杯に出、たらたらと退つて常座に座り、立頭（特に掛声を大きくして打つ頭の処、という）で立つと、おやおおへおへおへとおお、と晴れやかに舞い出す。型は大きくきつぱりと、囃子に乗って踏む拍子も力強い。鳥飛は常座から三ツ真直ぐ飛ぶ。舞上げ後見座で物着の間に、「餅ノ風流」限定十人（千之丞・忠一郎）の狂言地謡が橋懸に居流れ、黒武尉をつけた三番三は舞台へ戻ると、「あら目出度やな物に心得たるあどの大夫殿に見参申さう」と千歳役の面箱・童司に呼び掛け、形の如く問答にな

る。千歳役から鈴を受け取り、笛（六郎兵衛）のヒシギで鈴ノ段になるところ、三番三は「これは如何なこと囃子が違つて鈴が鳴らせぬ。このところにて鈴ノ段を待とうずるにて候」と脇座へ退いてしまふ。ここから所謂三番三ノ風流。

〔餅ノ風流〕

座に下居する三番三が脇小（孝・源次郎）アシラヒで仙人達（七五三・宗彦・茂・逸平・正美）が毛頭巾・登籠・髪斗目着付・括袴・縷水衣の姿で杵を担いで出る。がやく／＼騒がしい空気に三番三は立つと正中、「それへ何れも興がった体で」と不審すると、「これは天竺に住む仙人に候が、此の処にて目出度き能のあること」承り、目出度いから餅を掲げに出た、とオモ仙人・七五三。「さらば目出度く餅を掲げ候へ」と事が進展、仙人達は白を二ノ松へ据え、オモが音頭を取つて唯し、後の四人が「エイト、エイト」呼応して一斉に掲ぎ始めると、不思議や此の白掲ぎの始め、とシテ千作、白練被キ三ノ松先に躍り、地謡が切れると曰かばら生まれた心に白練をハネて立つ。面延命冠者・白垂・紙四手付三三ノ鏡餅を頭に載せ、白綾着付・白地括袴・白小袖重折の白尽めは如何にも餅の精である。この場面、平成五年九月十五日、国立能楽堂開場十周年記念では「白の作り物に苦勞の跡、金茶綴子で包み、裾を垂らした中に餅の精を入り、四隅を杵で絡ませて担いだの

は「と工夫」（山崎有一郎）とあり、舞台中央で演じている。餅ノ精の出現を見て「やれやれ一段と目出度う候」と三番三、鈴ノ段を舞うから「それにて御覧候へ」と勤めると、「心得候」と餅ノ精は二ノ松の床几に掛かり、三番三が舞うのを見物する。この度は囃子が合い、ひたすら種時キに専念、囃子が急調になつてくるところなどは没我の趣、舞上げると太鼓が加わり、四季折々の祝ひ餅、と餅ノ精が謡い出す。地の返シ句に舞台へ入り、先づ初春の戴きには、下居合掌、餅尽シは「飾り餅、で立ち、夏は涼しき水の餅、秋は栗の子宇治の柿餅、冬は葉の粉の餅、と餅のもつ／＼と素朴な味わいをもせて舞い、これ迄とて帰りにけるを、三番三と千歳役の面箱が引き留めにかゝると、また立ち帰り此処に取り付き粘り着き、彼処にのり付き粘り着きて此の処にこそ治まりけれ、と餅の粘性印象づけ拍子一ツ踏み、太鼓（弘美）がトメる。

〔松樫〕

春マデモアリテ、新葉生ヒテ後二落ツ、相譲ルニ似タリ。因リテ、新年ノ儀ニ此葉ヲ用キテ、父子相譲ル義ニ寄セテ祝ス、とある。和泉ノ百姓アド友彦は松を、拱津ノ百姓シテ菊次郎は松を、拱津ノ百姓シテ菊次郎は松を、正月飾りは年貢として納めるため上洛途次、道連れとなり、兩人無事役目を果し、所望された歌も御意に合い、酒を賜わつて面目を施し、賑やかに舞立ちにする（写真）。「餅酒」「筑紫興」と同工の年貢上納をテマの百姓物の一。シテ・アド「佐渡狐」の様な静いも無く、和やかな息の合った舞台。御宝も樫の栄ふる家こそ目出度けれ、と清々しく舞トメ。（31分）

正月三日に相応しい「翁」と「餅ノ風流」は正に聖と俗との融合の妙で見応えも十分。仙人達・餅ノ精・三番三・千歳役面箱・狂言地謡の順に幕へ退き、残された面箱は後見・禎英が持ち切りへ退いた。（1時間16分）

〔繩綯〕

主・郁雄から賭けの方へ遣られる太郎冠者シテ友彦、口頭で説得されるなら未だしも、委細は太郎冠者が先方へ届ける文の中という冷たさ。事の次第を知った太郎冠者が、何某の言い付けを悉く勘ねて拒むのは、間接的に、慕う主に対する鬱憤晴らし。この辺り、主に面と向つては出来無い行動、友彦、太郎冠者の心情を巧みにみせる。日銭も稼げるであろう太郎冠者の繩綯、金銭代りの技術供与という目算が外れ、弱みは主、「この上は金銀できつと算用させられい」と何某に迫られれば無い袖は振れず、何某と共同謀議の上、太

郎冠者を差し戻すこととして繩を縛うところ何某に実見させる。繩尻とつて控える主、戻つた嬉しさに喜々として縛いながら太郎冠者が話すのは、何某の妻や子等への悪口雑言、何某が主に入れ替つたと露知らず、活き活きと仕方な語るところ（写真、見事だった。（30分）

〔金岡〕

風景・風俗画に新初期の宮廷絵師・巨勢金岡を戯画化する。重習、シテ金岡を靖浩が抜く。金岡ノ妻・融、十日余り戻らぬ夫が狂気して洛外を徘徊の風聞に捜しに出、恋の歌を唱いながら彷徨う夫に出逢う。狂気はせぬと言いつら右肩脱ぎの夫の狂気の姿に問い質す妻。「腹を立てまいぞ」と釘をさし、それで気分が楽

になったのか、相好を崩し臆面もなく語る惚気話は、一方的な片想いなかに深刻味は感じられず、寧ろ自慢気なのが靖浩の資性、可笑しい。一方、対抗心を燃やす妻は、女は化粧次第、天下に隠れもない絵師のこなが姿の顔を絵取つて下されば、と挑発。乗せられて金岡、狂言カケリ（孝・孝一郎・眞之介）にスミで膝をつき、被写体の妻をさしてどう処理しようかの思案投首の態から、いいでく／＼さらば、と勇躍筆をとり、地謡（地頭・友彦）に添い被写体を矯めつめめつ、勿体振つて筆筆のころ（写真）、天晴れ大絵師の風格の裏に滑稽味。靖浩上々の披きなら、下地は黒き山鴉、と侮辱され、「食ひ裂こうか」と怒りあらわな融の妻も立派だった。（32分・1月7日・第41回鳳の会）



鳳の会「松樫」左より井上菊次郎、佐藤友彦、鹿島俊裕



鳳の会「繩綯」佐藤友彦、今枝靖雄



鳳の会「金岡」井上靖浩、佐藤融

（杉浦賢次氏撮影）初期の宮廷絵師・巨勢金岡を戯画化する。重習、シテ金岡を靖浩が抜く。金岡ノ妻・融、十日余り戻らぬ夫が狂気して洛外を徘徊の風聞に捜しに出、恋の歌を唱いながら彷徨う夫に出逢う。狂気はせぬと言いつら右肩脱ぎの夫の狂気の姿に問い質す妻。「腹を立てまいぞ」と釘をさし、それで気分が楽

能「隅田川」「葵上」上演
4月29日 中日能
中日新聞社、中部日本放送主催の「中日能」は、四月二十九日（土）祝名古屋能楽堂で開演、観世流観世清和宗家が能「隅田川」を上演。さらに武田志房師により能「葵上」が演ぜられる。狂言は野村又三郎師の「文角力」午後一時半開演 前売りは中日サービスセンター（中日ビル）三越ブレイクガイド、日本ブレイクガイド、チケットぴあ、中日新聞社事務局。問い合わせは中日新聞社文化事業部（TEL052・201・3766）（番組②面掲載）

オーケストラと能のための「葵上」
3月12日 石川県立音楽堂が主催公演
石川県立音楽堂主催によるオーケストラ・アンサンブル金沢第197回定期公演（マイスター・シリーズ）は、3月12日、音楽堂コンサートホールで行われ、作曲家・高橋裕氏、金沢能楽会の能楽師により「オーケストラと能のため」の「葵上」が上演された。この新作は、能の名作「葵上」が演じられるなか、オーケストラにより緊迫感あふれる音楽がコラレートする協奏的な作品で、文化学術拠点形成事業であり、新出演は次のとおり。
しいオリジナルの文化を全国に発信するものとして注目される。
シテ後彦（宝生流シテ方）ツレ松田若子、ワキ平木豊男、ワキツレ芳賀俊嗣、後見・渡辺容之助、島村明宏。
笛・吉野晴夫、小鼓・住駒幸英、大鼓・飯島六之介、太鼓・前川光長、地謡・玉井博、広島克栄、高橋右任、寺田成秀。
管弦楽、オーケストラ・アンサンブル金沢、指揮・小泉和裕

郎冠者を差し戻すこととして繩を縛うところ何某に実見させる。繩尻とつて控える主、戻つた嬉しさに喜々として縛いながら太郎冠者が話すのは、何某の妻や子等への悪口雑言、何某が主に入れ替つたと露知らず、活き活きと仕方な語るところ（写真、見事だった。（30分）

翠謡会大会

五月七日(土) 十二時半始
名古屋 能楽堂

Table listing performers and roles for the 'Suisenkaikai Taikai' event, including names like 田村 大森, 松村 登, and 野宮 篠田.

幸友会 百周年記念能組

五月十三日(土) 午前10時始
名古屋 能楽堂

Table listing performers and roles for the 'Kōyūkai 100th Anniversary Noh Group' event, including names like 翁 奈倉, 三輪 野村, and 船辨慶.

能とオーケストラのコラボレーションを謳う「葵上」をみる

竹尾 邦太郎

本紙先月の四七一号に既報の石川県立音楽堂主催による異色公演の、以下はその見聞である。

ラステージに楽団員が配置される後ろの空間を黒幕で割し、略二米程の高みに設える。形ばかりの目付柱・脇柱の間に灯が入った燭台、鏡板代りには老松を描く屏風、短いが勾欄の付いた橋懸、一ノ松以下の松を並べ、舞台の姿は整う。

Table listing performers and roles for the 'Shinsei Noh' event, including names like 胡蝶 須磨源氏, 松若 飯富, and 松虫 前野.

Table listing performers and roles for the 'Kōryū 49th Anniversary Noh Performance' event, including names like 狂言 素袍落, 梅若 猶義, and 梅若 吉之丞.

Table listing performers and roles for the 'Shinsei Noh' event, including names like 花 久田勘吉郎, 雛子 翁, and 舞雛子 三二.

Table listing performers and roles for the 'Kōryū 49th Anniversary Noh Performance' event, including names like 萩大名 大蔵彌太郎, 川上 吉野の男, and 首引 親鬼.



能とオーケストラのコラボレーション公演案内チラシ

か。法力を必死に調伏せんとするワキ、死闘にオーケストラも全開の様相であるが、あらく恐ろしいので、ではたオーケストラは止み、般若経を誦読する声に調伏された心。キリは解脱したシテの安らかな心を弦楽器が表象、留メ拍子を踏み、シテ・ツレ・ワキ・ワキツレの順に退場するが、オーケストラは奏で続け、オーケストラの残り留メの余情。所要はオーケストラの登場から残り留メまで三十分、掲示柱の字句を追うのに急がされ、一方では舞台の能役者の演技に目を配る。作劇に於て、シテの肺腑から絞り出される肉声が観客の一人一人に訴え掛ける力には及ばない。

シヨンは終り、指揮の小泉和裕は作曲の高橋裕をステージに上げる。観客の盛大な拍手、楽団員には馴れていることも、二度三度呼び出される装束を付けたままの能役者には無経験、照れ臭いやら嬉しいやらであったろうが、高みの舞台では退出の機を逸した後見・囃子方・地謡方の戸惑う姿も。能は能だけの一筋道がよろしいのでは、が私見。今回の催し、制作費や時間を考えれば再演は困難な一過性になりかねないと思うが、和楽器を加えない「交響詩・奏上」といった様なものは是非聴きたいものである。なお、「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」の第二楽章で舞った数俊彦の達押掛中ノ舞三段は旋律によく乗り、清楚な美しさを、素晴らしかった。(オーケストラ・アンサンブル金沢、第一九七回定期公演・二〇〇六年三月十二日・石川県立音楽堂コンサートホール)

「末広がり」 菊次郎、来客に持たす引出物を求めさせるために太郎冠者・俊裕を都へ遣るが、末広がり扇の異称とは知らず、その細部の註文だけを頼りに太郎冠者が求めてきたのは古唐傘。都初めの太郎冠者を誦し込むスツパ融の活きのよい弁舌に、すっかり籠絡されてしまふ太郎冠者の朴直、両者の呼吸がよく合い、騙し騙される不快な感じは無く、からっとしているところが狂言。スツパが相手方の事情を見越して授ける土産の囃子物が緩衝となって舞に誘い込まれる果報者(写真)、和楽のうちものトメも目出度い。(37分)

「(2)面よりつづき」 小鼓と笛も呼応、六条御息所ノ生霊シテ数俊彦が現われ、三ノ松でシヨリ(泣く型)、更に一ノ松でもシヨリと舞台へ入り、梓の弓の音は何処ぞ、と面使(顔ヲ動かシテ何カ物ヲ見ル型)に口寄せの梓巫女を探し求める心。ここまで舞台は一気に運ばれ、能の小書(特殊演出)「梓ノ出」を踏襲するが、場面・状況をあつさり掲示柱に任せ、オーケストラは雰囲気描出に終始、一体は、能が本来持っている、観客の想像力を掻き立てる、力を殺ぎ、説明過多で登場人物の心情へ主體的に迫れない憾み。

後場、狂言方(アヒ)の登場は、従ってワキの往診に因るワキツレとアヒ、アヒとワキの問答の様子は掲示柱に任せ、横川小聖ワキ平木豊男は直ぐ一ノ松に出、現下の心境述べると、腹に響くようなテンパニーが重大事を暗示するか。ワキは舞台に入るとワキツレとの問答からノット、病臥の奏上を加持折袴するところへ唐織被シテ再登場、ノットに管が加わり妖気も一人に、唐織脱くと、イノリはワキとの闘争。凄味の女面・泥眼は今や鬼面の般若に替り、ワキに折られ三ノ松へ逃げるシテ、オーケストラにはシロホン打楽器も参加して騒然。ワキはシテを見失う空ノ折(宝生流に無い小書が狭い舞台で効果的)、シテはその隙に病臥の奏上の枕頭、へいかに行者(はや帰れ給へ)、と凄むところにシンバルは、当世風に言えば切れるというこの象徴

シヨンは終り、指揮の小泉和裕は作曲の高橋裕をステージに上げる。観客の盛大な拍手、楽団員には馴れていることも、二度三度呼び出される装束を付けたままの能役者には無経験、照れ臭いやら嬉しいやらであったろうが、高みの舞台では退出の機を逸した後見・囃子方・地謡方の戸惑う姿も。能は能だけの一筋道がよろしいのでは、が私見。今回の催し、制作費や時間を考えれば再演は困難な一過性になりかねないと思うが、和楽器を加えない「交響詩・奏上」といった様なものは是非聴きたいものである。なお、「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」の第二楽章で舞った数俊彦の達押掛中ノ舞三段は旋律によく乗り、清楚な美しさを、素晴らしかった。(オーケストラ・アンサンブル金沢、第一九七回定期公演・二〇〇六年三月十二日・石川県立音楽堂コンサートホール)

「羽衣・彩色ノ伝」 郎右衛門、小書で白蓮華戴天冠、煌めく環路に玲瓏たる増の面は句うばかりの美し(4面へつづく)

◆早春の舞台から◆
「第四〇一回大槻能楽堂自主公演能」と「名古屋能楽堂定例公演」

竹尾邦太郎

「巴園」 復曲。丸岡桂著「古今謡曲解題」は第九・天鬼畜のうち仙人に分類。いわゆる唐(中国)のもので曲名は「邯鄲」に同じ土地の名、古来橋の名産地という。前場、古木の橋に瑞相とみえる巨果の実りが寂かに達し、勅使一行(ワキ茂十郎ワキツレ知登・雅人)現地に赴き、園守ノ老夫婦(シテ拓司ツレ康之)の案内は正に仙郷の中、「承り及びたるよりも肝を消したる橋実なりと老人に向ひ呆れ居たり」も実感の大小前一畳台上は巨大な半球状の橋(作物は「殺生石」と同工)に眺め飽きず、帰るさと思はれず、と橋を

見遣る惜別の情で、是迄なれや老人よ、と帰途に就くところ、暫く待たせ給ふべし、と作物より声、シテは居立って声の方を見、不審すれば、「今は見えじ待て暫し、と月明下紅葉の木陰で待てる指示あるや、留まる勅使一行にシテも酒を勧めんとツレ共に入。勅使が瑞相を檢分に派遣されるところは「養老」に、老夫婦それぞれが萩箒と杉箒を持つところは「高砂」に似る。唐冠・白大口・紺袴狩衣(金ノ松竹梅散シ文)・唐団扇の重厚なワキが巨果に驚く様、生真面目であるだけにそこはかとなき滑稽味、また、至福の栖を紹介するシテが居グセにへ



名古屋観世会定式能「高砂」左より観世清和、久田勘助(杉浦賢次氏撮影)

勘助。ワキに茂十郎を得てシテ・ワキ問答の打ては響く歯切れよきも涼やか。相生の松の謂れをシテとツレ二人して説くところの、昂った意気込みに煽られれば、なおも「高砂の松の目出度き謂れ委しく」と求めるワキ。和歌の道にも適う松の変らぬ節操の堅固をいうクセに、へ尾上の鐘の音、を聞く上ゲ端から竹柁(さくらえ)を取って立つと、右へ一度、取り直して左へ二度掻く(写真)と大小前まで引き寄せるところ、ゆつたりした風姿に宗家たる面



名古屋観世会定式能「羽衣・彩色ノ伝」片山九郎右衛門、井上菊次郎、鹿島俊裕(杉浦賢次氏撮影)

発行能楽の友社

名古屋千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-7984
FAX (052) 733-2837
振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1100円
郵送の場合 1年 1800円
一 部 100円

能楽の友

NHK放送予定(平成18年5月~6月)

- NHK-FM能楽鑑賞(毎週日曜午前7時15分~8時)
5月21日 「飛鳥川」(金剛流) 今井清隆ほか
5月28日 「源氏供養」(再)(宝生流) 小林与志郎ほか
6月4日 「花筐」(親世流) 梅若六郎ほか
6月11日 「杜若」(宝生流) 佐野萌ほか
6月18日 「融」(金春流) 桜間金記ほか
6月25日 「鶴飼」(再)(親世流) 泉泰孝ほか

演能カレンダー

名古屋能楽堂

(TEL 052-231-0088)

- [5月]
21日(日) 第49回狂言やるまい会 (有料)
27日(土) 豊星会春の大会 (無料)
[6月]
4日(日) 名古屋猶諷会春の大会 (無料)(番組①面)
9日(金) 名古屋能楽堂6月定例公演(有料)(番組①面)
10日(土) 第5回狂言三の会 (有料)(番組①面)
11日(日) 名古屋親世会定式能 (有料)(番組②面)
17日(土) 全国宝生流学生連盟能楽大会 (無料)
18日(日) 全国宝生流学生連盟能楽大会 (無料)
名古屋宝生会定式能(午後1時より) (有料)(番組②面)

飛騨能「藤橋」上演

5月28日 神岡町で初演

全国でも珍しい「所謡」(ところうたい)として、岐阜県・飛騨地区の謡曲「藤橋」がこのたび「能」として創作され、きたる5月28日(日)、飛騨市神岡町ではじめて上演される。
所謡の「藤橋」を能に創作したのは、シテ方親世流の野村四郎師(東京芸術大学名誉教授・重要無形文化財総合指定保持者)で、謡曲「藤橋」に深い関心を寄せ、地域の伝統文化発展のためにと能「藤橋」を創作、飛騨市に寄贈されることになったのである。
謡曲「藤橋」は、郷土神岡の伝説や史実を物語として構想・作話された、全国的にも数少ない

故佐藤秀雄氏23回忌追善

お酒落名匠狂言会 9月7日

名古屋狂言共同社(井上菊次郎代表)は、きたる7月9日(日)「第7回御酒落(おしやらく)名匠狂言会」を名古屋能楽堂で開催する。
この会は、毎回東西の名人、名手を招いて行われるが、本年は共同社同人として活躍した故・佐藤秀雄氏の23回忌にあたり追善の会として催される。
出演は、和泉流人間国宝・野村

能楽奉納祭 能3番 狂言1番 6月5日 熱田能楽殿

能楽協会名古屋支部(梅田邦久支部長)主催による熱田神宮大祭協賛の「能楽奉納祭」は、6月5日(日)午前10時から熱田神宮能楽殿で催される。入場無料。
能組は次のとおり。(番組②面掲載)
能(宝生流)「竹生鳥」(シテ 衣斐愛)
狂言(和泉流)「伯母が酒」(シテ 佐藤融)
能(金剛流)「花月」(シテ 田中春菜)
仕舞(金春流)「放下僧」(シテ前 田登)
能(喜多流)「阿漕」(シテ 長田驥)
後援 熱田神宮奉賛会

名古屋猶諷会春の大会

六月四日(日) 午前九時三十分始
名古屋能楽堂

Table listing performers and their roles for the 'Spring Festival of the Nagoya Yūkyū Kai'. Roles include '素謡' (Sōkyō), '竹生鳥' (Take-no-tori), '通小町' (Tōshōmachi), '三輪' (Sanrin), '天鼓' (Tendō), '熊野' (Kumano), '東北' (Tōhoku), '高砂' (Takasando), '羽衣' (Hori), '鉄輪' (Tetsurin), '弱法師' (Jyaku-hōshi), '定家' (Sadaie), '隅田川' (Sumida-gawa), '恋重荷' (Koishikage), '清経' (Kiyonaga), '熊野' (Kumano), '巻絹' (Maki-no), '野宮' (No-miya), '雲林院' (En'in-in), '独吟' (Dokugin), '花筐' (Hanakago), '仕舞' (Shimai), '敦盛' (Tsunetaka), '龍田' (Ryūden), '松風' (Matsukaze), '紅葉狩' (Kiyomizu-gari).

名古屋能楽堂定例公演

六月九日(金) 午後六時開演
名古屋能楽堂

船渡聲 シテ 井上 靖浩 アド 井上菊次郎
狂言 後見 衣斐 愛 地謡 竹内 淳一 稲川 寿一
高野物狂 高安 勝久 河村総一郎 竹市 学
(宝生流) 衣斐 正宜 杉江 元

四世野村小三郎 斯道三十周年記念 第五回 狂言三の会
六月十日(土) 午後七時開演
名古屋能楽堂
入場料 前売一般 三五〇〇円(当日四〇〇〇円)
学生前売 二〇〇〇円(当日二五〇〇円)
取り扱い所 名古屋能楽堂(052-231-0088)
ナディアパーク8階プレイガイド(052-265-2015)
チケットぴあ(0570-02-9999)
市内プレイガイド

越後聲 野村小三郎
野村信朗 野村小三郎
野村又三郎 野村健太郎
野村 萬斎

日本芸術院賞

観世流 野村四郎師受賞

日本芸術院は、芸術活動の功績を顕彰する今年度の日本芸術院賞を発表、能楽界から野村四郎師を表彰した。

18年度は年7回公演 名古屋能楽堂定例公演

能楽普及事業実行委員会主催、能楽協会名古屋支部協賛による「名古屋能楽堂定例公演」の平成十八年度の開催日程、演目は次のとおりである。

- 6月公演 6月9日(金) 午後6時30分始
能「高野物狂」衣斐正宜(宝生流)
狂言「船渡舞」井上靖浩(和泉流)
7月公演 7月7日(金) (市民能楽セミナー) 午後6時30分始
能「安達原」梅田嘉宏(観世流)
狂言「簾扇」佐藤友彦(和泉流)
9月公演 9月3日(日)
狂言「三本柱」井上菊次郎(和泉流)
能「竹生鳥」観世喜正(観世流)
10月公演 10月27日(金) 午後6時30分始
能「景清」久田勘助(観世流)
狂言「内沙汰」井上菊次郎(和泉流)
12月公演 12月3日(日) 午前11時始
能「鉢木」泉嘉夫(観世流)
能「百萬」衣斐愛(宝生流)
半能「石橋」古橋正邦、梅田嘉宏(観世流)
狂言「棒縛」佐藤融(和泉流)
正月特別公演 1月3日(水) 午後2時始
能「翁」長田暁(喜多流)
狂言「三本柱」井上菊次郎(和泉流)
能「竹生鳥」観世喜正(観世流)
3月公演 3月9日(金) 午後6時30分開演
能「海士」片山清司(観世流)
狂言「花折」野村又三郎(和泉流)
入場料(正月特別公演を除く) 一般3500円、学生2000円
正月特別公演は、一般4500円、学生2000円
当日券は500円増、チケットは原則として公演日の2ヶ月前から発売。
取り扱い 名古屋能楽堂(052・231・0088) チケットぴあ(0570・02・9999) 市内プレイガイド。

戦後名古屋能楽史 (第十七章) 昭和三十八年(一九六三)

竹尾 邦太郎

一月二日、大久手の先生の愛称で親しまれる幸清流小鼓方の重鎮田鍋惣太郎宅での恒例の打初は第五十三回。

一月六日、第七回学生能と狂言の会は自演の部に続き鑑賞の部。仕舞「八島」柴田取武、舞囃子「胡蝶」片岡道子、狂言「重喜」佐藤秀雄、能「鉢木」内藤泰二、高安滋郎。同日、能画の第一人者で各地の鏡板の揮毫も二十余面、また、文章を能くし「私の思出」(檜書店・昭和二十六年十一月十日刊)などの著書もある松野奏風が当地名古屋で客死する。享年六十二歳、月岡耕漁(一八六九—一九二七)門。因に現在の名古屋能

ナディア狂言 第8回公演

名古屋の若手狂言師たちによる公演「ナディア狂言」は、6月16日(金)名古屋市中区のアートピアホール(ナディアパーク11階)で第8回公演を行う。演目は、「靱猿」(佐藤融、井上靖浩、鹿島俊裕、寺田勝哉)、「犬山伏」(今枝靖雄、今枝郁雄、林泰礼、犬?)

は政談に關係なく国家平和を納めるには、芸術文化が第一、昨秋九州旅行の時も、其国の芸術・文化・音楽を第一に鑑賞して、其後に政談致し、フランス・イタリその他の国でも皆スムーズに談合出来て大変効果がありました。今後世界平和にも第一に芸術文化の必要を痛感致しました。此際是非共來の皆様に国家平和のために御協力を御願いするとの御言葉で、参会者一同も悦んで御受申しました次第です。

能楽の連中皆丁度首相壇上のすぐ前にてよく承りました。其次ぎ、美術関係(絵画・彫刻・其他)文芸(創作・評論・其他)芸能(音楽・舞踊・映画・演劇・其他)文化(各種文化団体)以上代表者の挨拶あり、最後に能楽代表・宝生九郎氏発声一同首相萬歳を三唱して終了、其後各々歓談、私其席上にて他の芸能の方々と歓談、各芸能者は今後国内の方だけでなく海外の方々に芸の真髄を理解鑑賞して貰う様に一段の研究が

熱田祭協賛 奉納 能

六月五日(月) 午前十時始 熱田神宮能楽殿

- 鬼頭 京子
愛 能 (宝生流)
衣斐 正樹
高安 勝久
飯富 雅介
野村又三郎
河村総一郎
船戸昭弘
竹市 洋輝
竹生鳥
後見 竹内 澄子
玉井 博祐
和久 莊太郎
内藤 飛能
村上 茂
賢治 水川 壽一
久野 淳一
幸三 衣斐 正宜
佐藤 耕司

名古屋観世会定式能

六月十一日(日) 十二時半開演 名古屋能楽堂

- 観世 喜正
親世 喜之
宝生 欣哉
河村 大
後藤 孝一郎
藤田六郎兵衛
久田 勘助
小島 一英
地謡 須部 勲
清沢 清一
梅田 嘉宏
梅田 邦久
正邦
狂言 悪坊
佐藤 友彦
大野 弘之
後見 今枝 靖雄
仕舞 雲雀山
船橋 高橋 敏彦
加賀 敏彦
地謡 武田 大志
祖父江 修一
梅田 嘉宏

花月

田中 春奈
能 (金剛流)
河村総一郎
鹿取 希世
後藤嘉津幸
野村小三郎
百々 康治
吉岡 美紀
大川 磨美
伊藤 雅子
鈴木 昌夫
陽子
羽多野 良子

阿漕

- 長田 郷
能 (喜多流)
飯富 雅介
寛 敏一
柳原富司忠
竹市 洋輝
井上菊次郎
加藤 領一
和谷 衡市
後見 加藤 誠子
地謡 松井 俊介
高林 呻二
平塚 昭子
福田 勝
栗田 浩之

名古屋宝生会定式能(第250回)

六月十八日(日) 午後一時始 名古屋能楽堂

- 佐野 前
飯富 雅介
河村総一郎
後藤 孝一郎
藤田六郎兵衛
後見 倉本 雅
地謡 石森 智幸
稲川 壽一
玉井 博祐
地謡 大森 賢治
寺井 良雄
鬼頭 京子
久野 幸三
和久 莊太郎

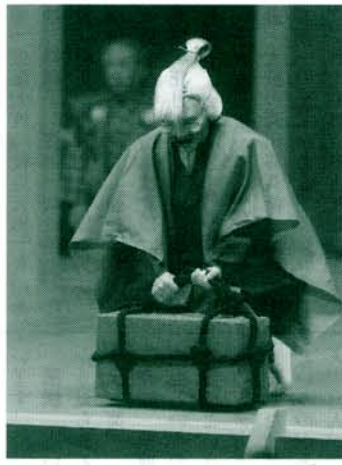
野守

- 辰巳満次郎
高安 勝久
河村真之介
鬼頭 義命
後見 寺井 良雄
地謡 竹内 正文
佐藤 耕司
和久 莊太郎
辰巳大二郎
村上 淳一
内藤 飛能

附祝言
「有料」当日券八〇〇〇円
お問い合わせ・お申込み
名古屋市昭和区台町2-16-15
TEL・FAX 052(841)4632

附祝言
「入場無料」
お問い合わせ
後援 能楽協会名古屋支部
熱田神宮奉賛会
支部長 梅田 邦久
TEL・FAX 052(841)4632

（③面よりつづき）
と長柄の橋で、貴賤の人に行き逢ひの、ところは、杖を欄干に見立て左手で擦ってワキの方へ行き、突き当たる心になち／＼退ると、へげにも真の弱法師とて、と激しく杖を突き、へ人は笑ひ給ふぞや、と脇柱の方へ杖を水平に伸ばして指廻し、へ思へば恥かしやな、と大小前に下居、へ狂ひ候はじ、と杖を置く。父と再会のキリは、胸うち騒ぎ、と左手胸に当て、へ親ながら恥して、袖屏風に面を隠して立ち、逃げるころを父の右手に左肩取り抑えられ、こゝに父と対面、ほのぼのと暖かな親子の情愛も一入。アイ供人（千五郎）の送り込みでワキのユウケン留、シテに遊狂の心持もよく現われていた。（1時間3分・3月18日・豊田市能楽堂定期公演）



「恋重荷」片山九郎右衛門 撮影 杉浦賢次氏
腰を落とす落胆のシヨリ。東の間、高嶺の花を恋う自惚は、塵の浮世に長らへて、とシラッとして立つと常座へ。時が移るのも気懸り

「恋重荷」偶然目撃した女御（ツレ嘉志）が忘れられぬ賤しい菊守（シテ九郎右衛門）、それを仄聞した女御は臣下（ワキ雅介）を介し卑劣な手段で菊守を玩弄。荷を持ち上げることに出来ず憤死の菊守は怨み骨髄に徹し、鬼となつて女御に祟るが、跡弔われる約束のもと、苦惱の菊守は悔悟の女御と共に解放される。
前場、秘めた恋慕を知られ、重荷を持ち庭を百度千度回ればツレの姿が拝まれるというワキの言に決意するシテ、問答に緊迫感横溢。番組に記載のない「彩色」の小書で、巷に人の迷ふらん、の後のイロエは歩行のうちに思案を整えるためか。へ名も理や（恋の重荷）、と右、左と縄を握るも（写真）へげに持ちかかぬ、とや、照ル面の放心状態は、この身、を嘆

金春流能「阿漕」上演

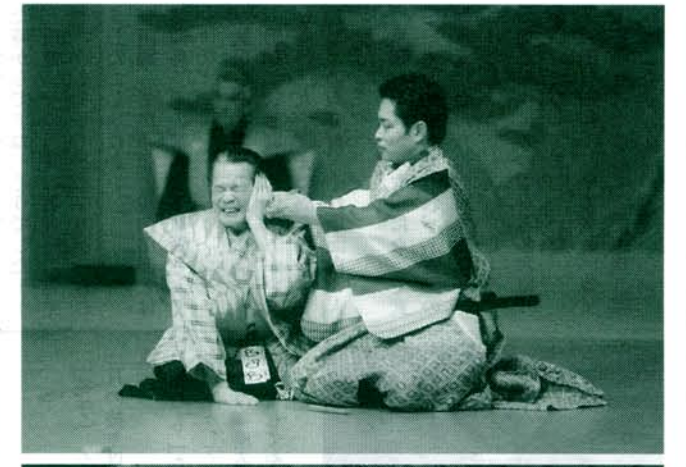
7月22日豊田市能楽堂

謡曲「藤橋」について

①面所報の謡曲「藤橋」は、約150年前に高山市の旧家で原本が発見されたという。（中日新聞岐阜県版）旧神岡町が2002年に町無形文化財（現在は飛騨市無形文化財）に指定した

豊田市能楽堂の7月定期公演は、7月22日開催される。能組は次のとおり。
仕舞（金春流）「花筐」（吉場廣明）
狂言（和泉流）「柑子」（シテ野村万作、アド野村万之介）
能（金春流）「阿漕」（シテ本田光洋、ワキ飯富雅介、アイ深田博治）

午後2時開演。
入場料 全席指定・正面席600円 脇・中正面席4000円
チケット販売／豊田市能楽堂（TEL0565・35・8200）
チケットぴあ（TEL0570・02・9999）



④「寝音曲」左より野村又三郎、野村小三郎 邦謡会能
⑤「道成寺」赤頭 梅田邦久 邦謡会能（杉浦賢次氏撮影）

の心象がそれぞれの囃子の一調に反映、活写される。小鼓一調に時々の笛のアシラヒが、乱拍子の緊迫感に涼風を吹き込むが、小鼓の一騎打ちにはシテの真剣勝負、小書で中之段以後、ワカの間にも一度右廻りに小さく鱗形を描くところ、へ始めて伽藍、と力強く語ったあとの荒い息遣いに体力の消耗の度合いを知る。へ成寺とは、で、くるりと鐘へ向きを変えたように見たが小書「無調之崩」だったろうか。急之舞になつて息を吹き返したかの様な活々とした力強さに手練（てだれ）の面目、鐘もきれいに入る。
後場は鐘が上がるのと白綾を被って蹲るシテ、被衣をはねて立ち、腰に巻くとイノリ。赤頭に面白般若、着付の浅黄地金鱗箔を白地にやや大きい鱗の箔に替え、腰巻は緋長袴に替えて凄味をみせる。ワキに追われ橋懸で鱗箔シ、一瞬身軽になつたのを確めるように止まると、緋長袴を巧みに捌いてするりと幕際へ。そこから反撃に出、扇（あふ）をやかな柱巻にワキを威嚇、脇高安流は片膝をつき頭上で数珠を揉む。キリは折り伏せられ一ノ松へ逃げ、へ鐘に向つて吐く息は、と胸杖に鐘を怨めしげに見込み、緋長袴にイメージする猛火に追われる様に地を蹴して走り、一つ飛んで幕へ入り、脇正へ出たワキが威嚇をみせ大きくユウケンして留。大倉流宗家源次郎の後見で敦史史を立派に勤めさせた。（1時間51分・4月1日・第28回邦謡会能）

に（重くとも）思ひは捨てじ、と臍を決して正面を見据え、石にさえへ立つ矢のあるぞかし、と語気強め、重荷を見込む気迫も凄じく、へいかにも軽く持たうよ、と自己暗示をかけるのも切ない。二度目は、へしめちが腹立や、と悲痛な叫びは、由なき恋、に己が無力、下居に膝を抱く、へ独寝の、苦しさを、これをバネに気を取り直し、立つとツツツと重荷へ寄り、この度は中腰でへ持てども、と縄へ両手を掛け引き上げんとするも、微動だにしない無念に膝を打つと、へ（そも恋は）何の重荷ぞ、と首を左に振って重荷を睨め付け、へ憐れでふ、と脱力感に顔（くすむ）れる様に左膝から落ちて安座双シヨリ。仕打ちが残酷なだけにシテの胸中は怒りより寧ろ深い哀しみに思われ、へ恋の乱れの絶え果てぬ、とゆくりシヨリ解くと一呼吸あり中入地（慶次郎・邦弘ら）。へ報はばそれぞ人心、で静かに立つと一寸間があつてサツと背を向け、する／＼と速度を早め入。憤怒を足に表わす様にはなかつたが、心を弄ばれたシテの心象が写実の精妙と微妙な間（ま）に表わされ秀抜。

守の莊司ノ亡霊、面重荷悪尉・白頭・無紅厚板着付・紺地半切・金地法被・鹿背杖。ツレの戯れをきつく糾弾、へ嚴の重荷持たる、ものか、と睨めつける凄味は立廻に金縛りのツレに寄り、地団駄踏むかの拍子二ツ右肩押えつける怖さ。へ玉櫛畷傍の山の山守も、では肺腑から絞り出す様な声に恨みの深さを、へ衆合地獄の、と鹿背杖に纏る様に膝をつくところには重い責苦をみせる。キリは、へ思ひの煙立ち別れ、と踏む二ツ拍子にツレの金縛りが解け、へ山風吹き乱れ、と激しく頭を振るところには恋路の昏迷が、へ霜か雪か霞か、の面使には終には消える恨みが、見事に象徴されて素晴らしい。囃子は学・富司忠・総一郎・慎也、後見に清司・道喜。（1時間12分）

「寝音曲」因らずも主・小三郎に謡を聞かれた太郎冠者シテ又三郎、事ある毎に強要されては敵わんと、飲まずには謡えないの予防線。が、その条件あつたり通れば飲むうちに一策。妻の膝枕でない声が出ないと抵抗するが、主に膝を貸されては唯々頑なに主の膝枕で謡うのみ。我意儘ならなかつた少々自棄くそ気味の雰囲気が酔もあつて次第に調子づき、籠が外れてくる辺り、謡の旨さはあらかしその巧み。最初が小舞謡は習物の「春雨」、次はへ飲めば甘露も、

「鈍太郎」下京狂言座に妻（融、上京笛前）には妾（雄雄）、兩人、三年も無音だった鈍太郎シテ友彦の不実を責め、戸を叩かれても若し衆の悪戯、と取り合わず、果てはそれ／＼薙刀使い。棒使いを夫に持ったと逆に威せば、シテは腹巻せに出家遁世。世間体を慮り、止めるよう懇願する二人に、こごと丸め込み、「所への外間ぢや、兩人の手車に乗って行かう」と、すっかり凱旋旋取り、へ鈍太郎殿が手車、と囃させて己れを誇示させる厚顔。若い妾と年増の妻、応対の仕方にも男のエゴが露骨で美味だが、若手二人を手玉に取るシテは気持ちよかる

う。因に「鈍」には「かたくな」「がんど」の語義も（『漢語林』一九八七年・大修館書店刊）。鈍太郎の個性を表わしていよう。（34分）
「鈍太郎」に続くこちらも男のエゴ（？）かも知れないが内容は深刻。訴訟のことで在京三年の芦屋某（ワキ雅介）、年末に帰省のこと召使の夕霧（ツレ雅二）に言付ければ、これ迄の無音を詰る妻（シテ修二）、折柄聞こえる音が碇掃つ音と知らされ、唐は胡国に抑留された蘇武に故郷の妻子の掃つ碇の音が届いた故事を思い出し、做つて碇を掃とうという。物着に脱ぎ下ケ姿となり、作物が脇腹前に出ると碇の段。碇掃つ音に吹き下ろす松籟を聞く薄く伏せた面をへ夜寒を風や知らずらん、とツレに向かいすつと上げるところ、蘇武が旅寝は北の国、以下の夫に恋着する切々たる心情は、へ西よりに来る秋の風の、と幕へ眺めるところ、へ君がそなたに吹けや風、と胸指シに拍子一ツ踏むところ、など怨慕的確に表わされる。へ碇の音夜風悲しみの声、以下も吉之丞・猶義らの濃やかな愁いを含む滑らかな地がシテのそれぞれの型の心持ちによく副い、へほろ／＼はら／＼の哀感も一入なら、夫の暮の帰省が叶わぬと知るクドキに、へさては早、と不信ががくく腰を落し安座双シヨリの愁嘆も怨みの深さ。へ思はじと思ふ心も弱るかな、の打切にツレの介添で立つと、運ぶうちに沈痛な中入地となり、ツレもシテの後から橋懸へ。へ（病の床に）伏し沈み、でシテが静かに幕へ入ると、ツレも返シ句を残して入る。陰々滅々の雰囲気の中、ワキの下人（アイ菊次郎）が立シヤベリにしんみり此の度の経緯を語り、横板からワキを呼び出すと、ワキは何事もなく出る。前の素袍袴を白大口に替え、掛絡を着けて水晶の数珠をもち、亡妻の縁（よすが）の碇（作物）を正面に据えて弔い、梓弓（口寄せの手段）で後シテ亡妻ノ霊を呼び出す。

後シテは面深井を泥眼に、襟浅黄を白二に、露芝文白摺箔の着付を唐花七宝文白摺箔に、段秋草文無紅唐織着流シを浅黄大口に白綾壺折に、それぞれ替えて杖を突き出る。クドキに、へ打てや打てやと、語気荒くワキにアシラフところ、生前の執心の深さゆえ獄卒に若て碇掃つ様に打たれるのも、因果の妄執、とシヨルのも痛々しげ。シヨリのま、二・三歩出ると、へ涙は却つて火焔となつて、で避ける様になじ／＼と退りへ胸の煙の、と胸杖、面を伏せ耳を澄ますが聞えるのはへ呵責の声（のシテ修二）、と杖を手放す音を重ね、へ恐ろしや、と退つて両手で耳を蔽い、蹲る様に下居、きび／＼とした型が美しい。扇を手にして立つと後見は作物と杖をひき、へ羊の歩み、と遅かれ早かれ行く六道へ行きかねる今、恨みは虚言、とワキをなじるうち心憐れ進、へ君いかなれば旅杖、とワキへ強く迫つて膝をつき、開いた扇でへ夜寒の衣、と強く床を打てば、ワキは圧倒されて思はず尻餅をつき、合掌するところは凄まじい迫力で見所もたじろぐ程、キリはへ法華説誦の、の返シ句に立ち、へ菩提の種、と合掌すると返シ句に扇開き右ウケで留めた。囃子は誠・啓次郎・総一郎、主後見は善高。孤愁を託つ女人の内面を鋭く抉る好舞台だった。（1時間33分）

「羽衣」シテ小松勝彦。ワキ勝久、名宣あと、海浜を叙景するへ万里の好山、以下へ釣人多き小舟かな、までを省き、直ぐ「我三保の松原に上り」になる。シテは面増・天冠・襟白二・白地青海波地紋花筏鬘斗笠摺箔（着付・紫地藤立湧松文縮腰巻の裳着制姿）羽衣を取られ、へ天路を開けば懐かしや、とスミで右上方を眺めるところ、へ（春風の）空に吹くまで懐かしや、とシヨルところ、切なげな風情が中々。ワキが羽衣を返すと「あら嬉しや」と踏み出すところも逸る気が初々しい。物着に赤地ベタ金の芭蕉葉文の華麗な長絹を着けると、ワキとの掛合にへ舞ふとかや、が如何にも喜悅。序ノ舞三段、慎重に舞うという印象で、晴朗の気は聊か欠けるのでは、と思われた。（1時間・4月2日・名古屋梅猶会定期能）

①面所報の謡曲「藤橋」は、約150年前に高山市の旧家で原本が発見されたという。（中日新聞岐阜県版）旧神岡町が2002年に町無形文化財（現在は飛騨市無形文化財）に指定した
大意は、町中心部を流れる高瀬川に掛かる「藤橋」を訪れた僧が戦国時代に逆臣に討たれた家族・江馬時盛の妻・明石の亡霊に会い読経して成仏させるといふ筋。
旧神岡町と藤橋会が2003年に実行委員会をつくり、野村四郎師に依頼して作能された。

後場、下人（アイ菊次郎）が立シヤベリに恋に高下の隔である故の悲劇淡々と語り、殿上人側の立場を印象づけ、シテの死を悼むワキ語の沈痛な趣も光る。後シテは菊

守の莊司ノ亡霊、面重荷悪尉・白頭・無紅厚板着付・紺地半切・金地法被・鹿背杖。ツレの戯れをきつく糾弾、へ嚴の重荷持たる、ものか、と睨めつける凄味は立廻に金縛りのツレに寄り、地団駄踏むかの拍子二ツ右肩押えつける怖さ。へ玉櫛畷傍の山の山守も、では肺腑から絞り出す様な声に恨みの深さを、へ衆合地獄の、と鹿背杖に纏る様に膝をつくところには重い責苦をみせる。キリは、へ思ひの煙立ち別れ、と踏む二ツ拍子にツレの金縛りが解け、へ山風吹き乱れ、と激しく頭を振るところには恋路の昏迷が、へ霜か雪か霞か、の面使には終には消える恨みが、見事に象徴されて素晴らしい。囃子は学・富司忠・総一郎・慎也、後見に清司・道喜。（1時間12分）

「鈍太郎」下京狂言座に妻（融、上京笛前）には妾（雄雄）、兩人、三年も無音だった鈍太郎シテ友彦の不実を責め、戸を叩かれても若し衆の悪戯、と取り合わず、果てはそれ／＼薙刀使い。棒使いを夫に持ったと逆に威せば、シテは腹巻せに出家遁世。世間体を慮り、止めるよう懇願する二人に、こごと丸め込み、「所への外間ぢや、兩人の手車に乗って行かう」と、すっかり凱旋旋取り、へ鈍太郎殿が手車、と囃させて己れを誇示させる厚顔。若い妾と年増の妻、応対の仕方にも男のエゴが露骨で美味だが、若手二人を手玉に取るシテは気持ちよかる

う。因に「鈍」には「かたくな」「がんど」の語義も（『漢語林』一九八七年・大修館書店刊）。鈍太郎の個性を表わしていよう。（34分）
「鈍太郎」に続くこちらも男のエゴ（？）かも知れないが内容は深刻。訴訟のことで在京三年の芦屋某（ワキ雅介）、年末に帰省のこと召使の夕霧（ツレ雅二）に言付ければ、これ迄の無音を詰る妻（シテ修二）、折柄聞こえる音が碇掃つ音と知らされ、唐は胡国に抑留された蘇武に故郷の妻子の掃つ碇の音が届いた故事を思い出し、做つて碇を掃とうという。物着に脱ぎ下ケ姿となり、作物が脇腹前に出ると碇の段。碇掃つ音に吹き下ろす松籟を聞く薄く伏せた面をへ夜寒を風や知らずらん、とツレに向かいすつと上げるところ、蘇武が旅寝は北の国、以下の夫に恋着する切々たる心情は、へ西よりに来る秋の風の、と幕へ眺めるところ、へ君がそなたに吹けや風、と胸指シに拍子一ツ踏むところ、など怨慕的確に表わされる。へ碇の音夜風悲しみの声、以下も吉之丞・猶義らの濃やかな愁いを含む滑らかな地がシテのそれぞれの型の心持ちによく副い、へほろ／＼はら／＼の哀感も一入なら、夫の暮の帰省が叶わぬと知るクドキに、へさては早、と不信ががくく腰を落し安座双シヨリの愁嘆も怨みの深さ。へ思はじと思ふ心も弱るかな、の打切にツレの介添で立つと、運ぶうちに沈痛な中入地となり、ツレもシテの後から橋懸へ。へ（病の床に）伏し沈み、でシテが静かに幕へ入ると、ツレも返シ句を残して入る。陰々滅々の雰囲気の中、ワキの下人（アイ菊次郎）が立シヤベリにしんみり此の度の経緯を語り、横板からワキを呼び出すと、ワキは何事もなく出る。前の素袍袴を白大口に替え、掛絡を着けて水晶の数珠をもち、亡妻の縁（よすが）の碇（作物）を正面に据えて弔い、梓弓（口寄せの手段）で後シテ亡妻ノ霊を呼び出す。

後シテは面深井を泥眼に、襟浅黄を白二に、露芝文白摺箔の着付を唐花七宝文白摺箔に、段秋草文無紅唐織着流シを浅黄大口に白綾壺折に、それぞれ替えて杖を突き出る。クドキに、へ打てや打てやと、語気荒くワキにアシラフところ、生前の執心の深さゆえ獄卒に若て碇掃つ様に打たれるのも、因果の妄執、とシヨルのも痛々しげ。シヨリのま、二・三歩出ると、へ涙は却つて火焔となつて、で避ける様になじ／＼と退りへ胸の煙の、と胸杖、面を伏せ耳を澄ますが聞えるのはへ呵責の声（のシテ修二）、と杖を手放す音を重ね、へ恐ろしや、と退つて両手で耳を蔽い、蹲る様に下居、きび／＼とした型が美しい。扇を手にして立つと後見は作物と杖をひき、へ羊の歩み、と遅かれ早かれ行く六道へ行きかねる今、恨みは虚言、とワキをなじるうち心憐れ進、へ君いかなれば旅杖、とワキへ強く迫つて膝をつき、開いた扇でへ夜寒の衣、と強く床を打てば、ワキは圧倒されて思はず尻餅をつき、合掌するところは凄まじい迫力で見所もたじろぐ程、キリはへ法華説誦の、の返シ句に立ち、へ菩提の種、と合掌すると返シ句に扇開き右ウケで留めた。囃子は誠・啓次郎・総一郎、主後見は善高。孤愁を託つ女人の内面を鋭く抉る好舞台だった。（1時間33分）

「羽衣」シテ小松勝彦。ワキ勝久、名宣あと、海浜を叙景するへ万里の好山、以下へ釣人多き小舟かな、までを省き、直ぐ「我三保の松原に上り」になる。シテは面増・天冠・襟白二・白地青海波地紋花筏鬘斗笠摺箔（着付・紫地藤立湧松文縮腰巻の裳着制姿）羽衣を取られ、へ天路を開けば懐かしや、とスミで右上方を眺めるところ、へ（春風の）空に吹くまで懐かしや、とシヨルところ、切なげな風情が中々。ワキが羽衣を返すと「あら嬉しや」と踏み出すところも逸る気が初々しい。物着に赤地ベタ金の芭蕉葉文の華麗な長絹を着けると、ワキとの掛合にへ舞ふとかや、が如何にも喜悅。序ノ舞三段、慎重に舞うという印象で、晴朗の気は聊か欠けるのでは、と思われた。（1時間・4月2日・名古屋梅猶会定期能）

発行能楽の友社

名古屋市中千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-7984
FAX (052) 733-2837
振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1100円
郵送の場合 1年 1800円
部 100円

NHK放送予定(平成18年6月~7月)

NHK-FM能楽鑑賞(毎週日曜日午前7時15分~8時)
6月25日 「鶏飼」(再)(親世流) 泉泰孝ほか
7月2日 「三井寺」(親世流) 野村四郎ほか
7月9日 「船弁慶」(喜多流) 香川靖嗣ほか
7月16日 「天鼓」(親世流) 井上嘉介ほか
7月23日 「氷室」(再)(宝生流) 前田春啓ほか
7月30日 「八句連歌」(柿山伏)(大蔵流) 大蔵吉次郎ほか
NHK教育テレビ(7月15日午後3時~5時)
能 「鷓鴣小町」 シテ豊嶋三千春

能楽の友

熱田神宮能楽殿

おわかれ能楽大会
10月25・26日参加者を募集

戦災による焦土のなかから能楽の伝承発展の新しい拠点として熱田神宮能楽殿が昭和三十年創立され、以来四十有余年にわたって親しまれてきたが、諸施設の老朽化などの理由で今秋閉鎖されることになった。能楽協会名古屋支部(梅田邦久支部長)は、長年にわたる想い出深い熱田能楽殿の最後を記念して、一般能楽愛好者として

能も薪も

8月18日 豊田市美術館

豊田市能楽堂主催の「ころも薪能」は、八月十八日(金)豊田市美術館庭園で開催される。午前六時開場、午後七時開演(雨天の場合豊田市民文化会館大ホール)

能狂言をもっと面白くする講座

豊田市能楽堂

豊田市能楽堂では、「能狂言をもっと面白くする講座」として、今年も好評にこたえて全四回シリーズのユニークな講座を次の日程で開催する。
7月23日(日) 行ってみたい新能・野外能・火と風と名所と
講師/親世流シテ方大槻文蔵氏、写真家・三上文規氏
9月23日(土・祝) 能に活かされた百人一首の名歌の背景と広がり(全日本カルタ競技会入賞)

熱田神宮能楽殿

「おわかれ能楽大会」

参加単位はグループ三単位まで(一単位三十分、参加費一単位五千円)
募集締切りは七月末日まで、協会支部の先生を通じて申込みを提出してもよい。
なお番組は、八月下旬に作成、各出演グループに通知される。
社中会、同好会、グループ、素謡、舞囃子、狂言、仕舞、連吟など随意、多数の参加出演が期待される。
詳細、問い合わせは(電話052-832-1031) 能楽協会副支部長・柳原富司氏方。

参加者募集のお知らせ

すでに熱田神宮宮内よりお知らせがありました熱田神宮能楽殿閉鎖にあたり、能楽協会名古屋支部として、長年の想い出深い能楽殿の最後を記念し「おわかれ能楽大会」を左記の日程で開催することとなりました。
つきましては、一般能楽愛好家を含んだ多くの方々の参加で能楽殿の最後を飾りたいと思います。多くの方々に参加をいただくようご案内申し上げます。
能楽協会名古屋支部

募集要項

一、日時 平成十八年十月二十五日(水)、二十六日(木)の二日間
両日も午前十時から午後六時まで
二、参加グループ名または会名
指導先生名または代表者氏名
三、演目種類と曲目・出演者氏名(例 熊野 名古屋太郎)
四、参加単位(一単位二十分 参加費一単位五千円です)
一グループ三単位までとさせていただきます
五、参加グループまたは会の責任者 住所・氏名・電話番号
六、参加希望 日時・時間(日時から時まで)
以上すべてを明記のうえ、封書にて〒460-0033 名古屋市中千種区台町2-116-15 梅田邦久方「熱田神宮能楽殿おわかれ能楽大会」係宛へお送り下さい。
締切りは平成十八年七月末日まで必着とします。
ただし、応募者多数の場合は、十月二十四日(火)へ変更させていただきます。
また能楽協会名古屋支部の先生を通じて提出していただいても結構です。なお番組は、八月下旬作成し、各出演グループへお知らせする予定です。多くの方々のご出演を期待しています。
なお、参加費以外の経費については、ご出演者の負担とさせていただきますので、ご了承下さい。
詳細お問い合わせは、副支部長 柳原富司氏方
TEL 052-832-1031 にお願ひします。
(携帯) 090-3307-4474

名古屋能楽堂7月定例公演

市民能楽セミナー

七月七日(金)午後六時半開演
名古屋能楽堂
狂言 蝸牛
山伏 野村小三郎
主 野村又三郎
飯富 雅介
河村真之介
後藤孝一郎
藤田六郎兵衛
野村小三郎
梅田邦久
飯富 雅介
河村真之介
後藤孝一郎
藤田六郎兵衛
野村小三郎
梅田邦久
飯富 雅介
河村真之介
後藤孝一郎
藤田六郎兵衛
野村小三郎

主催 名古屋市中千種区千種2丁目18-18
能楽協会名古屋支部
入場料 前売一般 二五〇〇円(当日三〇〇〇円)
学生前売 一五〇〇円(当日二〇〇〇円)
取り扱い所 名古屋能楽堂(052-231-0088)
チケットぴあ(0570-02-9999)
ナビアパーク8階プレイガイド
(052-265-2015)
七月九日(日)午後一時三十分始
名古屋能楽堂
狂言 狂言組
大鼓 寛 敏一
太鼓 鬼頭 義命
小鼓 福井四郎兵衛
笛 大野 誠
素囃子 下り端
大鼓 寛 敏一
太鼓 鬼頭 義命
小鼓 福井四郎兵衛
笛 大野 誠
狂言 佐渡狐
奏者 野村 萬
越後のお百姓 野村 扇丞
後見 吉住 講
狂言 宗論
浄土僧 佐藤 友彦
法華僧 佐藤 融
宿屋 大野 弘之
後見 井上菊次郎
小舞 貝尽し
野村又三郎
地謡 野村小三郎
松田 高義
小舞 海人
野村 万作
地謡 野村小三郎
井上 靖浩
狂言 濯ぎ川
原作 飯沢 匡
演出 武智 鉄二
姑 茂山千之丞
夫 茂山あきら
女房 茂山 童司
後見 丸石やすし
(休憩 十分)

狂言 鬪罪人
太郎冠者 井上菊次郎
主人 井上 靖浩
町内の衆 鹿島 俊裕
大野 弘之
今枝 政行
後見 佐藤 友彦
(終演予定 十七時頃)
主 狂言 共同社
[会員券]
S席 8000円
A席 6000円
B席 4000円(当日券は1000円増)

小鼓にみる 美 詩 絵 の 美

6月17日~7月9日 鶴岡市で開催

能楽小鼓方大倉流十六世宗家・大倉源次郎師は、このたび山形県鶴岡市の致道博物館主催により、「小鼓にみる詩絵の美」と題する鼓・生田コレクシヨンの展示会を六月十七日から七月九日まで開催する。

この展示会で公開される生田コレクシヨンの鼓筒は、明治大正

期、大阪麦酒(現アサヒビール)の創業に際し、醸造技術の責任者であった生田秀氏と長男耕一氏を中心に蒐集された貴重なコレクシヨンの、阿古、女阿古、多武峯、南音羽、南折居、北下居、道本といった室町期から江戸初期にかけての代表的な作者の作品を展示。

大倉源次郎師は、致道博物館で生田コレクシヨンを公開するとうい機会を得、展示だけでなく地元黒川能に伝わる鼓筒の併設展示(交渉中)とその共同研究会などより幅広く深く、小鼓の世界を知って頂く機会になれば喜ばしい」とあいさつしている。

なお七月四日には、シンポジウム「小鼓を語る」のテーマで生田コレクシヨンの蔵主・生田秀昭氏、能楽小鼓方・大倉源次郎氏らが出演する。

書籍案内

「新砧の音」

福森英一郎著

謡曲愛好者のついで「栄謡曲クラブ」の月例読書の会員として参加している桑名市在・福森英一郎氏は、同クラブの例会案内に毎回「能」に関わる随想を寄せているが、このほどこの寄稿をまとめ加

除修整して「新砧の音」能を絡めた随想」として上梓した。(平成八年に「砧の音」を刊行)

A5判、205頁

※著書のご厚意により、印刷部数に若干の余裕があるので、能楽の友の読者の希望により頒布できるところとで、ご要望の方は、ハガキ、又は電話・FAXで能楽の友社へご連絡下さい。(電話052・731・7984)

戦後名古屋能楽史

〔第十七章〕

昭和三十八年(一九六三)

竹尾 邦太郎

「名古屋観世会を語る」出席者は武田太加志・大槻秀夫・柴田初太郎・林甲子夫・鬼頭五朗・田鍋惣太郎、司会前西芳雄

「名古屋観世会の発足」というのはいつ頃ですか。

柴田 観世会が私林恩蔵君と一緒に手がけてきたものです。そ

二十五世観世左近十七回忌追善 名古屋観世会定式能

七月十六日(日) 十二時半開演

名古屋能楽堂

連吟 江口 星野 路子 今沢 美和
三村 徳布 熊沢 恵美子
生駒 里翠 近藤 幸江
久田 三津子 前野 郁子

舞踊子 海士 観世 芳伸 寛 鉦一 鹿取 希世
後藤 嘉津幸 加藤 洋輝

観世 芳宏 大倉源次郎 藤田 六郎兵衛
河村 総一郎 助川 治

観世 清和 宝生 閑 河村 総一郎 助川 治
梓之出 則久 英志 佐藤 友彦

狂言 呂蓮 藤戸 片山 九郎右衛門
片山 清司 地謡 松山 幸親 古橋 正邦
梅田 嘉宏 片山 九郎右衛門
清沢 一政 梅田 邦久
祖父 江修一 梅田 邦久

後見 久田 勘助 地謡 梅田 嘉宏 片山 九郎右衛門
観世 芳伸 梅田 嘉宏 片山 九郎右衛門

狂言 呂蓮 藤戸 片山 九郎右衛門
片山 清司 地謡 松山 幸親 古橋 正邦
梅田 嘉宏 片山 九郎右衛門
清沢 一政 梅田 邦久
祖父 江修一 梅田 邦久

能 鶴 観世 鏡之丞 柳原 富司忠 竹市 学
真如 之月 飯富 雅介 河村 眞之介 鬼頭 義命

後見 小島 一英 地謡 須部 勲 祖父 江修一
梅田 邦久 高橋 敏彦 久田 勘助
梅田 邦久 高橋 敏彦 久田 勘助

主催 名古屋観世会
当日券 一〇〇〇円

たのが昭和二十六年です。

鬼頭 商工館で発会式をやりましてね。

柴田 駅前の愛知県商工館で、お家元と華雪先生御出席のもとに当時の会員二十五名が集って設立総会を開き「名古屋観世会」を創立したのです。会長に宗家、顧問に華雪先生をお願いし、発足しました。忘れもしません九月二十九日でした。

田鍋 それ迄は名古屋能楽会で行っていたのです。橋岡・武田・大槻・山本・喜之さん、この先生方は観世会も最初からつき合っ下さってました。

柴田 九月に設立し十月に会則ができて、二十七年二月から定式能楽会を催して以来今日に至るわけですね。舞台が出来る迄

「名古屋観世会の特色」

司会 名古屋観世会のあり方というの、東京や京都に比べて多少違うように思うのですが、どういふ点が特色でしょうか。

林 むつかしいけれど簡単にいえば、東京都が大阪、京都には何人かのお家があつて、その人達によって運営されているわけですよ。しかし名古屋は柴田先生と僕とこの二軒だけというところから

「名古屋観世会の特色」

司会 名古屋観世会のあり方というの、東京や京都に比べて多少違うように思うのですが、どういふ点が特色でしょうか。

林 むつかしいけれど簡単にいえば、東京都が大阪、京都には何人かのお家があつて、その人達によって運営されているわけですよ。しかし名古屋は柴田先生と僕とこの二軒だけというところから

狂言也留舞会 発表会

七月十七日(海の日) 十一時始

名古屋能楽堂

蚊角力 大名 加藤志津子 太郎冠者 磯村 美和
蚊の精 松田 高義

痺 太郎冠者 吉本 有季 主人 野村小三郎
(小学五年生)

清水 太郎冠者 安保 育子 主人 水原 みわ

柿山伏 山 伏 伊達 義也 主人 野村又三郎
(小学四年生)

舟船 太郎冠者 小林 義昌 主人 野村又三郎

長光 すっぱ 伊達 義子 田舎者 杉澤麻理子
目代 奥津健太郎

海道下り 平山みよ子 地謡 野村小三郎
野村又三郎

狂言小舞 通 円 伊藤 悦子 野村小三郎
野村又三郎

仏師 すっぱ 伊藤 泰 田舎者 田端 奏衛
(小学六年生)

宗論 浄土僧 庄司 武 宿の亭主 藤波 徹

棒縛 太郎冠者 吉村由紀子 主人 野村小三郎
次郎冠者 伊藤 悦子

清水 太郎冠者 柴田 聖子 主人 奥津健太郎

骨皮 新発意 三浦 思季 住持 水原 みわ
(中学一年生) 馬借り 杉澤麻理子
齋の案内 安保 育子

四世・野村小三郎 斯道三十周年記念
番外狂言 番外狂言 野村小三郎 主人 野口 隆行
(終演予定 午後四時三十分頃)

御来場歓迎(入場無料) 観世流 信 謡 舞 会

法政大学 催花賞受賞記念

第7回 伝統芸能上演会

「伝統芸能を次世代につなげるために」

七月二十二日(土) 開場十二時半

舞台体験 二時~二時、上演会 二時半始

名古屋能楽堂

「名古屋観世会の特色」

司会 名古屋観世会のあり方というの、東京や京都に比べて多少違うように思うのですが、どういふ点が特色でしょうか。

林 むつかしいけれど簡単にいえば、東京都が大阪、京都には何人かのお家があつて、その人達によって運営されているわけですよ。しかし名古屋は柴田先生と僕とこの二軒だけというところから

「名古屋観世会の特色」

司会 名古屋観世会のあり方というの、東京や京都に比べて多少違うように思うのですが、どういふ点が特色でしょうか。

林 むつかしいけれど簡単にいえば、東京都が大阪、京都には何人かのお家があつて、その人達によって運営されているわけですよ。しかし名古屋は柴田先生と僕とこの二軒だけというところから

「名古屋観世会の特色」

司会 名古屋観世会のあり方というの、東京や京都に比べて多少違うように思うのですが、どういふ点が特色でしょうか。

林 むつかしいけれど簡単にいえば、東京都が大阪、京都には何人かのお家があつて、その人達によって運営されているわけですよ。しかし名古屋は柴田先生と僕とこの二軒だけというところから

半能 小鍛冶 長田 駿 大倉 三忠 鬼頭 義命
相元 正樹 亀井 俊一 大野 誠

狂言 清水 太郎冠者 佐藤 融 主人 佐藤 友彦

雑子 高砂 長田 郷 船戸 昭弘 加藤 洋輝
今井 勉 大野 誠

平曲 鱈 今井 勉 地謡 岩田 律園
尺八 九州鈴慕 立方 西川真乃女 唄・三枝 久米 雅子
地唄 くるかみ 胡弓 澤田 孝子 今井 勉
胡弓 蝉の曲 胡弓 澤田 孝子 今井 勉
秘曲 春の海 藤田 眞理 尺八 岩田 恭彦
新筆曲

「入場無料」
「来場歓迎」
「先着六三〇名」
「観覧の節は会議室テレビでご覧いただけます」

主催 東海能楽研究会
TEL 052・451・9797
FAX 052・451・9797
後援 名古屋市教育委員会
愛知県教育委員会

能 船弁慶 宝生 欣哉 河村眞之介 観世 元伯
御厨 誠吾 後藤嘉津幸 大野 誠
大日方 寛

子方 味方 和 野村小三郎 (終了予定 午後四時半頃)

「入場料」
指定席券五〇〇〇円
自由席券三〇〇〇円
学生 二五〇〇円
申込み 電話090・7671・8945
チケットぴあ(Pコード369・361)
電話0570・02・9999

狂言 龍 林喜右衛門 河村総一郎 観世 元伯
後藤孝一郎 藤田六郎兵衛

狂言 繩 野村小三郎 松田 高義
野村又三郎

仕舞 東岸居士 味方 健
松風 武田 邦弘
阿漕 梅田 邦久

能 鏡座 最終公演

七月二十三日(日) 午後一時三十分開演

名古屋能楽堂

「名古屋観世会の特色」

司会 名古屋観世会のあり方というの、東京や京都に比べて多少違うように思うのですが、どういふ点が特色でしょうか。

林 むつかしいけれど簡単にいえば、東京都が大阪、京都には何人かのお家があつて、その人達によって運営されているわけですよ。しかし名古屋は柴田先生と僕とこの二軒だけというところから

「名古屋観世会の特色」

司会 名古屋観世会のあり方というの、東京や京都に比べて多少違うように思うのですが、どういふ点が特色でしょうか。

林 むつかしいけれど簡単にいえば、東京都が大阪、京都には何人かのお家があつて、その人達によって運営されているわけですよ。しかし名古屋は柴田先生と僕とこの二軒だけというところから

「名古屋観世会の特色」

司会 名古屋観世会のあり方というの、東京や京都に比べて多少違うように思うのですが、どういふ点が特色でしょうか。

林 むつかしいけれど簡単にいえば、東京都が大阪、京都には何人かのお家があつて、その人達によって運営されているわけですよ。しかし名古屋は柴田先生と僕とこの二軒だけというところから

②面よりつづき
(2)面よりつづき
して違いますね。だから自主的に
こ、だけでやるというのが困難に
なってくるわけですね。それで出演
者を他所から頼む事になってしま
うのです。

柴田 それが却って非常に幸い
しましたね。東京や京阪にしまし
ても皆定期能をもっていらつしや
る。しかし名古屋ではそれがあり
ませんから、観世会を親に行くと
り仕方ないことになってね。

武田 名古屋の観世会が一番賑
やかじゃないですか。(笑)
柴田 これもう仕方ないか
らね(笑)東西の大家による例
会、それが特徴なのですよ。

司会 強力な外人部隊ですネ。
(笑)

鬼頭 まあまあそれが名古屋観
世会の本来の根本原則でもあるわ
けです。名古屋においでになって
いる先生には必ず出ていただく、
又初会や二月には宗家を始め、大
家に来ていただく催す、という
のが根本方針なのです。

司会 そうすると名古屋の会員
さんが一番得をしていられるわけ
ですね。

鬼頭 そうですよ。いつも別会
並でね(笑)
司会 林先生、大先生がお亡く
なりましたのは、何としても痛
手でございますね。

林 父は三十六年の十一月に死
にました。九月に林喜右衛門さん
の俊寛の代動をしたのが最後でし
た。

司会 そうすると戦後の名古屋
観世会を維持されたのは、本当に
このお二人とそれに鬼頭さんとい
う事になりますね。

田鍋 そうです。鬼頭君は
兩人と違った意味でよくやるんで
すよ。よい番頭役で、又それに
一つは大槻先生や武田先生が名古屋
屋に来られるので、これだけのこ
とが出るので、始終来て下さ
るから指導も得られるし相
談も出来るし……

鬼頭 他なら断られるところ
を、名古屋ならそのついでにとい
つてやっていただけです……
(笑)
武田 いや、決してついで
はありませぬ。(笑)

田鍋 先代から来てもらって
いる例があるのだから……それに
便乗して鬼頭君がうまくやって
るんだ。(笑)

名古屋観世会の組織
司会 観世会の組織というのは
どうなっているのですか。

林 会長はお家元です。理事と
して柴田先生、後は幹事制になっ
ていて、各会から代表して出ても
らっているわけです。例えば橋岡
先生、喜之先生の九草会を代表して
増田一雄さん、武田さんと大槻
さんとこといった具合で私も幹事
の一人ですけれど……これら三十
四人によって運営しているわけ
です。そしてもう一つ違うところは
田鍋先生に全体のリーダーになっ
てもらっていることです。そうい
うことで現在にきております。

鬼頭 そうです。それは何とい
つても田鍋先生が一番の功労者で
す。だからここまでこられたわけ
です。田鍋先生のお力を得ていな
かったら、観世会も何もありませ
んよ。田鍋の名古屋といはいま
すよ。

田鍋 いやあ、今の柴田・鬼頭
の両コンビ、そこへもってきて林
の先代はよう気のつく重宝な人だ
ったからなあ。この三人拍子が揃
って名古屋観世会を育ててきまし
たネ。

鬼頭 実際のところ大久手(田
鍋氏のこと)が亡くなったらどう
しようと思えますよ。(笑)

田鍋 冗談じゃない。(笑)

司会 功労者といえ、素人の
方でそういう方はいらつしやいま
せんか。

田鍋 以前は北沢、寄田といっ
た人達がいましたけど、今は松
坂屋の伊藤次郎左衛門氏、それに
岡谷鋼機の岡谷惣助氏で能楽殿が
できたのも全くこの伊藤・岡谷さ
んのお蔭といつてよい位です。ず
い分お力をうけておりますよ。

柴田 まあ、微力ですが、林
・鬼頭・私の三人に田鍋先生の方
を借りて、どうやらこうやらやっ
ております。

司会 芸所名古屋といわれるだ
けに、皆様後援者も多く、こうし



片山博通33回忌追善能の際に
編まれた冊子「轍」より転載

た和やかな雰囲気の内成長して
きましたこの観世会、今後もこの
特徴ある独自の行き方を生かして
益々御繁栄をお祈り申し上げま
す。今日はお疲れのところをあり
がとうございました。

筆者註 名古屋観世会発足、の
うち柴田発言「そのうちに宝生会
ができ云々」は、名古屋宝生会が
定式能として現在の形で発足した
のが昭和三十三年六月十六日で名
古屋観世会よりあと。因に金剛会
中部支部の発会で初回の定式能が
催されたのは昭和二十五年十一月
二十六日。

補遺 先号、誕生の頃、での司
会「それで長能会というのはいつ
頃までやってられたのでしよ
うか」に対する柴田発言「昭和十九
年六月」は「昭和十九年十月」、
「二十四年五月に戦後第一回」は
「二十二年七月六日に戦後第一
回」の誤解。因に最後は昭和二十
五年十二月十日、中区大池町の名
古屋商工会議所特設舞台での午前
部の会員素謡会のおと有料の午
後部で、番組は素謡二番「小袖
曾我」高野瀬透・武田小兵衛「通
小町」林恩蔵・国枝照清、能「俊
寛」柴田初太郎、狂言「磁石」伊
藤宏文・河村丘造、仕舞「善知
鳥」橋岡久太郎、能「葵上・梓之
出・空之折」武田太加志・高安滋
男。同じく先号の筆者註、なお商
工館は名古屋商工会議所(大池
町)を削除。

三月十日、掬水青陽会第六期第
三回は素謡「田村」石谷初蔵、舞
囃子「玄象」河村鉦二、能「小袖
曾我」塚本秀雄・久田秀雄、仕舞
四番「経正」高橋暎一「網之段」

お尋ねいただいて、申し上げたこ
ともあってのお返事だったと思っ
ます。観世会館の負債について、
ずいぶん精神的にえらかったのだ
でしょうが、それにしても五十五歳
だった由、残念なことでした。

祖父江修一「笠之段」佐藤太俊
「船弁慶」柴田収武、能「藤」柴
田初太郎、狂言「二人大名」佐藤
友彦・井上義次、能「車僧」加藤
丈太郎・高安滋郎。

同日、当地名古屋にも縁の深い
片山博通が神戸湊川神社七生館内
の湊川能楽堂での神戸観世会「求
塚」演能中に倒れ、脳出血で急逝
(「観世」誌、昭和三十八年五月
号に藤井久雄がその詳細を記す)
享年五十六歳。世阿弥を憧憬する
こと厚い故人は此の年が世阿弥誕
生六百年に当たるのを記念して能
「世阿弥」を昨昭和三十三年に
創作、同年五月九日、第一回試演
会を京都観世会館で行い、六月一
日、京都新能で初演、名古屋でも
月末の三月三十一日、第八回中日
五流能で上演される矢先のことと
あった。田鍋惣太郎は自著「小鼓
芸話」の中で故人を次のように偲
ぶ。

観世のみならず、能楽界の恩人
ですね。博学な人格者で、中年積
古といつても、頭があつて立派な
芸に達せられました。宅でお泊り
いただいた時にも、井上・前川氏
らが飲んでみえる間にも、今池の
本屋へ行って来られました。しか
もその学のある所が鼻にかから
ず、実にけんきよで、嫉妬のお披
きの後で、次のような便りをいた
だきました。全く頭の下る書き
ぶりでありました。「前略御免 嫉
捨をおほめ願って恐縮に存じま
す。勤めてみてはじめて大曲であ
る事をハッキリ知りました。まだ
まだ私など若僧のやるものではあ
りませぬ。思へば汗顔の至りで
す」石を演じられるについて、左
近氏の嫉妬を見た感想をいろいろ

の「富士太鼓」、子方に息男・慶
次郎、これは又戦中最後の舞台
で、戦前を通じて来名は此の三度
が全て。翌十九年から九郎右衛門
を名乗るが戦時下で鉄道利用も
ま、ならず、戦後の初来名は田鍋
惣太郎との交誼で戦災見舞券々激
励のための催能、能楽復興大衆公
演は二十年十一月二十二日、名古屋
屋宝塚劇場仮設舞台で独演二番
「羽衣・和合之舞」と「狸々乱・
乱留」、狂言は茂山千五郎・七五
三・真一による「棒縛」、囃子方
に大鼓谷口幸治郎、太鼓前川光隆
を帯同する。定期的な来名は昭和
二十四年以降、名古屋能楽鑑賞会
・名匠鑑賞会・中日五流能・名古屋

屋観世会定式能などへ。年に一度
が八回、二度が三回、三度が三
回、昭和三十年だけは六度で計二
十九回、能のシテだけに限れば舞
台数は二十五、戦中の一を加え総
計二十六、当地最後の舞台は死去
よりほんの三週間ほど前の二月十
七日、観世会定式能初回の「高
砂」、武田太加志シテ「羽衣・和
合之舞」の地頭も勤めていた。な
お、昭和三十三年には九郎右衛門
を元の名の博通に戻しているが、
それにしても早い旅立ちには返す
くも惜しまれる。

以下次号

様子、馬上の心は床几、「鐘踏ん
張り」と極く僅か右へ身体を開
き、背筋きつと伸ばすかの勇姿に
天晴れ大将を彷彿させ、「今の様
に思ひ出でられて候、とワキヘア
シラフと器量をみせる。ツレ
漁夫・正邦との掛合に景清と三保
ノ谷との格闘は話の核心に迫り、
へこれを御覧して判官、と床几
を立つシテは汀へ寄る心、そこへ
味方の継信が敵の能登守に射られ
るのを胸指シに、「どうと落つ、
落馬の様を強々と踏む拍子に活
写。海上の敵もまた痛手、戦の虚
しさは生の儚さ、源平互いに退い
た後の寂寥感松嶺を聞くところ
ろ、へ引く汐、にかけて一足退き
面伏せる辺りも巧妙。

アヒ浦人は小三郎、名宣の間
に、後見はシテの残した腰桶を床
几を下りた小鼓方(四郎兵衛)の
背後に置き、小鼓方の床几を持ち
切戸へ退く。アヒはワキを見答
め、問答が常の流れに乗るところ、
ワキは「暫く」と待ったをか

け、扇の話を所望、小書「那
須須」となるが、これは和泉流の
みの語掛、という。アヒは与市・
判官ら四人一役で仕形に語り分け
るが、夫々の立場での移動は正中
から斜右後方への往復だけ、俊敏
な動きに迫力をみせ「ヒ、ブツリ
と射切る」ところも小気味よい
(写真)。

後は判官義経の弓流が眼目。執
心振り切つて現われる心か、大
小前きりり小廻りから「夢物語
申すなり、とワキへ指すと正中の
床几(小鼓方)に掛かり、修羅道
の有様は合戦譚の再現。馬を海に
乗り入れ、攻め戦ふ、と床几を立
つと、イロエは敵を求め馬上遊弋
の姿。静かにスミへ進み、左へず
いと眺め、そのま、廻りワキ前
へ、一瞬、笛六郎兵衛が止み、
大鼓(総一郎)一打のあと小鼓(四
郎兵衛)のボと同時に弓に擬した
扇を取り落すや、それを追うかに
一ノ松へ。「その時何と、と弓
を見込み、舞台へ戻るとへ敵に弓
を取られ、と太刀すらりと抜き、
危く熊手に引つ懸けられんと
するをへされども、と熊手を切り
払う太刀捌きの鋭さ、膝つき拾い
上げ再び床几へ。柔からでしかも
きりりとした身のこなしは型の力
強い美しさ、ケセは「智者は惑は
ず、からスックと床几立つところ
に漲る英気、カケりから地を残し
て走り込むキリまで目覚ましい活
躍だった。(1時間49分)

「鼻山伏」は親鳥をも食うと
いう母喰鳥が異名
の鼻、兄(高義)の頼みで鼻に憑か
れたという弟(小三郎)に加持を施
す山伏シテ又三郎だが、その強力
な邪気には通力も及ばず、却つて
悪化するばかりか兄へも空気が伝
染、果ては兄弟に挟まれて濃密な
邪気の直中に倒れる。「ホホン」
と奇妙な叫び声を連呼して去つて
ゆく兄弟、やおら立ち上がるシテ
もそれが感染り、顔面掻き巻るよ
うに奇声を上げて入る。難しいこ
と言いつつ無しのお伽噺の世界だ
が、シテの沙門帽子は権高な印象
ゆえに此処では無力を強調するも
「兜巾といつぱ一尺許の布切を真
黒に染め、むさと髪を取つて戴く
(4面へつづく)



「屋島・弓流・那須須」
シテ六郎、前は顔骨の張つた、
頸に植毛のある茶褐色の面・阿古
父尉、厳つい漁翁の印象。西下の
旅僧ワキ勝久に乞われて語る源平
の合戦譚は先ず判官の出で立ちの



名古屋観世会定式能
①②「屋島」梅若六郎
③④野村小三郎
⑤「杜若」恋
山本順之
(杉浦賢次氏撮影)

(3)面よりつづき
 によっての兜巾なり」と、わざ
 ぐ頭を指すからには兜巾でよい
 のでは……三者の調和の良さが
 光る小品。(17分)

「杜若・恋ノ舞」之、小面

観世水白摺箔着付・紅白段唐
 織、下に腰巻を着込んでいても着
 影れない姿のよさ。ワキ旅僧・
 弥三郎への呼掛は幕内からでなく
 幕を放れてから。ワキの挙動見て
 取る迄の余裕の必要とも思え、さ
 ればこそ徒らに眺めるだけでな
 く、心して、眺め給へかし、の語
 気に着める強さも感じられる。物
 着に唐織を脱ぎ、赤地縫箔腰巻姿
 に紫長絹を着ると、巻襦・老懸ノ
 初冠に、小書で白梅ノ心葉を付け
 て日蔭ノ糸を垂らし、真ノ太刀を
 佩き、在りし日の在五中將の華や
 かな出て立ち。小書は赤、都をへ
 別れ、三河国八橋に至る東下りは
 伊勢物語の故事をいうクリ・サシ



鳳の会「清水」左より佐藤融、鹿島俊裕
 (杉浦賢次氏撮影)



鳳の会「小傘」佐藤友彦、井上菊次郎ほか
 (杉浦賢次氏撮影)

「文相撲」

特技を持たねば
 就職もままならぬ
 は今昔を問わな
 い。求人に応じた新参者・靖浩が
 相撲を得手とあつて大名シテ菊次
 郎が直に相手をするが、現在も決
 り手の一、猫騙しの奇手で負け、
 さればと太郎冠者・郁雄に相撲の
 伝書を持って来させ、この度は勝
 つが三番勝負を挑まれる。手の内
 を知られて脚を取られ待ったを掛
 ける大名、対応策を探す裡(写

「清水」

時を弁えず強権発
 湯の水こときを汲み
 動の主・俊裕に茶の
 に遣らされる太郎冠者シテ融、割
 にあつさり引受けるのも魂胆あつ
 てのことらしい。匆々に戻れば、
 仰々しく「ここに菌型はござり

「小傘」

堂守を求めぬ田舎人
 靖浩が出遇う僧は
 博突に負け文字通り世捨人の俄坊
 主シテ友彦と相棒の菊次郎。兩人
 は好機到来と許り、傘の用途問わ
 れ、ば仏の後光光背の用、舟形
 後光・傘後光(此の名で実在、骨
 だけの傘を放射光にイメージ。俄
 坊主の知識とは思えないが)など
 ある、と巧言をもつて信用させ、
 難無く転がり込むと持ち前の目端



鳳の会「文相撲」井上菊次郎、井上靖浩
 (杉浦賢次氏撮影)

を利かせ、落慶
 式に事寄せて在
 所の者から施物
 を募る。説経は
 仏典不用と賭場
 でツキのとき、
 傘で踊る流行り
 の小歌を御経ら
 しく唱和させ
 (スワローズの
 応援席を想像す
 る)、踊り念仏
 よろしく扇拍子
 のリズムに乗せ
 て恍惚境に誘い
 込み、どさくさ
 に紛れ相棒に傘

で在所の人の目から施物を遮断さ
 せ、それを奪取する俄坊主のセツ
 ト・ブレイ(写真)。施物の詐取は
 「仁王」と同工だが浮きに浮いた
 小歌の華やき、調和のとれた大勢
 物に共同社の充実ぶりをみる。
 (46分・4月22日・第42回鳳の
 会)



青陽会「百万」シテ・星野路子、子方・森田凌史
 (杉浦賢次氏撮影)

宿乞う西行、断る
 江口ノ遊君、仮の宿
 り惜しむかと西行、
 遁世の出家なら仮の宿りに執着召
 元、西行の古歌を吟じ感慨に耽る
 ところ、それを聞き答め現われる
 里女シテ邦弘(勘助の代動)面若女
 ・襟白二・金菊菱文白摺箔着付・
 紅白段唐織の大柄な容姿が優艶、
 ゆつたりした運びに問答から掛合
 へ、敢へて感情を抑え淡々とした
 風な詞・語に説得力。挙措の端々
 に見せる含羞からワキに推察さ
 れ、恥かしや、と面伏せるとこ
 ろ、素性明かし、江口の君の幽
 霊ぞ、と静かに笛(学)のアシラ
 ビで消えてゆくところ、奥床し
 い。所ノ者アヒ菊次郎、古の江口
 ノ君のことも居語に菌切れよく
 爽やかに語って退くと、後場。

月明下、遊君の舟遊びの歡樂
 も、生々流転は人の世の無常。所
 詮、現世は仮の宿、心を留める要
 はない、と要らぬ口出しは「これ
 までありや、と江口ノ君、普賢菩
 薩と変じ白象に乗り天上する。
 後シテは着付を花菱七宝繫ギ白
 摺箔に替え、紫大口に浅黄赤段唐
 織垂折の洗い姿、ツレと共に舟に
 乗り込んだところ(写真)は辺り
 を払う豊麗。誰の舟、と不審する
 ワキに構わず「誦へや誦へ、と促
 す様にシテは前後のツレにアシラ
 ビ、(昔の恋しさを)今も、と
 舟を出るツレはそのま、切戸へ退
 き、シテのみ大小(眞之介・嘉津
 幸)前、床几に掛かるが華やかな

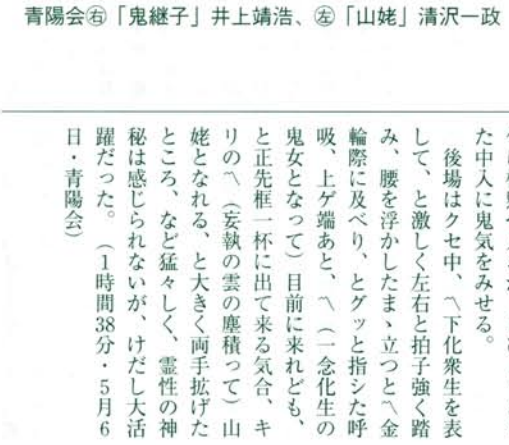
霧開きが急に淋しくなるのは否め
 ない。無常観をいうクセは「(山
 粧ひをなすと見えしも、と立
 つ。クセ切へ六根の罪を作る事
 も、と踏む六ツ拍子の中二ツは極
 く軽く踏み、(見る事聞く事
 に)迷ふ心なるべし、とワキにア
 シラフと、中二ツの拍子が迷
 う心を象徴するからである。序ノ舞
 は三段、扇扱い美しく舞上げる
 と、地邦久・正邦らとの掛合に
 へ花よ、と左手で指して左へ廻
 り、紅葉よ、と右手の扇で右へ
 指シ廻すところ、花は左、紅葉は

右、ときよらきよ
 る落ち着かない心
 があらよしな
 や、であらうか。
 へ思へば仮の宿、
 の地の返して踏む
 六ツ拍子も中二ツ
 を極く軽く踏む
 が、現世は仮
 の、儂なさを意味
 するか。キリは
 これまでなりや、
 と橋懸へどんく
 往き、即ち普賢
 菩薩と現れ、と一
 ノ松で直り、両手
 が大きく上に掲げる
 のが珍しく、ハ光
 と共に、でツマミ扇して二ノ松で
 乗込拍子、地を残してするくと
 入り、ワキが常座へ出て膝つき達
 拜、有難くこそは、の返しに立
 つとワキ正へ話メ、留めた。二時
 間を越す長丁場、終始緊張の舞台
 で立派、ワキツレ從僧が二人(正
 樹・淳出たのもよかつたが、ツ
 レ二人も最後まで残ってほしかつ
 た。余情一入、邦弘好力演。(2
 時間5分)

「鬼継子」

亡夫・刑部三郎
 の遺児を連れ里帰
 りの妻・郁雄、シ

「鬼継子」の遺児を連れ里帰
 りの妻・郁雄、シ
 立つて、待つてなさいよ、とい
 った様な決意を表わすか。その意
 気は、そのとき我が姿をも、と
 ツレへ袖アシラヒするところにも
 表われ、期することある趣、か
 き消すやうに、とスミから常座
 へ、きりきりきりと小廻り、返シ
 句に橋懸へ入るが、きびくとし
 た中人に鬼気を見せる。
 後場はクセ中、下化衆生を表
 して、と激しく左右と拍子強く踏
 み、腰を浮かしたま、立つとハ金
 輪際及べり、とグツと指した呼
 吸、上ゲ端あと、(一念化生の
 鬼女となつて)目前に來れども、
 と正先框一杯に出て来る気合、キ
 リの(妄執の雲の塵積つて)山
 姥となれる、と大きく両手上げた
 ところ、など猛々しく、靈性の神
 秘は感じられないが、けだし大活
 躍だった。(1時間38分・5月6
 日・青陽会)



青陽会④「鬼継子」井上靖浩、⑤「山姥」清沢一政
 (杉浦賢次氏撮影)



青陽会「江口」(左より)梅田嘉宏、武田邦弘、松山幸親
 (杉浦賢次氏撮影)



山姥の山廻りを曲
 舞に作り、都で百万
 の十三回忌供養に從者(ワキ雅介
 ワキツレ幸)を伴い善光寺参詣の
 途次、山中、待ち構えていたかの
 ように曰く有りげな女(シテ一政)
 が現われ、含むところあつて草庵
 に招き、誰ゆえの盛名か原作者へ
 の顧慮無きを恨み、(霊鬼これま
 で來たりたり、と語氣荒くツレに
 アシラフと、感情移入の激し
 さ。畏怖するツレが応えようとす
 れば、暮るのを待つて、と押し留
 めると、中人地では雲に心を
 (かけ添へて)、と右上眺めスツと
 立つて、待つてなさいよ、とい
 った様な決意を表わすか。その意
 気は、そのとき我が姿をも、と
 ツレへ袖アシラヒするところにも
 表われ、期することある趣、か
 き消すやうに、とスミから常座
 へ、きりきりきりと小廻り、返シ
 句に橋懸へ入るが、きびくとし
 た中人に鬼気を見せる。
 後場はクセ中、下化衆生を表
 して、と激しく左右と拍子強く踏
 み、腰を浮かしたま、立つとハ金
 輪際及べり、とグツと指した呼
 吸、上ゲ端あと、(一念化生の
 鬼女となつて)目前に來れども、
 と正先框一杯に出て来る気合、キ
 リの(妄執の雲の塵積つて)山
 姥となれる、と大きく両手上げた
 ところ、など猛々しく、靈性の神
 秘は感じられないが、けだし大活
 躍だった。(1時間38分・5月6
 日・青陽会)

「山姥」舞に作り、都で百万
 の十三回忌供養に從者(ワキ雅介
 ワキツレ幸)を伴い善光寺参詣の
 途次、山中、待ち構えていたかの
 ように曰く有りげな女(シテ一政)
 が現われ、含むところあつて草庵
 に招き、誰ゆえの盛名か原作者へ
 の顧慮無きを恨み、(霊鬼これま
 で來たりたり、と語氣荒くツレに
 アシラフと、感情移入の激し
 さ。畏怖するツレが応えようとす
 れば、暮るのを待つて、と押し留
 めると、中人地では雲に心を
 (かけ添へて)、と右上眺めスツと
 立つて、待つてなさいよ、とい
 った様な決意を表わすか。その意
 気は、そのとき我が姿をも、と
 ツレへ袖アシラヒするところにも
 表われ、期することある趣、か
 き消すやうに、とスミから常座
 へ、きりきりきりと小廻り、返シ
 句に橋懸へ入るが、きびくとし
 た中人に鬼気を見せる。
 後場はクセ中、下化衆生を表
 して、と激しく左右と拍子強く踏
 み、腰を浮かしたま、立つとハ金
 輪際及べり、とグツと指した呼
 吸、上ゲ端あと、(一念化生の
 鬼女となつて)目前に來れども、
 と正先框一杯に出て来る気合、キ
 リの(妄執の雲の塵積つて)山
 姥となれる、と大きく両手上げた
 ところ、など猛々しく、靈性の神
 秘は感じられないが、けだし大活
 躍だった。(1時間38分・5月6
 日・青陽会)

山姥の山廻りを曲
 舞に作り、都で百万
 の十三回忌供養に從者(ワキ雅介
 ワキツレ幸)を伴い善光寺参詣の
 途次、山中、待ち構えていたかの
 ように曰く有りげな女(シテ一政)
 が現われ、含むところあつて草庵
 に招き、誰ゆえの盛名か原作者へ
 の顧慮無きを恨み、(霊鬼これま
 で來たりたり、と語氣荒くツレに
 アシラフと、感情移入の激し
 さ。畏怖するツレが応えようとす
 れば、暮るのを待つて、と押し留
 めると、中人地では雲に心を
 (かけ添へて)、と右上眺めスツと
 立つて、待つてなさいよ、とい
 った様な決意を表わすか。その意
 気は、そのとき我が姿をも、と
 ツレへ袖アシラヒするところにも
 表われ、期することある趣、か
 き消すやうに、とスミから常座
 へ、きりきりきりと小廻り、返シ
 句に橋懸へ入るが、きびくとし
 た中人に鬼気を見せる。
 後場はクセ中、下化衆生を表
 して、と激しく左右と拍子強く踏
 み、腰を浮かしたま、立つとハ金
 輪際及べり、とグツと指した呼
 吸、上ゲ端あと、(一念化生の
 鬼女となつて)目前に來れども、
 と正先框一杯に出て来る気合、キ
 リの(妄執の雲の塵積つて)山
 姥となれる、と大きく両手上げた
 ところ、など猛々しく、靈性の神
 秘は感じられないが、けだし大活
 躍だった。(1時間38分・5月6
 日・青陽会)

NHK放送予定(平成18年7月~8月)

●NHK-FM能楽鑑賞(毎週日曜日午前7時15分~8時)
7月30日 「八句連歌」柿山伏(犬蔵流)
大蔵吉次郎ほか
8月6日 「囃子の魅力」① ~笛~ 高桑いずみ
8月13日 「囃子の魅力」② ~小鼓~ 高桑いずみ
8月20日 「囃子の魅力」③ ~大鼓~ 高桑いずみ
8月27日 「囃子の魅力」④ ~太鼓~ 高桑いずみ

●NHK教育テレビ

日本の伝統芸能「能・狂言入門」
教育TV 8月(土)12:30~13:00
再放送(火)5:30~6:00
8月5日 「能楽堂へようこそ」 出演 観世喜正
~能・狂言とは何か?~ 司会 水谷彰宏アナ
8月12日 「能の魅力を探る」 出演 観世喜正
~恋と嫉妬の能「葵上」 司会 水谷彰宏アナ
8月19日 「狂言の魅力を探る」 出演 野村萬斎
~狂言師のもつチカラ~ 司会 水谷彰宏アナ
8月26日 「狂言が切りひらく新境地」 出演 野村萬斎
~狂言、六百年の流れ~ 司会 水谷彰宏アナ

能 楽 の 友

発行能楽の友社

名古屋市千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-7984
FAX (052) 733-2837
振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1100円
郵送の場合 1年 1800円
一 部 100円

第5回名駅薪能

7月30日 観世宗家来演

「第5回名古屋名駅薪能」は7月30日(日)、観世流観世清和宗家らが来演して、JR名古屋駅・タワーズガーデンで開催される。午後6時開演。この名駅薪能は平成14年、財団法人観世文庫、名古屋名駅薪能実行委員会の主催で開催され、真夏の夜の祭典として、千人を超える観客の鑑賞で定着し、期待されている。

名古屋薪能 8月5日 熱田神宮

第41回「名古屋薪能」はきたる8月5日(土)午後5時30分から熱田神宮神楽殿前の特設舞台で開催される。演能は、金春、喜多、観世、金剛各流による仕舞、宝生流半能「放下僧」

シテ竹内澄子、ツレ衣斐、火入れ式 熱田神宮彌宜・大澤奉紀
観世流半能「井筒」シテ武田邦弘、ワキ高安勝久
和泉流狂言「千切木」シテ野村小三郎
観世流能「狸々乱・双之

シテ清沢一政、松山幸親、ワキ根元正樹
雨天順延、前売二五〇〇円、当日三〇〇〇円、学生一五〇〇円
前売券取扱所 チケットぴあ、市内プレイガイド、各出演者。(番組②面)

新宗家 金春安明氏 金春流八十世を継承

シテ方金春流七十九世宗家・金春信高氏は、このたび高齢による家元職遂行に困難の故をもって、長男金春安明氏が宗家を継承した。金春安明氏は八十世となる。なお分家・金春欣三氏は、

「このたびのシテ方金春流宗家継承に賛同し、金春流職分一同、新宗家を中心に、由緒ある金春流の、なお一層の発展のため、鋭意努力致す所存です」とあいさつしている。

熱田神宮能楽殿 「おわかれ能楽大会」

参加者募集のお知らせ
すでに熱田神宮宮内よりお知らせがありました熱田神宮能楽殿閉鎖にあたり、能楽協会名古屋支部として、長年の想い出深い能楽殿の最後を記念し「おわかれ能楽大会」を左記の日程で開催することとなりました。つきましては、一般能楽愛好家を含んだ多くの方々の参加で能楽殿の最後を飾りたいと思います。多くの方々にご参加をいただくようご案内申し上げます。

募集要項

- 一、日時 平成十八年十月二十五日(水)、二十六日(木)の二日間
二、参加グループ名または会名
指導先生名または代表者氏名
三、演目種類と曲目・出演者氏名
(例) 仕舞 熊野 名古屋太郎
四、参加単位
(一)単位 二十分 参加費 一単位五千円です
(二)グループ三単位までとさせていただきます
五、参加グループまたは会の責任者 住所・氏名・電話番号
六、参加希望 日時・時間(日 時から 時まで)
以上すべてを明記のうえ、封書にて 〒460-10033
名古屋市中区台町2-16-5 梅田邦久方
「熱田神宮能楽殿おわかれ能楽大会」係り宛へ お送り下さい。

演能カレンダー

名古屋能楽堂

(TEL 052-231-0088)

[7月]
22日(土) 伝統芸能上演会 (無料)
23日(日) 鏡座最終公演 (有料)
28日(金) 名古屋能楽同好会夏の発表会 (無料)
30日(日) 七 彩 会 (番組②面) (無料)
[8月]
6日(日) 青 陽 会 定 式 能 会 (番組②面) (有料)
8日(火) 青 雲 能 会 (番組⑥面) (無料)
9日(水) 親 子 能 楽 教 室 (関係者)
10日(木) 親 子 能 楽 教 室 (関係者)
22日(火) 名古屋学生能楽連盟例会 (無料)
27日(日) 衣 斐 正 宜 後 援 会 (有料)

暑中御見舞

名古屋 観世会

おわかれ能楽大会
参加費以外の経費については、ご出演者の負担とさせていただきますので、ご了承下さい。
詳細お問い合わせは、副支部長 柳原まで
TEL 052-1832-11031
(携帯) 090-33307-4474
に
お願いします。

暑中御見舞 申し上げます

観世清和

幽謳会

片山九郎右衛門

清司

鍊仙会

観世栄夫

梅猶会

梅若吉之丞

大槻清韻会

大槻文蔵

〒540-0005 大阪市中央区上町A番七号
電話〇六七六四一〇八九八番

山本勝一

名古屋正花会 山本博通

大西智久

鳳鳴会

武田志房 武田友志

稽古場 名古屋千種区今池四丁目15-3 電話〇五二(七三三)三七三六

幽花会 片山慶次郎 伸吾

〒603-8123 京都市北区小山下花ノ木町二二 TEL 四九二一五三〇二番 FAX 四九二一五三〇九番

名古屋観世九阜会

観世喜之 観世喜正 高橋瞭一 外山圭一

井上嘉介 井上裕久

〒603-8175 京都市北区紫野下鳥田町六

壺泉会

泉嘉夫

名古屋市昭和区山手通3-8-2,306 電話(〇五二)八三三-一三二五 西宮市甲陽園目神山町二二二五 電話(〇七九八)二四二五八

第41回名古屋新能

八月五日(土)午後五時半開演
熱田神宮神楽殿前

Table listing performers and roles for the 41st Nagoya New Noh performance. Roles include 水室, 経正, 蝉丸, 鉄輪, 放下僧, 井筒, etc.

第二十八回七彩色会

七月三十日(日)午前十時始
名古屋能楽堂

Table listing performers and roles for the 28th Nishiki no Iwase performance. Roles include 鶴亀, 太刀奪, 善知鳥, etc.

青陽会定式能(第35期)

八月六日(日)十時半開演
名古屋能楽堂

Table listing performers and roles for the 35th Seiyukai performance. Roles include 清経, 融, 鶴, etc.

附祝言

雨天順延 五日(土)雨天の時は六日(日)、六日(日)雨天の時は七日(月)に順延し、七日は熱田神宮能楽殿にて行います。開演時間は同じです。「井筒」終演後降雨の時は、以後の公演を打ち切らせていただきます。

お詫びと訂正

本紙前号(6月号)一面掲載「熱田神宮おわかれ能楽大会」参加募集の記事中「参加単位は1グループ」とあるのが正しいです。

暑中御見舞 申し上げます

Table listing names of individuals and organizations sending summer greetings, including 観世芳宏, 観世芳伸, etc.

藤井徳三

Table listing names of individuals and organizations, including 邦謡会, 梅田邦久, etc.

大垣浦声会

Table listing names of individuals and organizations, including 梅田保利, 浦田保浩, etc.

名古屋修諷会

Table listing names of individuals and organizations, including 梅若大修, 梅若善高, etc.

久田観正会

Table listing names of individuals and organizations, including 久田舜一郎, 松野幸子, etc.

松音会

Table listing names of individuals and organizations, including 泉泰孝, 泉雅一郎, etc.

財団法人 鎌倉能舞台

Table listing names of individuals and organizations, including 中森晶三, 中森貫太, etc.

下田雄三

Table listing names of individuals and organizations, including 雄諷会中部地区連合会, 名古屋和諷会, etc.

武田謳楽会

Table listing names of individuals and organizations, including 武田欣司, 武田邦弘, etc.

名古屋淡交会

Table listing names of individuals and organizations, including 三交会, 久田三津子, etc.

初陽会

Table listing names of individuals and organizations, including 武田宗和, 初陽会, etc.

梅春会

Table listing names of individuals and organizations, including 松盛会, 小松勝憲, etc.

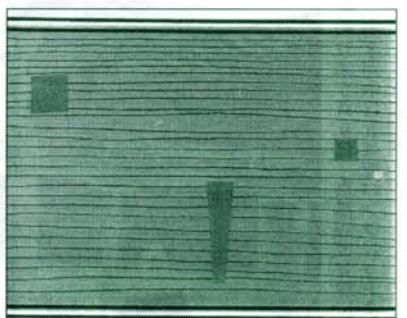
昔はさておいて、明治以後の数多い新作の内に片山博通の「世阿望」の占める位置は特殊なものといえる。

それは能楽師が自ら作り、自ら舞っているというは他のどの曲にもないことで、これは世阿望を始めとする古能楽の歩んだ形の再現といえる。私が真・新作というのはこのことからである。

世阿望の「能作書」にある、種（素材）作（くみ立て）書（かく）の三道を守っての名作が出なかったことではないが、それが今一つ舞台上に名作として輝く、ということができなかった。

その点この曲は、視覚に於ても聴覚に於ても可成り見所の反応を呼ぶものがある。これは一に片山博通という能楽師が、自分の体で知った見物の反応の度を心得ているからである。

昨夏の初演が、試演の一つであり、それから神戸で一度演じ、その都度整備を重ねているから、今度は恐らく決定的なものになっているのではなからうかと思



世阿弥生誕六百年記念

中日五流能

第8回中日五流能パンフレット表紙

慎重だった世阿望の姿をこれからでも偲ぶことが出来るのである。

同日、余談ながら昭和三十五年

五月から進んでいた地下鉄第三期工事・池下―東山公園間（二・五キロ）が完成、翌四月一日の営業運転に先立ち開通祝賀式が行われ

月が替り四月四日、伊勢神宮春季神楽祭。大槻清韻会社中の奉納能に田鍋惣太郎は「翁」の小鼓頭取、脇鼓に嗣子惣一郎・孫洋一を擁して三代で勤めたこと、「翁」にまつわる思い出を「狂言」紙第

初夏から仲夏の舞台

「十一世福井四郎兵衛襲名披露能」
「第四十九回やるまい会」と「梅猶会定期公演」
「名古屋能楽堂定期公演」

竹尾邦太郎

「花籠・籠之伝・大返」 皇位継承のため慌しく上京の皇子（子方・勘吉郎）を慕い、残された形見の花籠を侍女（ツレ昌司）に持たせ、恋着も狂おしく跡を追う寵姫・照日ノ前（シテ四郎）。出くわす紅葉狩の御幸に、先を越した廉で官人（ワキ雅介）に花籠打ち落され

子で読む健気も、別離の現実をいう初回（鉄之丞・文義）は、筆跡に「残るぞ悲しき、思いに文ふつと上げ、視線遊ばせるも直ぐ下ろすと虚ろに眺め、無意識に巻き戻すと心は花一杯の手籠へ。花の跡とて懐しき、と文持つ左手に鉉を取り、右手添え起つてゆく風情は哀感一入、短い前場が引き締まる。

後シテは腰巻に縫箔垂折・女笠、守袋を掛け文籠を持つ。何にあればなる旅人、と二ノ松で道を問ひ、返無きにツレとの掛合は旅雁に言寄せるツレの励まし。ハ



福井四郎兵衛襲名披露能①「花籠」野村四郎、②「素襖落」野村又三郎・野村小三郎、③「狸々乱」梅若吉之丞・梅若猶義

玉章を附けし南の都路に、の連吟は父子共演の好吟。道行は、あとに心の浮かれ来て、と脇正から幕へ見込み、へなほ通ひ行く、と笠に手を遣りスミへ出るところ、着



福井四郎兵衛襲名披露能②「花籠」野村四郎、③「素襖落」野村又三郎・野村小三郎、④「狸々乱」梅若吉之丞・梅若猶義

とり、文籠を扇に替える。ツレがワキに手首を打たれ取り落す花籠と、ツレと二人してワキを面責のところも気合十分、へ我よりもなほ物狂よ、とワキを指す怒りの強さ。小書「籠之伝」でクルヒは花籠で舞うが、へ恐ろしや、の後は



野村小三郎、④「狸々乱」梅若吉之丞・梅若猶義

伺 御 中 暑

長田 駿 後援会
〒514-2221 津市高野尾町三三五一―四六
電話（〇五九）マ〇〇六九七番

喜多流 和楽会
和谷 衡 市
〒516-0067 伊勢市中島二丁目26―12
電話（〇五九）マ〇〇一五九番

喜多流 二井 英 世
〒515-0073 松阪市殿町一四二―二三
電話（〇五九）マ〇〇三三〇二番

福王 茂 十 郎
清水 利 宣
〒509-0817 高槻市桜ヶ丘北町11―25
電話（〇七二）六（九四）五〇一七

高安 勝 久
藤田 舞 台
藤田 六郎兵衛
〒451-0041 名古屋市中区西區幅下2―10―9
TEL & FAX 〇五二―五七二―一六（三四一）

西村 同 門 会
飯 富 雅 介
杉 江 元
梶 元 正 樹
橋 本 宰

宝 生 欣 哉 閑
〒176-0004 東京都練馬区小竹町一―五〇―一五
電話（〇三）三（九七二）七三三〇
電話（〇三）三（九五五）四七九五

植田和光会 植田 隆 之 亮
〒673-0002 明石市松ヶ丘4の3 A6―301
電話・FAX（〇七八）九二―一三三七四

谷田 宗 一 朗
〒603-8072 京都市北区衣笠街道町31―7
電話（〇七五）四（六三）四八七五番

幸友会 涛華能
福井 四郎兵衛
福井 良 治
柳原 富司 忠

幸友会 涛華能
福井 四郎兵衛
福井 良 治
柳原 富司 忠

幸友会 涛華能
福井 四郎兵衛
福井 良 治
柳原 富司 忠

幸友会 涛華能
福井 四郎兵衛
福井 良 治
柳原 富司 忠

発行 能 楽 の 友 社

名古屋市中千種区千種2丁目18-18

(郵便番号 464-0858)

電話 (052) 731-7 9 8 4

F A X (052) 733-2 8 3 7

振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1 1 0 0 円

郵送の場合 1年 1 8 0 0 円

一部 1 0 0 円

能 楽 の 友

NHK放送予定(平成18年9月~10月)

●NHK-FM能楽鑑賞(毎週日曜日午前7時15分~8時)

9月3日 「井筒」(親世流) 梅若万三郎ほか

9月10日 「俊寛」(金春流) 高橋 汎ほか

9月17日 「萩大名」(大蔵流) 茂山忠三郎ほか

9月24日 「熊坂」(宝生流) 田崎隆三ほか

10月1日 「砧」(親世流) 山本順之ほか

●NHK教育テレビ 能狂言番組

9月16日 午後2時50分~午後4時50分

能「松虫」シテ本田光洋

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

(TEL 052-231-0088)

[8月]

27日(日) 衣斐正宜後援会能 (番組①面)(有料)

[9月]

3日(日) 名古屋能楽堂定例公演 (番組①面)(有料)

9日(土) 青陽会定式能 (番組①面)(有料)

16日(土) 名古屋卓楽会・喜誦会大会 (番組②面)(無料)

17日(日) 名古屋宝生会定式能 (番組②面)(有料)

18日(月) 名古屋親世会定式能 (番組②面)(有料)

23日(土) 和泉流狂言大会・初日 (無料)

24日(日) 和泉流狂言大会・第2日 (無料)

[10月]

1日(日) 名古屋親世九阜会65周年記念別会 (番組③面)(有料)

名古屋親世九阜会 65周年記念別会

能「卒都婆小町」上演

10月1日 名古屋能楽堂

名古屋親世九阜会(親世喜之師主宰)は、今年六十五周年を迎え、きたる10月1日、名古屋能楽堂で記念別会を開催する。同会は、昭和16年4月に名古屋

第41回名古屋新能

熱田神宮で能3番上演

第41回名古屋新能は8月5日(土)午後5時30分から熱田神宮神楽殿前の特設舞台上で催された。連日35度を越える猛暑つづきのなか、熱心な観能者の来会が開



JR名古屋駅タワーズガーデンで開催される「名古屋名駅新能」は、ことし第5回を迎え親世宗家らが来演して立見を含め3000人を越える観客に「世界遺産 能楽」を披露した。

第5回名駅新能

能「花筐」「紅葉狩」上演

「花筐」は、親世流能「花筐・儂之伝」シテ親世清和、ツレ久田勘助、子方・親世三郎太、ワキ・中村彌三郎、和泉流狂言「瓜盗人」(井上菊次郎)、親世流舞「天鼓」(久田三津子)、親世流仕舞「嵐山」(上田貴弘)、「梅」(梅田邦久)。



第22回 衣斐正宜後援会能

八月二十七日(日) 午後一時開演
名古屋能楽堂

母と子の別れ「隅田川」に思うこと
衣斐弘行

番 組

立業内藤 飛能
立業和久 莊太郎
鳴尾佐野 登
子方阪口 貴仁
シテ近藤乾之助

野口 敦弘
野口 琢弘
井上菊次郎

狂言 瘦 松

子方阪口 備
シテ衣斐 正宜

後見 寺井 良雄
衣斐 登 愛

河村真之介
後藤嘉津幸
藤田六郎兵衛

名古屋能楽堂定例公演 九月公演

【第一部】 午前十時半開始
【第二部】 午後二時半開始

観世流 俊 寛
成経加賀 敏彦
康頼清沢 一致
祖父江修一

後見 加藤 春枝
泉 嘉夫
井上 靖浩

金剛流 班 女
舞囃子 羽多野良子
後藤嘉津幸

和泉流 酢 薑
狂言 酢 薑
鹿光松田 高義
後見 伴野 俊彦

観世流 安達原 嘉宏
梅田 橋本 宰
今枝 正樹
河村総一郎
船戸 昭弘
加藤 洋輝
鹿取 希世

後見 今沢 美和
梅田 邦久
地謡 外山 孝充
本山 圭一
須部 清一
須部 正邦
須部 武田 大志

観世流 杜 若
前野 郁子
恋之舞 高安 勝久
寛 敏一
加藤 洋輝
福井四郎兵衛
竹市 学

和泉流 簀 屑
狂言 簀 屑
太郎冠者佐藤 友彦
次郎冠者佐藤 主人井上菊次郎

金春流 邯 鄲
仕舞 邯 鄲
伊藤 雄二
地謡 前田 登

宝生流 鶴
玉井 博祐
後見 竹内 澄子
衣斐 愛

附 祝 言
主 催 名古屋文化振興事業団 (名古屋能楽堂)
能楽協会名古屋支部

青陽会定式能(第450期)

九月九日(土) 十一時開演
名古屋能楽堂

仕舞 道明寺
八神 孝充
須部 敏彦

俊 寛
後見 前野 郁子
武田 邦久
地謡 星野 路子
松山 幸博
星野 美和
高橋 政一

仕舞 放下僧小歌
井筒 通小町
久田 勘助

(2面へつづく)

采女 (①面よりつづき)

近藤 幸江 杉江 元 河村 大 竹市 学
美奈保之伝 橋本 淳 後藤孝一郎

狂言 飛越 今枝 靖雄 井上菊次郎 後見 大野 弘之

熊坂 黒田 博 相元 正樹 谷口 有祥 加藤 洋輝
後見 久田 勘助 井上 靖浩 船戸 昭弘 大野 誠

附祝言 当日券 三〇〇〇円

主催 青陽会
お問合せ 名古屋市中東区一社三の六一二 久田 勘助 方
電話〇五二一七〇五 一五八五

戦後名古屋能楽史 ⑩

〔第十七章〕 竹尾 邦太郎

昭和三十八年 (一九六三)

「野守」倉本雅、狂言小舞二番「掛川」佐藤卯三郎、「小原木」井上松次郎がある。此の会について内藤泰二は「狂言」紙・第六十号に次の一文を寄稿する。「四月二十二日(月)午後五時開始の宝生会夜能で、観能講座の一つとして、能装束の着付けを公開する由。熱心家には見のがせない催しである。同夜は、右近の能(シテ吉田俊彦)があるので、その扮装を舞台で紹介しながら順に着付けし、女性の装束一般に及ぶ解説が、辰巳孝師によってなされる。また、小鼓芸話を田鍋惣太郎師より聞いたり、狂言小舞を組み入れたり、休憩室には、女面の写真展が用意されたり、なかなか意欲的な企画で、宝生会の若い生命力が感じられる。」

五月四日、岩手県山伏神楽狂

名古屋泉楽会・喜謡会大会

九月十六日(土)午後一時開演
名古屋能楽堂

番外仕舞 実 盛きり 観世 喜正

素謡 杜 若 山田 貞子 後藤登久雄
シテ奈倉 早苗 小鼓福井四郎兵衛 笛藤田六郎兵衛
ツレ観世 喜正 後藤嘉津幸

番囃子 翁 高橋 瞭一 五木田三郎 観世 喜之 駒瀬 直也

素謡 松 風 竹村 武 政興 若山弥栄子

仕舞 経 正きり 筒井 俊貴
独吟 景 清 山田 延恒

シテ諸隈 良吉
番囃子 葵上 ワキ駒瀬 直也 大鼓寛 鉦一 太鼓加藤 洋輝
ワキツレ観世 喜正 小鼓柳原富司忠 笛鹿取 希世

仕舞 籠太鼓 深見 一枝
舞囃子 采女 竹村 武 河村総一郎 鹿取 希世

名古屋宝生会定式能 (第50期) (第3回)

九月十七日(日)午後一時始
名古屋能楽堂

〔御来場歓迎〕

番外仕舞 恋重荷 観世 喜之 (終演予定 午後四時四十分頃)

忠 度 若山弥栄子 河村総一郎 鹿取 希世
芭 蕉 深見 しげ 河村総一郎 鹿取 希世
番外仕舞 恋重荷 観世 喜之

〔素謡省略所有〕

主 催 名古屋泉楽会
補 導 観世 喜之
観世 喜之 正

能 卷 組
辰巳大二郎 飯富 雅介 河村真之介 鬼頭 義命
後見 玉井 博祐 後藤嘉津幸 竹市 学
問 鹿島 俊裕 外山 通夫 稲川 寿一
衣斐 愛 石森 哲也 辰巳満次郎
織田 幸三 石黒 飛能
久野 幸三 内藤 飛能

言の公演がまつり同好会の主催で能楽殿にて行われる。「狂言」紙・第六十三号のコラム「狂言人語」は「非常にひびきた、伝統芸能であったが、あつた場所、あつた環境で見ると矢張り、何となく、穴というか、どこか、そぐわぬものが感じられたのは私だけの事だろうか。太鼓と鐘、そして舞う者は太鼓を前として相対するために正面は、何時も一人後向きになる背中の奉納が気になったのもそのせいかもしれない。芸には矢張りうけつがれた伝統のままの素朴さが光っていた。古いものには違いないと感じ入った。」

この神楽狂言の特徴とすること、は、方言で語る、服装が特に定まりなく、都合にて神楽依頼者の家の物を借りて演ずるといふ、簡易さがある。それが観客とのつながりを一層深めていることにもなっている。女装の場合と、特種人物のみ面をつける、その面にも用いているものが多い。農作繁栄の中樂の流であるところから、そうした所作を随時に挿入することで、台本にない台詞が出てきていた。したがって、台本はその目安であることが多い。

「鉄輪」梅若盛義。
五月十九日、龍吟会は先代藤田清兵衛重孝三十七回忌追善能で三月の社中会に次ぐ催し。番組は、舞囃子「海人」辰巳孝、能「蟬丸・替之型」観世元正・観世喜之、狂言「祐善」、舞囃子「東方朔」観世武雄・橋岡久共、能「鷲」金剛永護(12)、豊嶋弥左衛門(64)、高安滋郎(46)、西村欽也(39)、高安守彦・立石澄雄、藤田昭彦(10)、田鍋惣一郎(56)、亀井俊雄(67)、前川光長、後見・金剛巖(39)、地頭・今井幾三郎(50)、一調一管「唐船」金剛巖・森田光春・観世元信、舞囃子「二人静」大槻秀夫・山本博之、舞囃子「三輪」本田秀男、一調一管「獅子」藤田六郎兵衛・金春惣右衛門、能「船弁慶・後之出留之伝」船中之語・舟唄・宝生九郎、高安滋郎、和泉保之、の大能、就中「鷲」は十代のトリオ、シテ永護(先の三月十七日、先代金剛巖十三回忌追善能・京都金剛能楽堂で披き、今回は再演)、笛・六郎兵衛披き、太鼓・光長の共演が話題になる。なお、当初の番組は昭彦の曾祖父・田鍋

朝日狂言会

五月十三日は名古屋梅若盛義の素謡会、愛知文化講堂集會室で行われ素謡三番「威陽宮」梅若盛義、「花筐」梅若盛義、

朝日狂言会のパンフレット表紙とチケット

朝日狂言会のパンフレット表紙とチケット

五月十三日は名古屋梅若盛義の素謡会、愛知文化講堂集會室で行われ素謡三番「威陽宮」梅若盛義、「花筐」梅若盛義、

名古屋観世会定式能

九月十八日(祝)十二時半始
名古屋能楽堂

能 井筒 観世 芳宏 植田隆之亮 後藤嘉津幸 藤田六郎兵衛

狂言 重喜 住持野村又三郎 重喜野村 信明 後見 野村小三郎 楽屋働 松田 高義

仕舞 三輪 小島 一英 地頭 松山 幸親 祖父江修一 船弁慶 観世 芳伸 武田 邦弘 武田 大志

能 山姥 梅田 嘉宏 大槻 文蔵 高安 勝久 河村総一郎 加藤 洋輝 白頭 杉江 元 相元 正樹 久田 勘助 鹿取 希世 野村小三郎 野村小三郎

附祝言 当日券 8000円 事務所 名古屋市中東区台町2-16-15 電話 052-841-4632

主催 名古屋観世会 (終了五時頃)

②面よりつづき

惣太郎であったが病で入院、惣太郎長男惣一郎の代動となる。五月二十六日、鳳鳴会は社中会、番外に武田太加志の舞囃子「高砂」がある。

月が替り六月二日、朝日狂言会は第五回。狂言五番に小舞四番、素囃子一番である。狂言は「入間川」茂山倅一、「因幡堂」河村五造、素囃子「神舞」藤田六郎兵衛・田鍋惣一郎・寛範一・野崎太郎、狂言「馬口旁」井上松次郎、「悪太郎」茂山忠一良、小舞「忍ぶ其夜」石田喜樹、「若松」井上義次、「水車」野村又三郎、「鶴飼」和泉保之、「二人袴」井上祐一・佐藤卯三郎。

奇しくも同日、共同社法人で機関紙「狂言」のコラムに健筆を揮われた歌村彦四郎が死去(一八九二一九六三)享年七十一歳。初世井上菊次郎の四男で、次男・鉄次郎(二世菊次郎、一八八四一九四〇)、三男・新三郎(一八八七一九五五)と共に戦中・戦後の当地狂言界を支えてきた。性温厚、瘦爽やかな印象の瀟洒な紳士で、舞台の数はそう多くないがアドの役に徹していたようで、第一回朝日狂言会の「花折」の住持、第四回「栞宜山伏」の大黒、第二回名古屋和泉会「木六駄」の伯父(シテ太郎冠者は野村万蔵)など最晩年の品の良い爽やかな舞台は忘れ難い。「狂言」紙のコラム「狂言人語」の絶筆は昭和三十一年四月一日発行の第六十一号、その筆致から人柄も窺えよう。

弥生三月、桃の節句をすぎて早卯月の声を聞きます。何十年振りかの異常寒波もやつと底をついて、梅は満開をすぎ桃も桜もチラホラ、ほころびかける今日此頃となりました。やつとおとづれた春、風も暖かい陽春の日ざしを浴びてそろそろ若芽も萌え出でる絶好のシーズンを迎えて演能も盛んとなります。今月は又掬水会、観世会、観世会、茲水会と観世流の独演会の観を呈しております。三月三十一日には中日五流能があり、なかなかの盛会でありました。六月二日には恒例の朝日狂言会を計画しております。今回は関西

の雄、茂山忠一良及び茂山倅一の両氏を懇請して惣太郎、入間川を上演して頂く予定です。詳細は追って発表します。上方狂言独特のおおらかさと洗練された型の美しさをしみじみお鑑賞頂けるものと自負しております。野村万蔵氏父子の渡米が実現しました。アメリカで、日本の狂言を教え、実演をされる由、多大なる成果を期待してやみません。二十六日新聞紙上に文部省芸術選奨受賞者として三宅藤九郎の名を見出しました。和泉会を中心に多くの曲を手がけ、稀曲の復活に情熱と演出力のかたまひける氏の受賞は当然の事かもしれませんが、狂言界もこころ喜びにたえませんとすると共に喜びにたえませんと。謹んで誌上からお喜び申し上げます。野村又三郎氏の也留舞会も十八日に公演されます。よろしく御支援下さい。和泉保之師の五月の稽古日は、十六日・十七日・十八日・十九日

の四日間です。お誘い合わせ御来場下さい。

六月五日、熱田神宮大祭奉納能は舞囃子五番「那耶」柴田初太郎、「西王母」大塚一、「鶴飼」鬼頭五朗、「胡蝶」有賀滋子、「絃上」内藤藤三、独吟「花籠」二井栄逸、一調「松山鏡」高安滋郎、西村欽也・鬼頭八郎、狂言小舞「七ツ子」和泉保之。終演後、脇方高安流長老の西村弘敬(76)舞台引退を表明につき労を謝して記念品贈呈式が行われる。六月六日、世阿弥祭・名匠を聞く会。仕舞八番と素囃子三番を織り込んだ番組で、仕舞は「蟬丸」有賀滋子、「経正」塚本秀雄、「花月」梅若景英、「天鼓」親世武雄、「通小町」親世喜之、「鉄輪」親世鏡之丞、「藤戸」梅若六郎、「笠之段」山本勝一、素囃子は「頼政」親世喜之、「大原御幸」梅若六郎、「葵上」親世鏡之丞。六月十六日は名古屋観世会定式能第三回。素囃子「籠太鼓」高野瀬

透、仕舞五番「養老」杉村竹翠、「兼平」梅田邦久、「班女」殿島修二、「三輪」竹内六郎、「岩船」石谷初蔵、能「盛久」梅若万三郎、狂言「雷」佐藤卯三郎、能「玉鬘」大槻秀夫、仕舞三番「那耶」柴田初太郎、「知章」大槻文蔵、「歌占」高橋静夫、能「山姥・白頭・長杖之伝」親世鏡之丞。六月二十三日、名古屋宝生会定式能・第七期第二回。素囃子「加茂」倉本雅、仕舞三番「兼平」内藤藤三、「笹之段」前田忠茂、「阿漕」武田喜水、能「杜若」辰巳孝、狂言「空腕」井上松次郎、能「善知鳥」宝生英雄。六月三十日は掬水青陽会第七期第一回。能「水室」柴田取武、仕舞四番「花月」石谷初蔵、「通盛」河村鍾二、「船弁慶」竹内六郎、「善知鳥」塚本秀雄、能「熊野」久田秀雄、狂言「水汲」佐藤卯三郎、仕舞二番「賀茂」山中義滋、「阿漕」柴田初太郎、能「小鍛冶・黒頭」親世元昭・高安滋郎。以下次号

が達者。景勝地を背景に御当地狂言の味わいは千五郎父子のお豆腐の味か。(23分)「三輪・白式神楽」小書は元来片山家のもの、分家の嗣子・伸吾の被キ。作物引廻しは萌黄地に茶の唐花文。秘曲らしく音取置鼓の莊重に玄寶僧都ワキ欣哉の気品が静かに舞台を引き締める。山居のワキに格・開伽の水を毎日届ける里女シテ伸吾は面深井・無紅唐織姿、深まる秋、木の葉掻き敷く、と降り積む落葉を右下に眺め沈思、そのまま下樋の水音を聞く風情、長身のシテがまどう寂しきは中々。夜寒に衣を無心の場は、ワキの差し出す衣に立って行き、膝ついて差し延べる手に、ワキは身を乗り出す様に授ける(無造作物へ被うと目目の天照大神岩戸隠れの再現、今風に言えばシミュレーションである。スミで両袖被キ左へ廻つて下居に岩戸へ入る常闇の世界を象徴。立つと、次は歌く八百万の神が奏する神楽、高潮する囃子に強々と踏む三ツ拍子、目付柱へ話メ、左へ廻り込み大小前、四ツ拍子踏み、腰を屈め正先へ、袖担き右へ廻り招いてする常座、袖を肩に替え中ノ舞に直ル。スミで扇を左手に袖抱える様に三ノ松へ抜けると、左右に小廻り、左袖被キ、左へ遠く見込むと三鼓(大・二・光範)の流シと笛・市和のアシラヒで右手の扇で面を隠してするくく作物の中へ。地へ神楽を奏して舞ひ給へば、と袖を下ろし、天照大神と左袖返シ、(岩戸を)少し開き給へば、と雲ノ扇、(また(常闇の雲晴れて)、と作物を出てスミへ、左へ廻り込み大小前で面使ヒに、人の面、を眺め脇正へ。面白や、と大きくユークン扇から、神の御声の、と左袖返シ、(妙なる始めの物語、と指差開キ。キリは「思へば伊勢と三輪の神、と踏む六ツ拍子から(一体(分身の)、とワキへアシラヒ、(今更何と、一ノ松へ抜けると、その間の戸の、と左袖上げ地の裡にそのま、幕へ、ワキが下居合掌してトメ。規矩正しく真摯な舞ぶりが清しい片山伸吾の被キだった。(1時間47分・6月10日・第31回能にした

「東岸居士」旅人ワキ隆之亮、上洛して清水寺に参り、門前ノ者アイ茂の口利きで架橋費用の勸進(募金)に励む風狂の喝僧僧・東岸居士シテ慶次郎に遇う。興味津々のワキに乗せられるのでは、と思わせるシテの帳面は問答・掛合、身を入れ対応するシテは初同那弘・磯道ら伝法の道はまず「勧め(勸進)に入りつつ、とワキへ話メ、右手の扇で指すところに一念をみせ、謡を所望されれば舞うのも伝法普及のためのプロバガンダ(宣伝)の一端、扇と数珠互いに右、左へと手を替え中之舞三段、すかつかと舞上げると、衆生教化を目指し踰念仏を民衆に勧めた一遍上人の「御法語」より引くク

仲夏の舞台から

第三十一回・能にしたしむ会「観世会」名古屋宝生会と名古屋能楽堂 定例公演・市民能楽セミナー

竹尾邦太郎

「吹取」清水観音へ妻乞いの願掛けをするシテ正邦に、月の夜に五条橋上で笛を吹くと現われる女を娶れ、の御託言に笛不得手のシテ、「名代に笛を吹いて下されば恭うござる」と何某アド千五郎に頼み込めば、「これは恋の音取と云うて我が家の名籠(ち、横笛の一種)でござる」と乗り気で妻乞いの笛の代理を引き受けるアド。ところが現われた女アド茂の本命は笛を吹く男に外ならず、「あら有難や、あら有難や」と頭を下げるシテは無視される。一悶着あつて「やうく合点なされたやうで御座る」と襟元直し女に近づくと正邦が様になっており、千五郎の笛

透、仕舞五番「養老」杉村竹翠、「兼平」梅田邦久、「班女」殿島修二、「三輪」竹内六郎、「岩船」石谷初蔵、能「盛久」梅若万三郎、狂言「雷」佐藤卯三郎、能「玉鬘」大槻秀夫、仕舞三番「那耶」柴田初太郎、「知章」大槻文蔵、「歌占」高橋静夫、能「山姥・白頭・長杖之伝」親世鏡之丞。六月二十三日、名古屋宝生会定式能・第七期第二回。素囃子「加茂」倉本雅、仕舞三番「兼平」内藤藤三、「笹之段」前田忠茂、「阿漕」武田喜水、能「杜若」辰巳孝、狂言「空腕」井上松次郎、能「善知鳥」宝生英雄。六月三十日は掬水青陽会第七期第一回。能「水室」柴田取武、仕舞四番「花月」石谷初蔵、「通盛」河村鍾二、「船弁慶」竹内六郎、「善知鳥」塚本秀雄、能「熊野」久田秀雄、狂言「水汲」佐藤卯三郎、仕舞二番「賀茂」山中義滋、「阿漕」柴田初太郎、能「小鍛冶・黒頭」親世元昭・高安滋郎。以下次号

む四ツ拍子、舞台へ戻つてはへげに太鼓も羯鼓も笛筆筆管、と踏む四ツ拍子、は歌舞菩薩の御法、仏法へ帰依の鼓舞、慶次郎、遊狂の舞尽しの壮快。(57分) 因に東岸居士、出自不詳というが尾張に辿り着いた人で、居士隠栖の跡という巷説がある旧尾張堀越村(現名古屋市区内)に東岸町がある。尾崎久弥著「名古屋芸能史」に記事。

「吹取」清水観音へ妻乞いの願掛けをするシテ正邦に、月の夜に五条橋上で笛を吹くと現われる女を娶れ、の御託言に笛不得手のシテ、「名代に笛を吹いて下されば恭うござる」と何某アド千五郎に頼み込めば、「これは恋の音取と云うて我が家の名籠(ち、横笛の一種)でござる」と乗り気で妻乞いの笛の代理を引き受けるアド。ところが現われた女アド茂の本命は笛を吹く男に外ならず、「あら有難や、あら有難や」と頭を下げるシテは無視される。一悶着あつて「やうく合点なされたやうで御座る」と襟元直し女に近づくと正邦が様になっており、千五郎の笛

ス、この一連の象徴的な型を持つ持丁寧に扱いたる確に表現する。上ゲ端あと、糸を辿り行く行程に、と正先で指廻シ右へ廻りスミから作物へ話メルト、糸の先は人に非ず「杉の下枝に止りたり、と。三巻の糸が残りしより三輪のしるしの、元となったと六ツ拍子に表わす羞恥の思いへ語るにつけ、とスミからワキを見込み、(恥かしや、と右へ廻り常座、其処で正へ直ラナイところに恥しの思い強くみせるか。ロンギは神代の岩戸伝説で、かの上人を慰めん、と常座からワキを袖枝で指シ、(八百万の神遊、はシテが謡い、(これぞ神楽の始めなる、と受ける地にシテは袖枝を載き拜をして「千早ぶる、と作物へ被うと目目の天照大神岩戸隠れの再現、今風に言えばシミュレーションである。スミで両袖被キ左へ廻つて下居に岩戸へ入る常闇の世界を象徴。立つと、次は歌く八百万の神が奏する神楽、高潮する囃子に強々と踏む三ツ拍子、目付柱へ話メ、左へ廻り込み大小前、四ツ拍子踏み、腰を屈め正先へ、袖担き右へ廻り招いてする常座、袖を肩に替え中ノ舞に直ル。スミで扇を左手に袖抱える様に三ノ松へ抜けると、左右に小廻り、左袖被キ、左へ遠く見込むと三鼓(大・二・光範)の流シと笛・市和のアシラヒで右手の扇で面を隠してするくく作物の中へ。地へ神楽を奏して舞ひ給へば、と袖を下ろし、天照大神と左袖返シ、(岩戸を)少し開き給へば、と雲ノ扇、(また(常闇の雲晴れて)、と作物を出てスミへ、左へ廻り込み大小前で面使ヒに、人の面、を眺め脇正へ。面白や、と大きくユークン扇から、神の御声の、と左袖返シ、(妙なる始めの物語、と指差開キ。キリは「思へば伊勢と三輪の神、と踏む六ツ拍子から(一体(分身の)、とワキへアシラヒ、(今更何と、一ノ松へ抜けると、その間の戸の、と左袖上げ地の裡にそのま、幕へ、ワキが下居合掌してトメ。規矩正しく真摯な舞ぶりが清しい片山伸吾の被キだった。(1時間47分・6月10日・第31回能にした

「吹取」清水観音へ妻乞いの願掛けをするシテ正邦に、月の夜に五条橋上で笛を吹くと現われる女を娶れ、の御託言に笛不得手のシテ、「名代に笛を吹いて下されば恭うござる」と何某アド千五郎に頼み込めば、「これは恋の音取と云うて我が家の名籠(ち、横笛の一種)でござる」と乗り気で妻乞いの笛の代理を引き受けるアド。ところが現われた女アド茂の本命は笛を吹く男に外ならず、「あら有難や、あら有難や」と頭を下げるシテは無視される。一悶着あつて「やうく合点なされたやうで御座る」と襟元直し女に近づくと正邦が様になっており、千五郎の笛

「吹取」清水観音へ妻乞いの願掛けをするシテ正邦に、月の夜に五条橋上で笛を吹くと現われる女を娶れ、の御託言に笛不得手のシテ、「名代に笛を吹いて下されば恭うござる」と何某アド千五郎に頼み込めば、「これは恋の音取と云うて我が家の名籠(ち、横笛の一種)でござる」と乗り気で妻乞いの笛の代理を引き受けるアド。ところが現われた女アド茂の本命は笛を吹く男に外ならず、「あら有難や、あら有難や」と頭を下げるシテは無視される。一悶着あつて「やうく合点なされたやうで御座る」と襟元直し女に近づくと正邦が様になっており、千五郎の笛

「吹取」清水観音へ妻乞いの願掛けをするシテ正邦に、月の夜に五条橋上で笛を吹くと現われる女を娶れ、の御託言に笛不得手のシテ、「名代に笛を吹いて下されば恭うござる」と何某アド千五郎に頼み込めば、「これは恋の音取と云うて我が家の名籠(ち、横笛の一種)でござる」と乗り気で妻乞いの笛の代理を引き受けるアド。ところが現われた女アド茂の本命は笛を吹く男に外ならず、「あら有難や、あら有難や」と頭を下げるシテは無視される。一悶着あつて「やうく合点なされたやうで御座る」と襟元直し女に近づくと正邦が様になっており、千五郎の笛

「吹取」清水観音へ妻乞いの願掛けをするシテ正邦に、月の夜に五条橋上で笛を吹くと現われる女を娶れ、の御託言に笛不得手のシテ、「名代に笛を吹いて下されば恭うござる」と何某アド千五郎に頼み込めば、「これは恋の音取と云うて我が家の名籠(ち、横笛の一種)でござる」と乗り気で妻乞いの笛の代理を引き受けるアド。ところが現われた女アド茂の本命は笛を吹く男に外ならず、「あら有難や、あら有難や」と頭を下げるシテは無視される。一悶着あつて「やうく合点なされたやうで御座る」と襟元直し女に近づくと正邦が様になっており、千五郎の笛

「吹取」清水観音へ妻乞いの願掛けをするシテ正邦に、月の夜に五条橋上で笛を吹くと現われる女を娶れ、の御託言に笛不得手のシテ、「名代に笛を吹いて下されば恭うござる」と何某アド千五郎に頼み込めば、「これは恋の音取と云うて我が家の名籠(ち、横笛の一種)でござる」と乗り気で妻乞いの笛の代理を引き受けるアド。ところが現われた女アド茂の本命は笛を吹く男に外ならず、「あら有難や、あら有難や」と頭を下げるシテは無視される。一悶着あつて「やうく合点なされたやうで御座る」と襟元直し女に近づくと正邦が様になっており、千五郎の笛

「吹取」清水観音へ妻乞いの願掛けをするシテ正邦に、月の夜に五条橋上で笛を吹くと現われる女を娶れ、の御託言に笛不得手のシテ、「名代に笛を吹いて下されば恭うござる」と何某アド千五郎に頼み込めば、「これは恋の音取と云うて我が家の名籠(ち、横笛の一種)でござる」と乗り気で妻乞いの笛の代理を引き受けるアド。ところが現われた女アド茂の本命は笛を吹く男に外ならず、「あら有難や、あら有難や」と頭を下げるシテは無視される。一悶着あつて「やうく合点なされたやうで御座る」と襟元直し女に近づくと正邦が様になっており、千五郎の笛

「吹取」清水観音へ妻乞いの願掛けをするシテ正邦に、月の夜に五条橋上で笛を吹くと現われる女を娶れ、の御託言に笛不得手のシテ、「名代に笛を吹いて下されば恭うござる」と何某アド千五郎に頼み込めば、「これは恋の音取と云うて我が家の名籠(ち、横笛の一種)でござる」と乗り気で妻乞いの笛の代理を引き受けるアド。ところが現われた女アド茂の本命は笛を吹く男に外ならず、「あら有難や、あら有難や」と頭を下げるシテは無視される。一悶着あつて「やうく合点なされたやうで御座る」と襟元直し女に近づくと正邦が様になっており、千五郎の笛

「吹取」清水観音へ妻乞いの願掛けをするシテ正邦に、月の夜に五条橋上で笛を吹くと現われる女を娶れ、の御託言に笛不得手のシテ、「名代に笛を吹いて下されば恭うござる」と何某アド千五郎に頼み込めば、「これは恋の音取と云うて我が家の名籠(ち、横笛の一種)でござる」と乗り気で妻乞いの笛の代理を引き受けるアド。ところが現われた女アド茂の本命は笛を吹く男に外ならず、「あら有難や、あら有難や」と頭を下げるシテは無視される。一悶着あつて「やうく合点なされたやうで御座る」と襟元直し女に近づくと正邦が様になっており、千五郎の笛

「吹取」清水観音へ妻乞いの願掛けをするシテ正邦に、月の夜に五条橋上で笛を吹くと現われる女を娶れ、の御託言に笛不得手のシテ、「名代に笛を吹いて下されば恭うござる」と何某アド千五郎に頼み込めば、「これは恋の音取と云うて我が家の名籠(ち、横笛の一種)でござる」と乗り気で妻乞いの笛の代理を引き受けるアド。ところが現われた女アド茂の本命は笛を吹く男に外ならず、「あら有難や、あら有難や」と頭を下げるシテは無視される。一悶着あつて「やうく合点なされたやうで御座る」と襟元直し女に近づくと正邦が様になっており、千五郎の笛

「吹取」清水観音へ妻乞いの願掛けをするシテ正邦に、月の夜に五条橋上で笛を吹くと現われる女を娶れ、の御託言に笛不得手のシテ、「名代に笛を吹いて下されば恭うござる」と何某アド千五郎に頼み込めば、「これは恋の音取と云うて我が家の名籠(ち、横笛の一種)でござる」と乗り気で妻乞いの笛の代理を引き受けるアド。ところが現われた女アド茂の本命は笛を吹く男に外ならず、「あら有難や、あら有難や」と頭を下げるシテは無視される。一悶着あつて「やうく合点なされたやうで御座る」と襟元直し女に近づくと正邦が様になっており、千五郎の笛

「吹取」清水観音へ妻乞いの願掛けをするシテ正邦に、月の夜に五条橋上で笛を吹くと現われる女を娶れ、の御託言に笛不得手のシテ、「名代に笛を吹いて下されば恭うござる」と何某アド千五郎に頼み込めば、「これは恋の音取と云うて我が家の名籠(ち、横笛の一種)でござる」と乗り気で妻乞いの笛の代理を引き受けるアド。ところが現われた女アド茂の本命は笛を吹く男に外ならず、「あら有難や、あら有難や」と頭を下げるシテは無視される。一悶着あつて「やうく合点なされたやうで御座る」と襟元直し女に近づくと正邦が様になっており、千五郎の笛

「吹取」清水観音へ妻乞いの願掛けをするシテ正邦に、月の夜に五条橋上で笛を吹くと現われる女を娶れ、の御託言に笛不得手のシテ、「名代に笛を吹いて下されば恭うござる」と何某アド千五郎に頼み込めば、「これは恋の音取と云うて我が家の名籠(ち、横笛の一種)でござる」と乗り気で妻乞いの笛の代理を引き受けるアド。ところが現われた女アド茂の本命は笛を吹く男に外ならず、「あら有難や、あら有難や」と頭を下げるシテは無視される。一悶着あつて「やうく合点なされたやうで御座る」と襟元直し女に近づくと正邦が様になっており、千五郎の笛

「吹取」清水観音へ妻乞いの願掛けをするシテ正邦に、月の夜に五条橋上で笛を吹くと現われる女を娶れ、の御託言に笛不得手のシテ、「名代に笛を吹いて下されば恭うござる」と何某アド千五郎に頼み込めば、「これは恋の音取と云うて我が家の名籠(ち、横笛の一種)でござる」と乗り気で妻乞いの笛の代理を引き受けるアド。ところが現われた女アド茂の本命は笛を吹く男に外ならず、「あら有難や、あら有難や」と頭を下げるシテは無視される。一悶着あつて「やうく合点なされたやうで御座る」と襟元直し女に近づくと正邦が様になっており、千五郎の笛

「吹取」清水観音へ妻乞いの願掛けをするシテ正邦に、月の夜に五条橋上で笛を吹くと現われる女を娶れ、の御託言に笛不得手のシテ、「名代に笛を吹いて下されば恭うござる」と何某アド千五郎に頼み込めば、「これは恋の音取と云うて我が家の名籠(ち、横笛の一種)でござる」と乗り気で妻乞いの笛の代理を引き受けるアド。ところが現われた女アド茂の本命は笛を吹く男に外ならず、「あら有難や、あら有難や」と頭を下げるシテは無視される。一悶着あつて「やうく合点なされたやうで御座る」と襟元直し女に近づくと正邦が様になっており、千五郎の笛

「吹取」清水観音へ妻乞いの願掛けをするシテ正邦に、月の夜に五条橋上で笛を吹くと現われる女を娶れ、の御託言に笛不得手のシテ、「名代に笛を吹いて下されば恭うござる」と何某アド千五郎に頼み込めば、「これは恋の音取と云うて我が家の名籠(ち、横笛の一種)でござる」と乗り気で妻乞いの笛の代理を引き受けるアド。ところが現われた女アド茂の本命は笛を吹く男に外ならず、「あら有難や、あら有難や」と頭を下げるシテは無視される。一悶着あつて「やうく合点なされたやうで御座る」と襟元直し女に近づくと正邦が様になっており、千五郎の笛

「吹取」清水観音へ妻乞いの願掛けをするシテ正邦に、月の夜に五条橋上で笛を吹くと現われる女を娶れ、の御託言に笛不得手のシテ、「名代に笛を吹いて下されば恭うござる」と何某アド千五郎に頼み込めば、「これは恋の音取と云うて我が家の名籠(ち、横笛の一種)でござる」と乗り気で妻乞いの笛の代理を引き受けるアド。ところが現われた女アド茂の本命は笛を吹く男に外ならず、「あら有難や、あら有難や」と頭を下げるシテは無視される。一悶着あつて「やうく合点なされたやうで御座る」と襟元直し女に近づくと正邦が様になっており、千五郎の笛

「吹取」清水観音へ妻乞いの願掛けをするシテ正邦に、月の夜に五条橋上で笛を吹くと現われる女を娶れ、の御託言に笛不得手のシテ、「名代に笛を吹いて下されば恭うござる」と何某アド千五郎に頼み込めば、「これは恋の音取と云うて我が家の名籠(ち、横笛の一種)でござる」と乗り気で妻乞いの笛の代理を引き受けるアド。ところが現われた女アド茂の本命は笛を吹く男に外ならず、「あら有難や、あら有難や」と頭を下げるシテは無視される。一悶着あつて「やうく合点なされたやうで御座る」と襟元直し女に近づくと正邦が様になっており、千五郎の笛

「吹取」清水観音へ妻乞いの願掛けをするシテ正邦に、月の夜に五条橋上で笛を吹くと現われる女を娶れ、の御託言に笛不得手のシテ、「名代に笛を吹いて下されば恭うござる」と何某アド千五郎に頼み込めば、「これは恋の音取と云うて我が家の名籠(ち、横笛の一種)でござる」と乗り気で妻乞いの笛の代理を引き受けるアド。ところが現われた女アド茂の本命は笛を吹く男に外ならず、「あら有難や、あら有難や」と頭を下げるシテは無視される。一悶着あつて「やうく合点なされたやうで御座る」と襟元直し女に近づくと正邦が様になっており、千五郎の笛

「吹取」清水観音へ妻乞いの願掛けをするシテ正邦に、月の夜に五条橋上で笛を吹くと現われる女を娶れ、の御託言に笛不得手のシテ、「名代に笛を吹いて下されば恭うござる」と何某アド千五郎に頼み込めば、「これは恋の音取と云うて我が家の名籠(ち、横笛の一種)でござる」と乗り気で妻乞いの笛の代理を引き受けるアド。ところが現われた女アド茂の本命は笛を吹く男に外ならず、「あら有難や、あら有難や」と頭を下げるシテは無視される。一悶着あつて「やうく合点なされたやうで御座る」と襟元直し女に近づくと正邦が様になっており、千五郎の笛

「吹取」清水観音へ妻乞いの願掛けをするシテ正邦に、月の夜に五条橋上で笛を吹くと現われる女を娶れ、の御託言に笛不得手のシテ、「名代に笛を吹いて下されば恭うござる」と何某アド千五郎に頼み込めば、「これは恋の音取と云うて我が家の名籠(ち、横笛の一種)でござる」と乗り気で妻乞いの笛の代理を引き受けるアド。ところが現われた女アド茂の本命は笛を吹く男に外ならず、「あら有難や、あら有難や」と頭を下げるシテは無視される。一悶着あつて「やうく合点なされたやうで御座る」と襟元直し女に近づくと正邦が様になっており、千五郎の笛

「吹取」清水観音へ妻乞いの願掛けをするシテ正邦に、月の夜に五条橋上で笛を吹くと現われる女を娶れ、の御託言に笛不得手のシテ、「名代に笛を吹いて下されば恭うござる」と何某アド千五郎に頼み込めば、「これは恋の音取と云うて我が家の名籠(ち、横笛の一種)でござる」と乗り気で妻乞いの笛の代理を引き受けるアド。ところが現われた女アド茂の本命は笛を吹く男に外ならず、「あら有難や、あら有難や」と頭を下げるシテは無視される。一悶着あつて「やうく合点なされたやうで御座る」と襟元直し女に近づくと正邦が様になっており、千五郎の笛

「吹取」清水観音へ妻乞いの願掛けをするシテ正邦に、月の夜に五条橋上で笛を吹くと現われる女を娶れ、の御託言に笛不得手のシテ、「名代に笛を吹いて下されば恭うござる」と何某アド千五郎に頼み込めば、「これは恋の音取と云うて我が家の名籠(ち、横笛の一種)でござる」と乗り気で妻乞いの笛の代理を引き受けるアド。ところが現われた女アド茂の本命は笛を吹く男に外ならず、「あら有難や、あら有難や」と頭を下げるシテは無視される。一悶着あつて「やうく合点なされたやうで御座る」と襟元直し女に近づくと正邦が様になっており、千五郎の笛

「吹取」清水観音へ妻乞いの願掛けをするシテ正邦に、月の夜に五条橋上で笛を吹くと現われる女を娶れ、の御託言に笛不得手のシテ、「名代に笛を吹いて下されば恭うござる」と何某アド千五郎に頼み込めば、「これは恋の音取と云うて我が家の名籠(ち、横笛の一種)でござる」と乗り気で妻乞いの笛の代理を引き受けるアド。ところが現われた女アド茂の本命は笛を吹く男に外ならず、「あら有難や、あら有難や」と頭を下げるシテは無視される。一悶着あつて「やうく合点なされたやうで御座る」と襟元直し女に近づくと正邦が様になっており、千五郎の笛

「吹取」清水観音へ妻乞いの願掛けをするシテ正邦に、月の夜に五条橋上で笛を吹くと現われる女を娶れ、の御託言に笛不得手のシテ、「名代に笛を吹いて下されば恭うござる」と何某アド千五郎に頼み込めば、「これは恋の音取と云うて我が家の名籠(ち、横笛の一種)でござる」と乗り気で妻乞いの笛の代理を引き受けるアド。ところが現われた女アド茂の本命は笛を吹く男に外ならず、「あら有難や、あら有難や」と頭を下げるシテは無視される。一悶着あつて「やうく合点なされたやうで御座る」と襟元直し女に近づくと正邦が様になっており、千五郎の笛

「吹取」清水観音へ妻乞いの願掛けをするシテ正邦に、月の夜に五条橋上で笛を吹くと現われる女を娶れ、の御託言に笛不得手のシテ、「名代に笛を吹いて下されば恭うござる」と何某アド千五郎に頼み込めば、「これは恋の音取と云うて我が家の名籠(ち、横笛の一種)でござる」と乗り気で妻乞いの笛の代理を引き受けるアド。ところが現われた女アド茂の本命は笛を吹く男に外ならず、「あら有難や、あら有難や」と頭を下げるシテは無視される。一悶着あつて「やうく合点なされたやうで御座る」と襟元直し女に近づくと正邦が様になっており、千五郎の笛

「吹取」清水観音へ妻乞いの願掛けをするシテ正邦に、月の夜に五条橋上で笛を吹くと現われる女を娶れ、の御託言に笛不得手のシテ、「名代に笛を吹いて下されば恭うござる」と何某アド千五郎に頼み込めば、「これは恋の音取と云うて我が家の名籠(ち、横笛の一種)でござる」と乗り気で妻乞いの笛の代理を引き受けるアド。ところが現われた女アド茂の本命は笛を吹く男に外ならず、「あら有難や、あら有難や」と頭を下げるシテは無視される。一悶着あつて「やうく合点なされたやうで御座る」と襟元直し女に近づくと正邦が様になっており、千五郎の笛

「吹取」清水観音へ妻乞いの願掛けをするシテ正邦に、月の夜に五条橋上で笛を吹くと現われる女を娶れ、の御託言に笛不得手のシテ、「名代に笛を吹いて下されば恭うござる」と何某アド千五郎に頼み込めば、「これは恋の音取と云うて我が家の名籠(ち、横笛の一種)でござる」と乗り気で妻乞いの笛の代理を引き受けるアド。ところが現われた女アド茂の本命は笛を吹く男に外ならず、「あら有難や、あら有難や」と頭を下げるシテは無視される。一悶着あつて「やうく合点なされたやうで御座る」と襟元直し女に近づくと正邦が様になっており、千五郎の笛

「吹取」清水観音へ妻乞いの願掛けをするシテ正邦に、月の夜に五条橋上で笛を吹くと現われる女を娶れ、の御託言に笛不得手のシテ、「名代に笛を吹いて下されば恭うござる」と何某アド千五郎に頼み込めば、「これは恋の音取と云うて我が家の名籠(ち、横笛の一種)でござる」と乗り気で妻乞いの笛の代理を引き受けるアド。ところが現われた女アド茂の本命は笛を吹く男に外ならず、「あら有難や、あら有難や」と頭を下げるシテは無視される。一悶着あつて「やうく合点なされたやうで御座る」と襟元直し女に近づくと正邦が様になっており、千五郎の笛

「吹取」清水観音へ妻乞いの願掛けをするシテ正邦に、月の夜に五条橋上で笛を吹くと現われる女を娶れ、の御託言に笛不得手のシテ、「名代に笛を吹いて下されば恭うござる」と何某アド千五郎に頼み込めば、「これは恋の音取と云うて我が家の名籠(ち、横笛の一種)でござる」と乗り気で妻乞いの笛の代理を引き受けるアド。ところが現われた女アド茂の本命は笛を吹く男に外ならず、「あら有難や、あら有難や」と頭を下げるシテは無視される。一悶着あつて「やうく合点なされたやうで御座る」と襟元直し女に近づくと正邦が様になっており、千五郎の笛

「吹取」清水観音へ妻乞いの願掛けをするシテ正邦に、月の夜に五条橋上で笛を吹くと現われる女を娶れ、の御託言に笛不得手のシテ、「名代に笛を吹いて下されば恭うござる」と何某アド千五郎に頼み込めば、「これは恋の音取と云うて我が家の名籠(ち、横笛の一種)でござる」と乗り気で妻乞いの笛の代理を引き受けるアド。ところが現われた女アド茂の本命は笛を吹く男に外ならず、「あら有難や、あら有難や」と頭を下げるシテは無視される。一悶着あつて「やうく合点なされたやうで御座る」と襟元直し女に近づくと正邦が様になっており、千五郎の笛

「吹取」清水観音へ妻乞いの願掛けをするシテ正邦に、月の夜に五条橋上で笛を吹くと現われる女を娶れ、の御託言に笛不得手のシテ、「名代に笛を吹いて下されば恭うござる」と何某アド千五郎に頼み込めば、「これは恋の音取と云うて我が家の名籠(ち、横笛の一種)でござる」と乗り気で妻乞いの笛の代理を引き受けるアド。ところが現われた女アド茂の本命は笛を吹く男に外ならず、「あら有難や、あら有難や」と頭を下げるシテは無視される。一悶着あつて「やうく合点なされたやうで御座る」と襟元直し女に近づくと正邦が様になっており、千五郎の笛

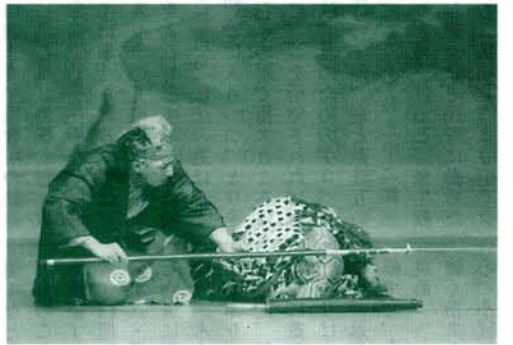
「吹取」清水観音へ妻乞いの願掛けをするシテ正邦に、月の夜に五条橋上で笛を吹くと現われる女を娶れ、の御託言に笛不得手のシテ、「名代に笛を吹いて下されば恭うござる」と何某アド千五郎に頼み込めば、「これは恋の音取と云うて我が家の名籠(ち、横笛の一種)でござる」と乗り気で妻乞いの笛の代理を引き受けるアド。ところが現われた女アド茂の本命は笛を吹く男に外ならず、「あら有難や、あら有難や」と頭を下げるシテは無視される。一悶着あつて「やうく合点なされたやうで御座る」と襟元直し女に近づくと正邦が様になっており、千五郎の笛

「吹取」清水観音へ妻乞いの願掛けをするシテ正邦に、月の夜に五条橋上で笛を吹くと現われる女を娶れ、の御託言に笛不得手のシテ、「名代に笛を吹いて下されば恭うござる」と何某アド千五郎に頼み込めば、「これは恋の音取と云うて我が家の名籠(ち、横笛の一種)でござる」と乗り気で妻乞いの笛の代理を引き受けるアド。ところが現われた女アド茂の本命は笛を吹く男に外ならず、「あら有難や、あら有難や」と頭を下げるシテは無視される。一悶着あつて「やうく合点なされたやうで御座る」と襟元直し女に近づくと正邦が様になっており、千五郎の笛

「吹取」清水観音へ妻乞いの願掛けをするシテ正邦に、月の夜に五条橋上で笛を吹くと現われる女を娶れ、の御託言に笛不得手のシテ、「名代に笛を吹いて下されば恭うござる」と何某アド千五郎に頼み込めば、「これは恋の音取と云うて我が家の名籠(ち、横笛の一種)でござる」と乗り気で妻乞いの笛の代理を引き受けるアド。ところが現われた女アド茂の本命は笛を吹く男に外ならず、「あら有難や、あら有難や」と頭を下げるシテは無視される。一悶着あつて「やうく合点



観世会「千手・鄧曲之舞」左より観世喜之、宝生欣哉、観世喜正



観世会「悪坊」左より佐藤 融、佐藤友彦



名古屋観世会「天鼓・弄鼓之舞」武田志房 ④前シテ⑤後シテ (杉浦賢次氏撮影)

この問答に花の名は夕顔、花の主は... 問われ、ば故人で、もはや昔語り、五条辺りの夕顔、と仄めかせ、立花の蔭に、と常座で開き中入する短い前場、秋の黄昏の物寂しい空気が送り笛(六郎兵衛)の寂さびとした音色と相俟ち惹きつける。因に立花供養は仏事に用いた花の日向、その心は針供養、夏土用丑の日に放生池に鯉を放ち供用するに同じ。アヒ所ノ者は清造、ワキに光源氏と夕顔ノ君との子細を問われる俣に語って退くと後場。先の里女を怪しみ、五条辺り高這い纏わり瓢箪(金と銀)の下がる荒廃した夕顔の館、常座の半部屋の前に立つワキの思い、夢の姿を見せ給へ菩提を深く申はん、を地(良雄・満次郎)がしつとり語う。『草の半部』押しあけて、と後見が押し上げる俣に左手添え、床几を立つと緋大口・白地長絹(下り藤二流水文)の後シテ夕顔ノ霊が作物を出る。舞ガセは光源氏との出会いのエピソードを再現する後シテ。『あの花折れと宜へば、と胸指シから扇開き左手添え、外へ吊り上げられた半部の下

へ。『此花折りて、と扇戴いたま... 大小前へ退って正二直り上げ端、扇を下げて源氏つくく御覧じて、と扇面に夕顔の白い花を眺める心は花の取り持つ縁への懐旧。その思いに浸りつつ舞う序ノ舞は舞の中、大小(総一郎・孝一)前座で右袖被り面使ヒ、被いた保スミから左へ廻りワキ前で袖を下ろすが、宝生流で袖被りの珍らしい。キリは、告げわたる東雲、と大きく雲ノ扇するが、明けぬ先に、の撥ね扇がその雲ノ扇との対照で如何にも火急といった風情が面白く、内に入りて、と作物に入って正二直り、後見が扱う俣を左手に持って半部を下ろしストンと突くと泉水は水鏡に近寄る心で正先へ。面伏せ映す姿に現実からしてコミカルな味が捨て難い。豪快な舞動から天界・地獄までも映す鏡を器用に扱い、先づ地獄道、では強々と踏む六ツ拍子、キリは、大地を飛ばし、拍子強く踏み、返シ句に飛返り、立つて、奈落の底にぞ、と留拍子、大柄な偉丈夫・満次郎の躍動感溢れる力強さが遺憾なく発揮された。因に「泉の下」は冥土、黄泉の謂、春日野の野守の鏡の異名を持つ泉水は地獄に通じるのである。 (1時間11分・6月18日・宝生会)

を与えるなど諧謔味も十分。強かな若い女に初心な年上の男の図式は現在の日常にも。愚直な男を弘之がよい味を出す。(21分) 『野守』山伏ワキ勝久、大峯葛城への途次、春日野で野守を老翁シテ満次郎に逢い、由ありけな泉水にまつわること問答に展開してゆくところ、互いのハキハキとした口跡がリズムカルで心地よい。朝夕、鏡の用をなす泉水が野守の鏡だが、巷説は鬼神の持つ鏡、「夜は鬼となつて」と塚を向き、杖一ツ突き「これなる塚に住みけり」となり」と山伏へアシラヒ送り曰くありけも、御覧せよ、と杖トンと突くと泉水は水鏡に近寄る心で正先へ。面伏せ映す姿に現実からしてコミカルな味が捨て難い。豪快な舞動から天界・地獄までも映す鏡を器用に扱い、先づ地獄道、では強々と踏む六ツ拍子、キリは、大地を飛ばし、拍子強く踏み、返シ句に飛返り、立つて、奈落の底にぞ、と留拍子、大柄な偉丈夫・満次郎の躍動感溢れる力強さが遺憾なく発揮された。因に「泉の下」は冥土、黄泉の謂、春日野の野守の鏡の異名を持つ泉水は地獄に通じるのである。 (1時間11分・6月18日・宝生会)

翁、中入前、地(正直・孝)との掛合に峻拒の姿勢は、水鏡を見給へとて、塚の横、キリリと小廻りから背に怒りすらみせ地一杯に塚入する。春日ノ里人アイ友彦が野守の鏡の謂れ語って去ると後場。諦めぬ山伏、年行の劫を積む法力を執拗に積み折ると、天地を動かし、野守の(鏡は現れたり)、と塚を出る後シテ鬼神・小徳見・唐冠・赤頭・赤地雲立薄文半切・花菱亀甲黒赤段替飛雲二宝輪文厚板の裳着胸姿。『恐ろしや、と山伏、ならば帰らんと、塚へ戻りかける鬼神、瞬時だが鬼神の風体からしてコミカルな味が捨て難い。豪快な舞動から天界・地獄までも映す鏡を器用に扱い、先づ地獄道、では強々と踏む六ツ拍子、キリは、大地を飛ばし、拍子強く踏み、返シ句に飛返り、立つて、奈落の底にぞ、と留拍子、大柄な偉丈夫・満次郎の躍動感溢れる力強さが遺憾なく発揮された。因に「泉の下」は冥土、黄泉の謂、春日野の野守の鏡の異名を持つ泉水は地獄に通じるのである。 (1時間11分・6月18日・宝生会)

③面よりつづき) しむ会・京都観劇協会) 「千手・鄧曲之舞」源頼朝に囚われの平重衡ツレ喜正、襟浅黄・小葵文白摺箔着付・紫指貫に公達気品、掛絡と水晶の数珠に仏門へ帰依の願いを滲ませれば、身柄を預る狩野宗茂ワキ欣哉は惻隱の情を。ツレに同情的な頼朝も雨の中つづれの慰みに千手前シテ喜之を遣わす。 小書で、ツレの心境傷れしを述べるシテの次第・サシ・下歌・上歌を省き、更にツレの出身から囚われに至る道筋、四面楚歌の故事を重ねて憂愁を述べるクリ・サシ・クセ、序ノ舞も省き、イロエをイロエ掛中ノ舞(鄧曲之舞)に替え、雨中の一夕の歎、酒宴の場に焦点を当てる。 囚われの心境しみみく述懐するツレに、シテの来訪を取り次ぐワキ、対面を拒むツレの言をシテに伝えれば頼朝よりの御説とこのこと、重ねてツレに伝えるワキ、ツレ・ワキ問答の口跡の美しさである。対面が叶えばツレ・シテの問答はツレ出家の許し「思ひも寄らず」とのこと。それを知り、虜囚の恥辱、南都焼打ちの罪業を言うツレ、慰めるシテ、の掛合、喜之・喜正父子の息の合ったふくらみのある謡が素晴らしい。見兼ねる心か、盃を持ち出すワキ、それを見てシテは、(御酌に立ち)重衡の御前にこそ参りけれ、と立ってゆき、膝つき酌をする型の良さ。ワキに酒興の香を求められれば、へとりあへず、一首を吟詠、ここで、只今詠給ふ朗詠は、と異口

同音にシテ・ツレ・ワキ三者の連吟が亦佳。シテは込みあげる思いに居たたまれず、十悪といふとも、と居立って立つと左手でシラリや、そのま、一ノ松へ抜け、シラリ解くと直ぐ舞台常座に戻り、悲しみを秘めた中之舞。舞の中、ツマミ扇に左手へ替え、面極く右に傾けツレを見るところ、更に左へ廻り常座からツレを見込み、ツレから面そむけるかに哀傷を奏する笛(六郎兵衛)に、シラリのまま舞い進めるところ、ただならぬシテの恋情である。舞上げ、一樹の蔭や、になり、興に乗じて立つツレはシテと琵琶・琴の連弾(写真)も東の間、キリの別れは袖触れ合ううちに静かに行き違うと、ツレは橋懸へ、ワキも後から従い、シテは常座に見送りシラリ留、哀傷の感一入だった。(56分)

「悪坊」無頼の徒を誘示するかに泥酔して偶々道連れになった僧アド融に執拗に絡む乱暴者シテ友彦、酔い疲れて休むつもりで長刀を立木(目付柱)に立て掛けようとするが二度失敗のていたらく。 「いかう草臥れた」と酔臥のシテを見極めてアドは一ノ松へ逃げ、茶屋・弘之に素性を問えば、街道に悪名高い「六角堂の悪坊」と。「思えば腹の立つこと」と泥酔して前後不覚の悪坊に恐々仕返しをするアドは、己が出立(いでたち)を全て悪坊に移して僧体に仕立て(写真)鬱憤を晴らすかに空威張りの虚勢を張って見せはするが、やはり怖い。「ハッチャア恐もの、先づ急いで帰らう」と走り込む。目覚めたシテは様子の変わったの

「天鼓・弄鼓之舞」シテ志房、ワキ勝久。奇端で授かった鼓を強権で召し上げられた上、息子・天鼓(後シテ)を呂水に沈められた王伯(前シテ)、余人では鳴らない鼓に勅使(ワキ)がたち、王伯が呼び出される前場。 ワキ勝久、名宣から鼓の由来・入手経路・鳴らぬ原因、冒頭、一語一語噛みしめる様な独白がしんみりと、王伯への同情もあり好吟。小書はシテが胸中を吐露する一セイ・サシ・下歌・上歌を省き直ぐシテの呼出。唐帽子姿(写真)である。勅使として参内するが、老いを桶に許し乞うシテのワキとの問答の緊張感もよい。辞退叶わずと知れば繰り返す親子の絆、クセ切時の鼓の現とも思はれぬ身こそ恨みなれ、とシタルのも切ない。促され、老の歩みも足弱く、とワキへアシラフのも最後の哀願、心も危き、と撥を取り「打てば、と退り心耳を澄ます態は、ハッと面を上げるところ、天鼓の心が宿る鼓の音の懐か

「天鼓・弄鼓之舞」シテ志房、ワキ勝久。奇端で授かった鼓を強権で召し上げられた上、息子・天鼓(後シテ)を呂水に沈められた王伯(前シテ)、余人では鳴らない鼓に勅使(ワキ)がたち、王伯が呼び出される前場。 ワキ勝久、名宣から鼓の由来・入手経路・鳴らぬ原因、冒頭、一語一語噛みしめる様な独白がしんみりと、王伯への同情もあり好吟。小書はシテが胸中を吐露する一セイ・サシ・下歌・上歌を省き直ぐシテの呼出。唐帽子姿(写真)である。勅使として参内するが、老いを桶に許し乞うシテのワキとの問答の緊張感もよい。辞退叶わずと知れば繰り返す親子の絆、クセ切時の鼓の現とも思はれぬ身こそ恨みなれ、とシタルのも切ない。促され、老の歩みも足弱く、とワキへアシラフのも最後の哀願、心も危き、と撥を取り「打てば、と退り心耳を澄ます態は、ハッと面を上げるところ、天鼓の心が宿る鼓の音の懐か

「天鼓・弄鼓之舞」市民能楽セミナーを謳う本公演、狂言「蝸牛」に先立ち面と装束の話が「天鼓」のシテを勤める梅田邦久からあり、この舞台

「天鼓・弄鼓之舞」市民能楽セミナーを謳う本公演、狂言「蝸牛」に先立ち面と装束の話が「天鼓」のシテを勤める梅田邦久からあり、この舞台

「天鼓・弄鼓之舞」市民能楽セミナーを謳う本公演、狂言「蝸牛」に先立ち面と装束の話が「天鼓」のシテを勤める梅田邦久からあり、この舞台

「蝸牛」類似の特徴を教えられても未知のもの、殊のほか大ききいも在るにさう心得い」と言われれば人と蝸牛、間違えられもしようか。太郎冠者アド高義に特徴の一角を出すものとされ、山伏シテ小三郎の苦肉の策は、アドに背を向けて反り返り、篠懸の菊織様の房を角に見立てて「それ、それ、それ」と迫り上げて見せるこ

「天鼓・弄鼓之舞」市民能楽セミナーを謳う本公演、狂言「蝸牛」に先立ち面と装束の話が「天鼓」のシテを勤める梅田邦久からあり、この舞台

「天鼓・弄鼓之舞」市民能楽セミナーを謳う本公演、狂言「蝸牛」に先立ち面と装束の話が「天鼓」のシテを勤める梅田邦久からあり、この舞台

「天鼓・弄鼓之舞」市民能楽セミナーを謳う本公演、狂言「蝸牛」に先立ち面と装束の話が「天鼓」のシテを勤める梅田邦久からあり、この舞台

「天鼓・弄鼓之舞」市民能楽セミナーを謳う本公演、狂言「蝸牛」に先立ち面と装束の話が「天鼓」のシテを勤める梅田邦久からあり、この舞台

「天鼓・弄鼓之舞」市民能楽セミナーを謳う本公演、狂言「蝸牛」に先立ち面と装束の話が「天鼓」のシテを勤める梅田邦久からあり、この舞台

「天鼓・弄鼓之舞」市民能楽セミナーを謳う本公演、狂言「蝸牛」に先立ち面と装束の話が「天鼓」のシテを勤める梅田邦久からあり、この舞台

「天鼓・弄鼓之舞」市民能楽セミナーを謳う本公演、狂言「蝸牛」に先立ち面と装束の話が「天鼓」のシテを勤める梅田邦久からあり、この舞台

「蝸牛」類似の特徴を教えられても未知のもの、殊のほか大ききいも在るにさう心得い」と言われれば人と蝸牛、間違えられもしようか。太郎冠者アド高義に特徴の一角を出すものとされ、山伏シテ小三郎の苦肉の策は、アドに背を向けて反り返り、篠懸の菊織様の房を角に見立てて「それ、それ、それ」と迫り上げて見せるこ

「天鼓・弄鼓之舞」市民能楽セミナーを謳う本公演、狂言「蝸牛」に先立ち面と装束の話が「天鼓」のシテを勤める梅田邦久からあり、この舞台

「天鼓・弄鼓之舞」市民能楽セミナーを謳う本公演、狂言「蝸牛」に先立ち面と装束の話が「天鼓」のシテを勤める梅田邦久からあり、この舞台

「天鼓・弄鼓之舞」市民能楽セミナーを謳う本公演、狂言「蝸牛」に先立ち面と装束の話が「天鼓」のシテを勤める梅田邦久からあり、この舞台

「天鼓・弄鼓之舞」市民能楽セミナーを謳う本公演、狂言「蝸牛」に先立ち面と装束の話が「天鼓」のシテを勤める梅田邦久からあり、この舞台

「天鼓・弄鼓之舞」市民能楽セミナーを謳う本公演、狂言「蝸牛」に先立ち面と装束の話が「天鼓」のシテを勤める梅田邦久からあり、この舞台

「天鼓・弄鼓之舞」市民能楽セミナーを謳う本公演、狂言「蝸牛」に先立ち面と装束の話が「天鼓」のシテを勤める梅田邦久からあり、この舞台

「天鼓・弄鼓之舞」市民能楽セミナーを謳う本公演、狂言「蝸牛」に先立ち面と装束の話が「天鼓」のシテを勤める梅田邦久からあり、この舞台



名古屋能楽堂定例公演「蝸牛」左より野村又三郎、松田高義、野村小三郎 (杉浦賢次氏撮影)



名古屋能楽堂定例公演「天鼓・弄鼓之舞」梅田邦久

発行能楽の友社

名古屋千種区千種2丁目18-18 (郵便番号 464-0858) 電話 (052) 731-7984 FAX (052) 733-2837 振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1100円 郵送の場合 1年 1800円 一部 100円

NHK放送予定(平成18年9月~10月)

Table with 2 columns: Date and Program Name. Includes NHK-FM 能楽鑑賞 (毎週日曜日午前7時15分~8時) with programs like 熊坂(宝生流), 砧(親世流), etc.

能楽の友

熱田の社に昭和30年の開館以来、半世紀にわたり名古屋能楽界の中心舞台として広く市民に愛され、親しまれてきた「熱田神宮能楽殿」は諸施設の老朽化にともない、本年10月8日をもって閉館されることとなった。

50年のあゆみ刻んで 熱田神宮能楽殿が閉館

10月23・24日お別れ公演 10月25・26日お別れ能楽大会

演能カレンダー

名古屋能楽堂

(TEL 052-231-0088)

[10月]

Calendar for Nagoya Kanon-do with dates and program names like 名古屋観世九皇会65周年記念別会, 名匠狂言会, etc.

熱田神宮能楽殿

[10月]

Calendar for Atsuta Jingu Kanon-do with dates and program names like 幸謡会能, 熱田神宮能楽殿お別れ公演, etc.

名匠狂言会

10月6日(金) 午後6時30分始 名古屋能楽堂

蚊相撲

大名 野村 萬斎 太郎冠者 石田 幸雄 蚊の精 野村 万作 後見 深田 博治 高野 和憲

月見座頭

座頭 茂山千五郎 上京の男 茂山 正邦 後見 島田 洋海

止動方角

太郎冠者 井上菊次郎 主人 佐藤 友彦 伯父 野村又三郎 馬 井上 靖浩 後見 佐藤 野村小三郎

S席8500円、A席7500円 B席6500円(全席指定) 問い合わせ中日新聞文化事業部 TEL052-201-3766

萬狂言名古屋定例公演

八世野村万蔵三回忌追善 10月7日(土) 午後2時始 名古屋能楽堂

子ほめ

小笠原 匡 野村 扇丞 吉住 講

小舞

野村拳之介 野村虎之介

宗論

野村 万蔵 山下浩一郎

魚説法

野村 万蔵 小笠原 匡

武悪

野村 萬 野村 扇丞 野村 扇丞 ほか高部 恭史

S席9000円、A席7000円、B席5000円 問い合わせ 萬狂言事務局 TEL052-998888

第19回能久田勘鷗の会

10月8日(日) 午後1時開演 名古屋能楽堂

能経正

久田勘吉郎 高安 勝久 河村眞之介 鹿取 希世

狂言 魚説法

井上菊次郎 井上 靖浩 後見 鹿島 俊裕

能 恋重荷

久田三津子 植田隆之亮 河村総一郎 上田 悟 久田舜一郎 藤田六郎兵衛

「入場料」正面八〇〇〇円(前売七〇〇〇円) 一般自由席七〇〇〇円(前売六〇〇〇円) 学生自由席四五〇〇円(前売四〇〇〇円) 市内各プレイガイド

邦謡会創立50周年記念大会

10月9日(祝) 午前9時半始 名古屋能楽堂

「素謡」「神歌」「大原御幸」「能」「楊貴妃」「シテ森 幹子」「素謡」「攝待」「卒塔婆小町」「道成寺」「舞囃子」「善知鳥」「百萬」「頼政」「鸚鵡小町」「実盛」「定家」「砧」「羽衣」「巻絹」、祝言「狸々」ほか独吟、仕舞など10番 主催 邦 謡 会

狂言鳳の会第43回公演

10月21日(土) 午後1時30分始 名古屋能楽堂

解説 名古屋女子大学教授 林 和利

入間川

大名 井上菊次郎 今枝 郁雄 入間の何某 佐藤 融

名取川

名取の何某 佐藤 融 今枝 郁雄 今枝 郁雄 今枝 郁雄

六地藏

都の徒ら者 井上菊次郎 田舎人 井上 靖浩 徒ら者 鹿島 俊裕 今枝 郁雄 今枝 郁雄

熱田神宮能楽殿演能 幸謡会能

10月8日(日) 午後1時半始 熱田神宮能楽殿

初秋の候 皆様には御健勝の御活躍、お慶び申し上げます。昨年に続き本年も幸謡会能には、何卒宜しく多大の御支援御後援を賜りますよう、御願い申し上げます。特に本年十月八日をもって、熱田神宮能楽殿が閉館される事になりました。熱田の社のこの舞台に親しんで参りました私どもにとりまして、誠に心残りでございます。昭和三十一年から平成十八年迄、丁度五十年にあたりまして今年、今日までに長年舞わせて頂いたこの能楽殿の最終最後の日に、舞い納めさせていただきますのも、目に見えない何かの御縁と、深く心に刻むものがございます。熱田神宮能楽殿最終の日をどうぞ御知友御誘い合わせの上、御来殿賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

仕舞 花 籠組

前野 郁子 加藤 春枝

殺生石

泉 嘉夫 大槻 文蔵

野 守 筒

泉 嘉夫 大槻 文蔵

仕舞 野 守 筒

泉 嘉夫 大槻 文蔵

能 砧

近藤 幸江 中村彌三郎 福井四郎兵衛 野村又三郎 寛 敏一 竹市 学

後見 泉 嘉夫

黒田 博 加賀 敏彦 八神 孝充 齊藤 信隆 須部 大槻 文蔵 高橋 瞭一 武富 康之

附祝言

主催 幸 謡 会 近藤 幸江 岡崎市鴨田本町十一一三 TEL(〇五六四)二二二五二九

熱田神宮能楽殿お別れ公演(1日目)

10月23日(月) 11時始(開場10時半) 熱田神宮能楽殿

御挨拶 熱田神宮 小串和夫宮司

能 翁

梅田 邦久 三番叟 鹿島 俊裕 千才 梅田 嘉宏

能 鶴 亀

飯富 雅介 河村総一郎 飯富 雅介 後藤嘉津幸 柳原富司忠 加藤 洋輝 高安 勝久 船戸 昭弘 藤田六郎兵衛

能 末 廣

野村又三郎 野村小三郎 佐藤 融 須部 大志 佐藤 友彦 須部 大志 佐藤 友彦 須部 大志 佐藤 友彦

能 翁

武田 邦久 武田 邦久 武田 邦久 武田 邦久

(1)面よりつづき

独吟 邯鄲	前田 茂徳	三番 後見	井上 靖浩
(金春) 田村キリ	長田 駿	末廣 後見	井上 靖浩
(喜多) 羽衣クセ	百々 康治	加賀 敏彦	久田 勘助
(金剛) 養老	中川 雅章	飯富 雅介	後藤 嘉津幸
(観世) 国栖	武田 邦弘	梅田 嘉夫	竹市 学
舞囃子 七騎落	竹内 澄子	泉 嘉夫	後藤 嘉津幸
(宝生)	河村眞之介	梅田 嘉夫	竹市 学
	福井四郎兵衛	黒山 圭一	須部 邦久
	竹市 学	八神 孝充	黒山 圭一
	石森 智幸	古橋 正邦	黒山 圭一
	加賀山憲治	黒山 圭一	須部 邦久
	津田 節哉	津田 節哉	須部 邦久

※お知らせ 熱田神宮能楽殿お別れ公演の初日(10月23日・月曜日)に限り招待券が必要です。
 ※来場希望の方は、住所・氏名を返信用にも明記され、往復はがきにて左記へ10月5日必着にてお申込み下さい。(はがき1枚につき1名招待)100名様に招待券を送付させていただきます。申込み多数の場合は抽選とさせていただきます。申込み先(〒466-0826)名古屋市中区渡川町1-147、サザンビル8事2の703、柳原方「熱田神宮能楽殿お別れ公演」係り宛へ。

戦後名古屋能楽史 ⑦

〔第十七章〕 竹尾 邦太郎

昭和三十八年(一九六三)

七月六日、第二回名古屋調友会は舞囃子四番「養老」柴田初太郎「邯鄲」内藤泰二「山姥」大塚二「藤戸」大槻秀夫、一調「春日龍神」野崎太郎・山本順之、素囃子「早舞」藤田昭彦・福井啓次郎・吉田定男・鬼頭八郎、一調「管班女」藤田六郎兵衛・田鍋惣一郎・辰巳孝、袴能「百万」山本博之。この日、五月十日以来、福井病院・福井良久(幸清流・福井家十代)院長のもと入院加療中であった田鍋惣一郎が退院後初めて「藤戸」を勤める。

七月十四日、名古屋淡交会は盛夏装束納の期間のことと素囃と仕舞の会。番組は素囃二番「土蜘蛛」中野寛兵衛「松虫」橋岡久

共、仕舞三番「難波」下田雄三「花籠」奥善助「山姥」柴田初太郎、素囃「井筒」観世静夫、仕舞二番「笠之段」観世静夫「玉之段」観世元昭、素囃二番「求塚」観世静夫「道成寺」観世元昭、仕舞三番「生田敦盛」橋岡久共「遊行柳」観世静夫「鉄輪」高橋静夫、素囃「狸々」鬼頭五朗。

八月八日は能の大成者・世阿弥忌。生誕六百年に当り由縁の補藏寺(奈良県磯城郡田原本町味間)で関西能楽懇話会の有志ほかにより法要が営まれる。「観世」誌・昭和三十八年十二月号に記事有。

八月十四日、冷房完備の愛知文化講堂特設舞台で世阿弥生誕六百年記念を謳う第四回大衆普及能がある。番組は舞囃子「加茂」観世喜之、能「田村」河村眞二、仕舞四番「吉野天」有賀滋子「玉之段」辰巳孝「藤戸」宝生九郎「笹之段」柴田初太郎、舞囃子「安宅」和島富太郎、能「羽衣」内藤泰二、狂言「蟹山伏」井上松次郎、仕舞「鶴之段」豊嶋弥左衛門、舞囃子「熊坂」桜間龍馬、能「葵上」大塚二、東西から大家・名手の来演があり、シテ方五流の揃った大能。

九月十五日は観世会定式能第四回、仕舞三番「一手」加藤良久「楊貴妃」有賀滋子「葛城」福井道子、連吟「井筒」芥川秀子、飯

熱田神宮能楽殿お別れ公演(2日目)

10月24日(火) 午後1時半始(開場午後1時)

熱田神宮能楽殿

能 巴 佃 陽子 高安 勝久 河村眞之介 鹿取 希世
 間 井上 靖浩 船戸 昭弘
 後見 竹市 幸司 地謡 田中 春奈 熊谷眞知子
 狂言 鬼瓦 佐藤 友彦 後見 井上菊次郎

附 祝 言 (要招待券)
 主催 能楽協会名古屋支部
 後援 熱田神宮 熱田神宮 熱田神宮 熱田神宮

熱田神宮能楽大会(1日目)

10月25日(水) 午前10時始 熱田神宮能楽殿

(1)来場歓迎

舞囃子 狸々 伊藤 雅子 後藤 嘉津幸 大野 洋輝
 (金剛) 舞囃子 猿々 伊藤 雅子 後藤 嘉津幸 大野 洋輝

連吟 天鼓 田中 英郎 寺田喜久雄 日比野辰巳
 (金剛) 連吟 天鼓 武馬守水雄 織田 順一 阿部 正重
 舞囃子 吉野夫人 佐伯 裕子 坂倉 元子 寺沢ふみ子
 [中日文化センター] 舞囃子 吉野夫人 佐伯 裕子 坂倉 元子 寺沢ふみ子

連吟 千手 三輪 庄司 加藤 有毅 長谷川雅彦
 連吟 松風 朝日 和子 深谷ひろみ 三浦百合子 宇佐見裕子 松井真理子
 連吟 芭蕉 乾 昌博 長谷川 文裕 倉田 一郎 高杉 嘉彦

連吟 雨之段 加藤 華絵 嶋田 彌子 内藤 悦子 石川 晴子 大坪由紀子 片岡なな子 杉浦まより

連吟 大原御幸 シテ田中 米子 桜井 芳子
 連吟 鉢木 ロンギ 井田 秀雄
 連吟 歌占 横井 敬子 兼松 美穂
 連吟 橋弁慶 川島 利雄 子方山口 義一郎 村上総一 進
 連吟 紅葉狩 田中 文江 栗山ちか子 佐藤 久子 牛山 久子 篠田佳代子
 連吟 大江山 安藤 秀博
 連吟 衣 尾関登貴子 シテ平野イツ江 白羽 幸子 荒木美代子 井上八重子
 連吟 鞍馬天狗 河村眞之介 加藤 洋輝 御室 貞子 大野 誠
 連吟 桜川 伊藤 秀子 新城幸友会 小鼓教室(朝) 小鼓教室(夜)
 連吟 菊慈童 河村眞之介 加藤 洋輝 木村 哲男 大野 誠
 連吟 富羅会 (柳原富司忠) 富羅会会員

(2)面へつづく

連吟 雨之段 加藤 華絵 嶋田 彌子 内藤 悦子 石川 晴子 大坪由紀子 片岡なな子 杉浦まより

連吟 大原御幸 シテ田中 米子 桜井 芳子

連吟 鉢木 ロンギ 井田 秀雄

連吟 歌占 横井 敬子 兼松 美穂

連吟 橋弁慶 川島 利雄 子方山口 義一郎 村上総一 進

連吟 紅葉狩 田中 文江 栗山ちか子 佐藤 久子 牛山 久子 篠田佳代子

連吟 大江山 安藤 秀博

連吟 衣 尾関登貴子 シテ平野イツ江 白羽 幸子 荒木美代子 井上八重子

連吟 鞍馬天狗 河村眞之介 加藤 洋輝 御室 貞子 大野 誠

連吟 桜川 伊藤 秀子 新城幸友会 小鼓教室(朝) 小鼓教室(夜)

連吟 菊慈童 河村眞之介 加藤 洋輝 木村 哲男 大野 誠

連吟 富羅会 (柳原富司忠) 富羅会会員



御洒落名匠狂言会「佐渡狐」
左より野村万蔵、野村萬



「宗論」左より佐藤友彦、佐藤融
(杉浦賢次氏撮影)

なヨク、の早
足で幕へ急ぐ
姑、老巧千之丞
に練達あきら、
糊性も清新な童
司、三代で勤め
る千之丞家の息
の合った好舞
台。科白が無い
時の千之丞の旨
さが光る。(31
分)

【閻罪人】 祇
園祭の山車の出
し物を巡り当屋
（祭の神事宿）の
主（アド清造）よりも張り切る太郎
冠者（シテ菊次郎）、講中（立衆）を
前に腹案を発表する主に厚かまし
く事々に口を挟み異論を唱えられ
ば、主は講中の手前きつても言え
ず「総じて汝は物に差し出で困
る」と苛々が募るばかり。更に、
講中の面々も当屋を立てずにしや
しゃり出る太郎冠者の案を採用す
るに至っては、多数決の弊か、当
屋の立場、ひいては主の面目も丸
潰れで忿懣する方なく仏頂面とい
いどころ。太郎冠者の案はといえ
ば、鬼が罪人を地獄へ責め落とす
というもの。籤で配役が決まるとあ
って誰かジョーカー（ばば・罪人）
を引くかか興味を惹きつけ、姑
を引くかか興味の焦点。籤順決め
てからでなく、いきなりというこ
ろが味噌、太郎冠者が先に鬼の
役を引き当てれば、最後に残った
一つがジョーカーで、鬱々と成り
行きを見守っていた主の許へ。言
わずと知れる後の展開、責めには
おっかなびっくりの中に潜水本気
も。資質陽性のシテ・アド親子、
深刻にならないところが大勢物の
トメ狂言のよさか。(46分・7月
9日・第7回御洒落名匠狂言会)



名古屋観世会「粘・梓之出」観世清和、観世芳宏



「粘・梓之出」
観世鏡之丞



「呂連」井上菊次郎、井上靖浩
(杉浦賢次氏撮影)

小書で、真如之月や出でぬら
ん、とイロエ（二ノ松）へ抜け、
両手で頭を取って月を見上げる
と、大小（真之介・富司忠）笛、
太鼓（義命）の流シで舞台へ戻
る。地獄の群衆を救はんため
に、の四ツ拍子、奈落に沈み果
てて、の豪快な組落シ、罪人が成
仏するの、此の経の力ならず
や、と居立ってキツとワキを見込
む気色、きびくと力強い舞台だ
った。(56分・7月16日・名古屋
観世会25世観世左近17回忌追善
能)

（③面よりつづき）
能第六回・金剛能楽堂）
「佐渡狐」 シテ佐渡ノ百姓・
万蔵、アド越後ノ百姓・扇丞、小
アド奏者・萬。佐渡に狐の有無を
問われ、愛郷心から「在る」と答
えるシテに、ならば「賭け縁にせ
う」とアド。シテは行き掛かり
上、進退極まって奏者を買収しに
掛かる。苟も役人、沽券に關ると
ばかり賄賂を「持ってゆけと云ふ
に」と満面朱を跳き押し返す奏
者。押し問答も想定内のこのよ
うに素知らぬ顔であらぬ方を眺
め、扇で袖を隠すや、シテは問髪
を入らず賄賂を袖の中へ（写真）
贈賄賂が巧く成立したことが殊更
に賤しくみえないのも、変な言い
掛かりを付けるアドが寧ろ非で、
奏者にはシテの窮地救う大義名分
があると思わせるどころ、偏にシ
テ萬の資質に苦劫。なおシテが逆
転される狐の啼き声のこと、破れ
かぶれに「月曜日（ひ）と啼くわ
い」、に「それは驚ぢや」と応ず
るアド、ホーホケキョと聞き馴れ
んでいれば驚はさうなのだらう。
東天紅（トウテンコ）なら鶏、と
合点出来るが。(30分)

【宗論】 佐藤秀雄（一九二一
一九八四）二十三回忌追善に息シ
テ浄土僧・友彦、孫アド法華僧・
融が勤める。宿屋は弘之。
アド法華僧、道中、似合わしい
連れとみて声を掛けたのが運の尽
き、機先を制され素姓明かせば相
手は俄に軽侮の素振り、こちらも
身許を問えば豈図らんや犬猿の仲
のシテ浄土僧。一旦、疎ましく思
えば頑ななアド、口実を設け一刻
も早く逃げたいのだが、そうはさ
せじと言質を楯に執拗に纏わり付
くシテ。人身攻撃に及んで反論す
るアドも結局は圧倒されて宿屋に
逃げ込むが、合部屋を余儀無くさ
れて顔突き合わせることに。
此処で粘つくく重苦しい苛めの構
図は、ようやく法問を説く宗旨論
争へ展開、お互い軽やかなジャブ
（論議）の応酬は、息を吹き返すア
ドの元気にシテは根負けして「非
学者論理に負けるとはおのれのこ
とぢや」の捨て科白、寝てしま
う。当代、世情一般、父子争論の
ことどもも思われてシテ（父）アド
（子）熱演。キリは互いが負けじと
主張（名号と題目）を競う裡に（写
真）相手の経を唱えることに。見
合わず顔と顔、極まり悪いが和み
の笑みに良い追善の実（じつ）、ガ
ツシ留め。(44分)

【濯ぎ川】 劇作家・飯沢匡（一
九〇九―一九九四）の作・演出で
一九五二年二月十九日、文学座ア
ドリエ公演で上演。舞・内田稔、
女房・植木信子、姑・野村朋
子、翌年、武智鉄二（一九一三
―一九八八）の演出に依り狂言化
されて祇園歌舞練場で初演（七五
三・千之丞・千五郎）。以後、
度々上演されて現在は太蔵流名寄
の舞女狂言の内神文（うちしんも
ん・内々神に響って稽古を受ける
段階）に在籍。
次から次へ女房・童司と姑・千
之丞に仕事を言い付けられる養子
舞あきら、覚えきれない、と書き
上げて貰い、その外はしないとい

う事を取り付け確約させると、山
のような洗濯物から女房の小袖を
流してしまふ。書き上げに無い想
定外のこととしてそれを無視する
舞は、拾いに川へ入り流される女
房に頓着せず、為て遣つたりと
手を束ねて眺めるだけ。慌てふた
めき「助けてくれさしめ」と哀願
する姑に書き上げを楯に、此処ぞ
とその一々を読み上げて該当する
項目を確めに掛かるなど、焦らせ
てこれ迄の鬱憤を晴らす舞だが、
下手に出る姑に掛かると、舞は、
の杖を差し伸べ女房を助け上げれ
ば、その杖を引つたつて振りか
ざし、浴せる痛罵。見兼ねて中に
入る姑の姿も女房の目に入らばこ
そ、舞を追い立てる杖に倒され
る。両袖の汚れを手で払うと、落
ちている書き上げを拾って読み、
二度引き裂き、丸めてポイと捨
て、右腰を摩りながら杖がないた
めつんのめる様
なヨク、の早
足で幕へ急ぐ
姑、老巧千之丞
に練達あきら、
糊性も清新な童
司、三代で勤め
る千之丞家の息
の合った好舞
台。科白が無い
時の千之丞の旨
さが光る。(31
分)

【閻罪人】 祇
園祭の山車の出
し物を巡り当屋
（祭の神事宿）の
主（アド清造）よりも張り切る太郎
冠者（シテ菊次郎）、講中（立衆）を
前に腹案を発表する主に厚かまし
く事々に口を挟み異論を唱えられ
ば、主は講中の手前きつても言え
ず「総じて汝は物に差し出で困
る」と苛々が募るばかり。更に、
講中の面々も当屋を立てずにしや
しゃり出る太郎冠者の案を採用す
るに至っては、多数決の弊か、当
屋の立場、ひいては主の面目も丸
潰れで忿懣する方なく仏頂面とい
いどころ。太郎冠者の案はといえ
ば、鬼が罪人を地獄へ責め落とす
というもの。籤で配役が決まるとあ
って誰かジョーカー（ばば・罪人）
を引くかか興味を惹きつけ、姑
を引くかか興味の焦点。籤順決め
てからでなく、いきなりというこ
ろが味噌、太郎冠者が先に鬼の
役を引き当てれば、最後に残った
一つがジョーカーで、鬱々と成り
行きを見守っていた主の許へ。言
わずと知れる後の展開、責めには
おっかなびっくりの中に潜水本気
も。資質陽性のシテ・アド親子、
深刻にならないところが大勢物の
トメ狂言のよさか。(46分・7月
9日・第7回御洒落名匠狂言会)

【粘・梓之出】 在東京は三年の
昔屋某（ウキ閑）、暮に帰国の由を
夕霧（侍女ツレ芳宏）に托せば、待
ち侘びる妻（シテ清和）に愚痴ら
れ、更に、粘の音が思いを届ける
という唐の故事を聞かされ、それ
を学（まね）ばされる。立場もあり
絶えず受身のツレにへなに都住居
を心の外とや、などと当たるシ
テ、閻怨の苛立ちも直截にシテと
ツレ、兄弟の共演に間然するとこ
ろがない。粘之段で
は、怨みの粘、と粘
（作物）をぐつと見据
えるところ、唐の故
事との彼我を比べる
かに恨めしい思い端
的にみせる。風の運
ぶ秋思は、月の色風
の気色、夜嵐に、悲
しみの声虫の音、シ
テはシヨルと再び粘
の前へ、ツレに向き
合ひ下居すると、ほ
ろくはらはらと、
と（写真、奏える力
に構う音は自然に融
けこみ、何れ粘の
音やらん、とがっくり肩を落す
態。そこへ今年の暮も帰りが無い
の伝言に、へ（さては真に）変り果
て、と安座及シヨリに臨終を迎え
る心。眼目の粘之段は地謡（九郎
右衛門・清司・邦久）の名調と
相俟ち哀感一入。
後場、妻の死を悼むワキ、梓
（ワ、弦を鳴らし霊を呼び寄せる
具）に懸けると出端（六郎兵衛・源
次郎・総一郎・治）で後シテ亡
霊、面泥眼・襟白・露芝文白摺
箔着付・浅黄大口・白綾垂折、杖
をつき千鳥掛で三ノ松へ、胸杖に
梓を聞き、一ノ松で謡い出す。舞
台へ入っては邪淫の業を責められ
るところ細かくみせ、更にワキへ
の怨み辛みを吐露、へ君いかなれ
ば旅枕、では扇振り上げんばかり
にワキへ迫り、夢ともせめて、と
膝をつきワキを見据えると、へ思
ひ知らずや、と扇で強く床を一つ

【鷓鴣・真如之月】 甲斐国石和
川、松明を振り立て老鶴使（シテ
鏡之丞）、小書でシテのサシ・下
歌・上歌が省かれ、鷓鴣を休ませよ
うと直ぐ「いつもの如く御堂に上
がり」となり、其処に旅僧（ワキ
勝久・従僧ワキツレ雅介）を認め
（写真）シテ・ワキ問答になる。ワ
キに殺生を戒められ、ば、生業ゆ
え今更、と抗弁するシテに、ワキ
ツレは此のシテが二・三年まえ接
待に与つた鶴使と気付く。その鶴
使は死んだと知らされると、ワキ
が理由を問ひ、その時の有様をシ
テは正中居語に語る。禁漁区で捕
まり、他の見せしめに養巻にさ
れ、へ叫べど声が出でばこそ（は
鐵之丞のどを痛めていたか、悲痛
を実感）、と。そして、他ならぬ
私が「その鶴使の亡者にて候」と
ワキにアシラへば、問答にワキは
養巻の因となった鷓鴣の再現を求
め、跡申うこと「心得申し候」と
約束、シテは正へ直シ、頃至つて
「いざ業力の鷓鴣を使はん」と気力
充実、キツと松明に目を遣り掴む
や、湿る松明、とすつくと立ち、
小書で鷓鴣之段は橋懸で舞う。もは
や老鶴使に非ず、習い覚えた手練
の技はきびくと、へこの川波に
ばつと放せば、と荒鷓を放つ扇扱
いの手捌きの鮮やか。篝火に照ら
される川底を鷓鴣が、逃げ惑うへ魚
を追ひ廻し、へ書き上げ、などす
るところの鷓鴣の活躍を松明騎シ面
使とじて眺める写真も素晴らしい。
この鷓鴣の働きを見、何もかも
へ忘れ果てて面白や、と二ノ松、

開いた俣の扇で膝を打つ上機嫌
も、篝火が魚燈の役を果せない
へ月になりぬる悲しさ、と扇と松
明をほとりと手放すや退つて双シ
ヲリ、そのま、地（芳宏・邦弘・
勘助ら）の裡に三ノ松へ、へ閻路
に帰る、と詰めてワキを見込む
と、へ名残惜しさを、と一足退い
て地を残し中入、笛（学）のくさ
りが一際寂寥を深め余情。小書で
アヒの居語は無く、ワキの待語か
らシテが早装束で出るところを、
待語の前に前場の状況を敷衍する
次の様なワキ語があるのが珍し
い。「只今の老人の殺生禁断の」
戒を破り養巻にされて「浮かみも
やらず仮に現はれ、我が跡申ひて
賜ひ給へとて、業力」の鷓鴣を使う
様を罪滅ぼしに見せ「失せて候。
余りに不憫に候程に有難き経文を
以て彼の鷓鴣の」跡をば懸に申ひ
申し候べし、「方々も力を添えて
賜り候へ」とあり（鍵括弧の外は
メモしきれず想像）、ワキツレ
「心得候」の返事でワキ・ワキツ
レ共に立ち待語になる。川の石を
拾ひ一つに経一字を写し、それを
沈めて申えはへなどかは浮かまざ
るべき、で後シテ閻魔大王が半幕
で姿を現わし、幕内で拍子二ツ踏
み三ノ松へ。一旦、幕へ退き一ノ
松へ走り出ると、へそれ地獄速き
にあらず、と謡い出し、へ無間の
底に、と強々と拍子一ツ、へ法華
の御法の、と舞台へ入ってくる。
面小癡見・黒頭・唐冠・厚板着付
・半切の装束姿。前シテ老鶴使
が在世の折、ワキツレ従僧を撰持
した功德で、殺生戒を犯した老鶴
使を極楽へ送ることワキに伝え、
法華経の徳を讃える閻魔大王であ
る。

えば頑ななアド、口実を設け一刻
も早く逃げたいのだが、そうはさ
せじと言質を楯に執拗に纏わり付
くシテ。人身攻撃に及んで反論す
るアドも結局は圧倒されて宿屋に
逃げ込むが、合部屋を余儀無くさ
れて顔突き合わせることに。
此処で粘つくく重苦しい苛めの構
図は、ようやく法問を説く宗旨論
争へ展開、お互い軽やかなジャブ
（論議）の応酬は、息を吹き返すア
ドの元気にシテは根負けして「非
学者論理に負けるとはおのれのこ
とぢや」の捨て科白、寝てしま
う。当代、世情一般、父子争論の
ことどもも思われてシテ（父）アド
（子）熱演。キリは互いが負けじと
主張（名号と題目）を競う裡に（写
真）相手の経を唱えることに。見
合わず顔と顔、極まり悪いが和み
の笑みに良い追善の実（じつ）、ガ
ツシ留め。(44分)

【濯ぎ川】 劇作家・飯沢匡（一
九〇九―一九九四）の作・演出で
一九五二年二月十九日、文学座ア
ドリエ公演で上演。舞・内田稔、
女房・植木信子、姑・野村朋
子、翌年、武智鉄二（一九一三
―一九八八）の演出に依り狂言化
されて祇園歌舞練場で初演（七五
三・千之丞・千五郎）。以後、
度々上演されて現在は太蔵流名寄
の舞女狂言の内神文（うちしんも
ん・内々神に響って稽古を受ける
段階）に在籍。
次から次へ女房・童司と姑・千
之丞に仕事を言い付けられる養子
舞あきら、覚えきれない、と書き
上げて貰い、その外はしないとい

う事を取り付け確約させると、山
のような洗濯物から女房の小袖を
流してしまふ。書き上げに無い想
定外のこととしてそれを無視する
舞は、拾いに川へ入り流される女
房に頓着せず、為て遣つたりと
手を束ねて眺めるだけ。慌てふた
めき「助けてくれさしめ」と哀願
する姑に書き上げを楯に、此処ぞ
とその一々を読み上げて該当する
項目を確めに掛かるなど、焦らせ
てこれ迄の鬱憤を晴らす舞だが、
下手に出る姑に掛かると、舞は、
の杖を差し伸べ女房を助け上げれ
ば、その杖を引つたつて振りか
ざし、浴せる痛罵。見兼ねて中に
入る姑の姿も女房の目に入らばこ
そ、舞を追い立てる杖に倒され
る。両袖の汚れを手で払うと、落
ちている書き上げを拾って読み、
二度引き裂き、丸めてポイと捨
て、右腰を摩りながら杖がないた
めつんのめる様
なヨク、の早
足で幕へ急ぐ
姑、老巧千之丞
に練達あきら、
糊性も清新な童
司、三代で勤め
る千之丞家の息
の合った好舞
台。科白が無い
時の千之丞の旨
さが光る。(31
分)

【濯ぎ川】 劇作家・飯沢匡（一
九〇九―一九九四）の作・演出で
一九五二年二月十九日、文学座ア
ドリエ公演で上演。舞・内田稔、
女房・植木信子、姑・野村朋
子、翌年、武智鉄二（一九一三
―一九八八）の演出に依り狂言化
されて祇園歌舞練場で初演（七五
三・千之丞・千五郎）。以後、
度々上演されて現在は太蔵流名寄
の舞女狂言の内神文（うちしんも
ん・内々神に響って稽古を受ける
段階）に在籍。
次から次へ女房・童司と姑・千
之丞に仕事を言い付けられる養子
舞あきら、覚えきれない、と書き
上げて貰い、その外はしないとい

【濯ぎ川】 劇作家・飯沢匡（一
九〇九―一九九四）の作・演出で
一九五二年二月十九日、文学座ア
ドリエ公演で上演。舞・内田稔、
女房・植木信子、姑・野村朋
子、翌年、武智鉄二（一九一三
―一九八八）の演出に依り狂言化
されて祇園歌舞練場で初演（七五
三・千之丞・千五郎）。以後、
度々上演されて現在は太蔵流名寄
の舞女狂言の内神文（うちしんも
ん・内々神に響って稽古を受ける
段階）に在籍。
次から次へ女房・童司と姑・千
之丞に仕事を言い付けられる養子
舞あきら、覚えきれない、と書き
上げて貰い、その外はしないとい

【濯ぎ川】 劇作家・飯沢匡（一
九〇九―一九九四）の作・演出で
一九五二年二月十九日、文学座ア
ドリエ公演で上演。舞・内田稔、
女房・植木信子、姑・野村朋
子、翌年、武智鉄二（一九一三
―一九八八）の演出に依り狂言化
されて祇園歌舞練場で初演（七五
三・千之丞・千五郎）。以後、
度々上演されて現在は太蔵流名寄
の舞女狂言の内神文（うちしんも
ん・内々神に響って稽古を受ける
段階）に在籍。
次から次へ女房・童司と姑・千
之丞に仕事を言い付けられる養子
舞あきら、覚えきれない、と書き
上げて貰い、その外はしないとい

【濯ぎ川】 劇作家・飯沢匡（一
九〇九―一九九四）の作・演出で
一九五二年二月十九日、文学座ア
ドリエ公演で上演。舞・内田稔、
女房・植木信子、姑・野村朋
子、翌年、武智鉄二（一九一三
―一九八八）の演出に依り狂言化
されて祇園歌舞練場で初演（七五
三・千之丞・千五郎）。以後、
度々上演されて現在は太蔵流名寄
の舞女狂言の内神文（うちしんも
ん・内々神に響って稽古を受ける
段階）に在籍。
次から次へ女房・童司と姑・千
之丞に仕事を言い付けられる養子
舞あきら、覚えきれない、と書き
上げて貰い、その外はしないとい

【濯ぎ川】 劇作家・飯沢匡（一
九〇九―一九九四）の作・演出で
一九五二年二月十九日、文学座ア
ドリエ公演で上演。舞・内田稔、
女房・植木信子、姑・野村朋
子、翌年、武智鉄二（一九一三
―一九八八）の演出に依り狂言化
されて祇園歌舞練場で初演（七五
三・千之丞・千五郎）。以後、
度々上演されて現在は太蔵流名寄
の舞女狂言の内神文（うちしんも
ん・内々神に響って稽古を受ける
段階）に在籍。
次から次へ女房・童司と姑・千
之丞に仕事を言い付けられる養子
舞あきら、覚えきれない、と書き
上げて貰い、その外はしないとい



「濯ぎ川」左より茂山千之丞、童司、あきら



「閻罪人」シテ井上菊次郎、アド井上靖浩
(杉浦賢次氏撮影)

ろがない。粘之段で
は、怨みの粘、と粘
（作物）をぐつと見据
えるところ、唐の故
事との彼我を比べる
かに恨めしい思い端
的にみせる。風の運
ぶ秋思は、月の色風
の気色、夜嵐に、悲
しみの声虫の音、シ
テはシヨルと再び粘
の前へ、ツレに向き
合ひ下居すると、ほ
ろくはらはらと、
と（写真、奏える力
に構う音は自然に融
けこみ、何れ粘の
音やらん、とがっくり肩を落す
態。そこへ今年の暮も帰りが無い
の伝言に、へ（さては真に）変り果
て、と安座及シヨリに臨終を迎え
る心。眼目の粘之段は地謡（九郎
右衛門・清司・邦久）の名調と
相俟ち哀感一入。
後場、妻の死を悼むワキ、梓
（ワ、弦を鳴らし霊を呼び寄せる
具）に懸けると出端（六郎兵衛・源
次郎・総一郎・治）で後シテ亡
霊、面泥眼・襟白・露芝文白摺
箔着付・浅黄大口・白綾垂折、杖
をつき千鳥掛で三ノ松へ、胸杖に
梓を聞き、一ノ松で謡い出す。舞
台へ入っては邪淫の業を責められ
るところ細かくみせ、更にワキへ
の怨み辛みを吐露、へ君いかなれ
ば旅枕、では扇振り上げんばかり
にワキへ迫り、夢ともせめて、と
膝をつきワキを見据えると、へ思
ひ知らずや、と扇で強く床を一つ

【粘・梓之出】 在東京は三年の
昔屋某（ウキ閑）、暮に帰国の由を
夕霧（侍女ツレ芳宏）に托せば、待
ち侘びる妻（シテ清和）に愚痴ら
れ、更に、粘の音が思いを届ける
という唐の故事を聞かされ、それ
を学（まね）ばされる。立場もあり
絶えず受身のツレにへなに都住居
を心の外とや、などと当たるシ
テ、閻怨の苛立ちも直截にシテと
ツレ、兄弟の共演に間然するとこ
ろがない。粘之段で
は、怨みの粘、と粘
（作物）をぐつと見据
えるところ、唐の故
事との彼我を比べる
かに恨めしい思い端
的にみせる。風の運
ぶ秋思は、月の色風
の気色、夜嵐に、悲
しみの声虫の音、シ
テはシヨルと再び粘
の前へ、ツレに向き
合ひ下居すると、ほ
ろくはらはらと、
と（写真、奏える力
に構う音は自然に融
けこみ、何れ粘の
音やらん、とがっくり肩を落す
態。そこへ今年の暮も帰りが無い
の伝言に、へ（さては真に）変り果
て、と安座及シヨリに臨終を迎え
る心。眼目の粘之段は地謡（九郎
右衛門・清司・邦久）の名調と
相俟ち哀感一入。
後場、妻の死を悼むワキ、梓
（ワ、弦を鳴らし霊を呼び寄せる
具）に懸けると出端（六郎兵衛・源
次郎・総一郎・治）で後シテ亡
霊、面泥眼・襟白・露芝文白摺
箔着付・浅黄大口・白綾垂折、杖
をつき千鳥掛で三ノ松へ、胸杖に
梓を聞き、一ノ松で謡い出す。舞
台へ入っては邪淫の業を責められ
るところ細かくみせ、更にワキへ
の怨み辛みを吐露、へ君いかなれ
ば旅枕、では扇振り上げんばかり
にワキへ迫り、夢ともせめて、と
膝をつきワキを見据えると、へ思
ひ知らずや、と扇で強く床を一つ

【粘・梓之出】 在東京は三年の
昔屋某（ウキ閑）、暮に帰国の由を
夕霧（侍女ツレ芳宏）に托せば、待
ち侘びる妻（シテ清和）に愚痴ら
れ、更に、粘の音が思いを届ける
という唐の故事を聞かされ、それ
を学（まね）ばされる。立場もあり
絶えず受身のツレにへなに都住居
を心の外とや、などと当たるシ
テ、閻怨の苛立ちも直截にシテと
ツレ、兄弟の共演に間然するとこ
ろがない。粘之段で
は、怨みの粘、と粘
（作物）をぐつと見据
えるところ、唐の故
事との彼我を比べる
かに恨めしい思い端
的にみせる。風の運
ぶ秋思は、月の色風
の気色、夜嵐に、悲
しみの声虫の音、シ
テはシヨルと再び粘
の前へ、ツレに向き
合ひ下居すると、ほ
ろくはらはらと、
と（写真、奏える力
に構う音は自然に融
けこみ、何れ粘の
音やらん、とがっくり肩を落す
態。そこへ今年の暮も帰りが無い
の伝言に、へ（さては真に）変り果
て、と安座及シヨリに臨終を迎え
る心。眼目の粘之段は地謡（九郎
右衛門・清司・邦久）の名調と
相俟ち哀感一入。
後場、妻の死を悼むワキ、梓
（ワ、弦を鳴らし霊を呼び寄せる
具）に懸けると出端（六郎兵衛・源
次郎・総一郎・治）で後シテ亡
霊、面泥眼・襟白・露芝文白摺
箔着付・浅黄大口・白綾垂折、杖
をつき千鳥掛で三ノ松へ、胸杖に
梓を聞き、一ノ松で謡い出す。舞
台へ入っては邪淫の業を責められ
るところ細かくみせ、更にワキへ
の怨み辛みを吐露、へ君いかなれ
ば旅枕、では扇振り上げんばかり
にワキへ迫り、夢ともせめて、と
膝をつきワキを見据えると、へ思
ひ知らずや、と扇で強く床を一つ

【粘・梓之出】 在東京は三年の
昔屋某（ウキ閑）、暮に帰国の由を
夕霧（侍女ツレ芳宏）に托せば、待
ち侘びる妻（シテ清和）に愚痴ら
れ、更に、粘の音が思いを届ける
という唐の故事を聞かされ、それ
を学（まね）ばされる。立場もあり
絶えず受身のツレにへなに都住居
を心の外とや、などと当たるシ
テ、閻怨の苛立ちも直截にシテと
ツレ、兄弟の共演に間然するとこ
ろがない。粘之段で
は、怨みの粘、と粘
（作物）をぐつと見据
えるところ、唐の故
事との彼我を比べる
かに恨めしい思い端
的にみせる。風の運
ぶ秋思は、月の色風
の気色、夜嵐に、悲
しみの声虫の音、シ
テはシヨルと再び粘
の前へ、ツレに向き
合ひ下居すると、ほ
ろくはらはらと、
と（写真、奏える力
に構う音は自然に融
けこみ、何れ粘の
音やらん、とがっくり肩を落す
態。そこへ今年の暮も帰りが無い
の伝言に、へ（さては真に）変り果
て、と安座及シヨリに臨終を迎え
る心。眼目の粘之段は地謡（九郎
右衛門・清司・邦久）の名調と
相俟ち哀感一入。
後場、妻の死を悼むワキ、梓
（ワ、弦を鳴らし霊を呼び寄せる
具）に懸けると出端（六郎兵衛・源
次郎・総一郎・治）で後シテ亡
霊、面泥眼・襟白・露芝文白摺
箔着付・浅黄大口・白綾垂折、杖
をつき千鳥掛で三ノ松へ、胸杖に
梓を聞き、一ノ松で謡い出す。舞
台へ入っては邪淫の業を責められ
るところ細かくみせ、更にワキへ
の怨み辛みを吐露、へ君いかなれ
ば旅枕、では扇振り上げんばかり
にワキへ迫り、夢ともせめて、と
膝をつきワキを見据えると、へ思
ひ知らずや、と扇で強く床を一つ

〔1面よりつづき〕

狂言 水掛 智 別 男 茂山 宗彦
女房 茂山 千之丞
後見 佐々木 千吉

附祝言 主催 茂山 狂言会
お問合せ 京都市上京区中筋通石薬師上ル
TEL 075・221・8371

〔有料〕
S席 8,000円、A席 5,000円
B席 3,000円、学生 2,000円
チケットは事務局 075・221・8371
チケットぴあ 0570・02・9966
Pコード対応 名古屋 371・340

第27回 名古屋金春会「能」

11月5日(日)午後1時30分始
名古屋能楽堂

狂言 兼平 佐藤 俊之
仕舞 花 筐 金春 安明
春日龍神 山井 綱雄

三井寺 高杉 勝久 元 寛 敏一
相元 正樹 福井 四郎兵衛
間 鹿島 俊裕

狂言 栗焼 太郎 友彦 主人 大野 弘之
後見 鹿島 俊裕

仕舞 玉野 宮 高橋 汎
本田 布由樹

狂言 望月 飯富 雅介
河村 総一郎 加藤 洋輝
後藤 嘉津幸 藤田 六郎兵衛
間 井上 靖浩

〔入場料〕
五〇〇〇円 (正面指定席)
四〇〇〇円 (中正面自由席、脇正面自由席)
三〇〇〇円 (学生自由席)
お申込・お問合わせ
名古屋金春会事務局
名古屋市中区松風町2-15-12
TEL 052・842・7931 (フシハラ)
FAX 052・842・7932 (フシハラ)

第五回 つばみ会

11月11日(土) 10時始
名古屋能楽堂

狂言 藤 源氏 供養 加藤 美穂
仕舞 田村 衣斐 愛 水室 鬼頭 京子
頼政 金見 晶子 蟬丸 浅岡 恵子
岩船 林 香代子 山姥 畑中 さやか

素謡 高砂 フレ 小林 光由 前田 育宏 藤原 敏達
ワキ 星野 猛 中島 雅利 竹内 淳一
門脇 達祐 竹内 良伯

狂言 高砂 フレ 小林 光由 前田 育宏 藤原 敏達
ワキ 星野 猛 中島 雅利 竹内 淳一
門脇 達祐 竹内 良伯

狂言 高砂 フレ 小林 光由 前田 育宏 藤原 敏達
ワキ 星野 猛 中島 雅利 竹内 淳一
門脇 達祐 竹内 良伯

狂言 高砂 フレ 小林 光由 前田 育宏 藤原 敏達
ワキ 星野 猛 中島 雅利 竹内 淳一
門脇 達祐 竹内 良伯

狂言 高砂 フレ 小林 光由 前田 育宏 藤原 敏達
ワキ 星野 猛 中島 雅利 竹内 淳一
門脇 達祐 竹内 良伯

狂言 高砂 フレ 小林 光由 前田 育宏 藤原 敏達
ワキ 星野 猛 中島 雅利 竹内 淳一
門脇 達祐 竹内 良伯

狂言 高砂 フレ 小林 光由 前田 育宏 藤原 敏達
ワキ 星野 猛 中島 雅利 竹内 淳一
門脇 達祐 竹内 良伯

狂言 高砂 フレ 小林 光由 前田 育宏 藤原 敏達
ワキ 星野 猛 中島 雅利 竹内 淳一
門脇 達祐 竹内 良伯

狂言 高砂 フレ 小林 光由 前田 育宏 藤原 敏達
ワキ 星野 猛 中島 雅利 竹内 淳一
門脇 達祐 竹内 良伯

舞踊子 龍田 酒井 美由貴 (終了 十七時頃)

附祝言 主催 つばみ会
〔御来聴歓迎〕
名古屋市中区御器所2-13-22 TEL 20202

名古屋観世会定式能

11月12日(日) 12時半開演
名古屋能楽堂

狂言 江口 高安 勝久 元 河村 総一郎 鹿取 希世
梅田 邦久 杉江 正樹 後藤 孝一郎

狂言 隠狸 シテ 井上 靖浩 アド 井上 菊次郎
後見 佐藤 友彦

狂言 龍田 松山 幸親 八神 孝充 武田 大志
松風 関根 祥人 地謡 加賀 敏彦 古橋 正邦
昭君 上田 貴弘 地謡 高橋 敏一 藤田 邦弘

安達原 飯富 雅介 河村 真之介 加藤 洋輝
橋本 幸 後藤 嘉津幸 藤田 六郎兵衛
間 鹿島 俊裕

狂言 末広かり 果報者 野村 万作
太郎冠者 野村 又三郎
すっぱ 井上 菊次郎

狂言 釣狐 白藏主 狐野村 萬斎
彌助 高野 和憲

狂言 高砂 八段之舞 笛 竹市 学
小鼓 後藤 嘉津幸
大鼓 河村 真之介
太鼓 加藤 洋輝

11月18日(土) 午後2時始
名古屋能楽堂

〔要会員券〕
当日券 1万円(2枚綴)
電話 052・841・4632
FAX 052・841・4632

〔御来聴歓迎〕
名古屋三越プレイガイド

TEL 03・3997・8778
FAX 03・3997・8262
東京都練馬区高野台5-125-15

豊田市能楽堂特別公演

11月18日(土) 午後2時始
豊田市能楽堂

狂言 空腕 シテ 山本 東次郎 アド 山本 則直
野村 四郎 宝生 閑 柿原 崇志 助川 治
前 曾和 正博 藤田 六郎兵衛

狂言 野宮 飯富 雅介 河村 真之介 藤田 六郎兵衛
松田 高義 福井 四郎兵衛

狂言 伯母ヶ酒 勇野村 小三郎 伯母 野村 又三郎
後見 伴野 俊彦

狂言 弱法師 高安 勝久 元 寛 敏一
野村 又三郎 後藤 孝一郎 竹市 学

狂言 景清 シテ 門脇 千鶴
山姥 シテ 吉田 富喜子

狂言 天鼓 ハンシキ 赤尾 正
ほか舞踊子、連吟、仕舞十数番

主催 郁野 郁子会

名古屋宝生会定式能(第50期)

11月19日(日) 午後1時始
名古屋能楽堂

狂言 野宮 飯富 雅介 河村 真之介 藤田 六郎兵衛
松田 高義 福井 四郎兵衛

狂言 伯母ヶ酒 勇野村 小三郎 伯母 野村 又三郎
後見 伴野 俊彦

狂言 弱法師 高安 勝久 元 寛 敏一
野村 又三郎 後藤 孝一郎 竹市 学

狂言 景清 シテ 門脇 千鶴
山姥 シテ 吉田 富喜子

狂言 天鼓 ハンシキ 赤尾 正
ほか舞踊子、連吟、仕舞十数番

主催 郁野 郁子会

郁調会大会

11月23日(木) 勤労感謝の日 午前10時始
名古屋能楽堂

狂言 景清 シテ 門脇 千鶴
山姥 シテ 吉田 富喜子

狂言 天鼓 ハンシキ 赤尾 正
ほか舞踊子、連吟、仕舞十数番

主催 郁野 郁子会

戦後名古屋能楽史 (80)

〔第十七章〕 昭和三十八年 (一九六三)

竹尾 邦太郎

「承前」 当日、表紙共に二十四頁の立派なパンフレットが出たが、狂言八番に見合う八名の寄稿者(今井欣三郎・飯沢匡・北岸佑吉・小山弘志・小林貞・丸岡大二・平岩弓枝・古川久)の中から「狂言ブームの実体」と題する飯沢匡、「花子について」の平岩弓枝、の文を紹介する。

私が一九五七年、パリに行った時、例年の国際演劇祭にはじめて日本が参加して能・狂言が出た。サラ・ベルナル座は大して大きい小部屋ではないが、熱心な人々によって満員になり、たかきくって切符を早く買わなかった私は、ついに舞台のそばにイスを置いてもらって見物した。

能のほうは、各氏の奮闘にもかかわらず、好評とはいかぬ結果であったが、狂言は圧倒的に支持された。

これは当然で、能は相当の予備知識という経験がともなわれないと鑑賞は困難だ。私の知人のフランス人は「あれをほめるやつはス

ノブだ。どこにもスノブはいらぬ」と耳の痛いことをいっていた。

狂言の本質は笑いである。これを否定する学者もいるが、もちろん、それは例外のことだ。しかも、その笑いは世界共通の人間の弱点に基礎を置いているのであるから、直接的に理解される。海をへだてた紅毛人にもわかるのだから、現代の日本人にわからぬはずはない。それなのに案外に狂言は無視されてきた。最近狂言ブームというほどに社会の関心を集めたが、本当の勝負はこれからであろう。(裸大名の作者)

花子という曲、大曲ときいていゝ。そのせいか一年のうち何回も上演されていないようだ。私もまだ数回しか観る機会を持っていない。

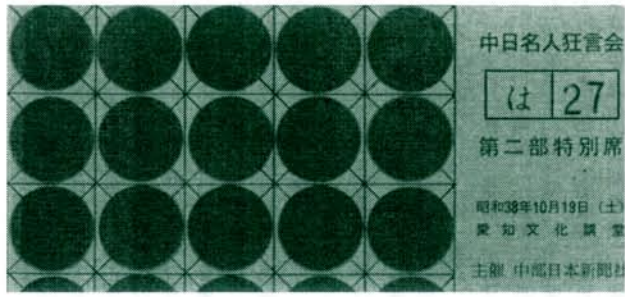
同じ狂言の大曲の中でも、私は「釣狐」などはあまり好みではないのだが、「花子」は文句なしに好きである。

ことに主人公の某が夜明けに花子のもとから帰って来る後半の橋がかりの出からは、演者が良いと艶麗なきぬぎぬの恋のムードが観るものを完全に包み込んでしまふ。

それと、このシテの技量一つで、ついに登場しない花子という佳人が、どんな面(おも)さしの、どんな性格の、どんな姿態の女性であるかが、観客のまぶたの中にくっきりと浮かび上がらせてくれるのだ。これは凄いことだと、私はいつも感嘆させられている。

この曲の作者、おそらく、快心の微笑をもって、この曲を「花子」と名づけたに違いない。

それにしても、女房が怖いほど、あぶない恋の火遊びは惹かれるもの、女のやきもちと男の浮わ気、仲に立つのは損な役と、人情の機微はいつになっても変わりばえがしないらしい。(作家)



なお、前号で春の「中日五流能」に対して秋の「中日名人狂言会」と記したが、秋に至った経緯はパンフレット九頁、野村万蔵の次の談話に詳しい。

野村万蔵(談) 中日名人狂言会は、はじめの企画では今春催される予定でしたが、私達の渡米の話が出たので秋に延ばされたのでした。私も息子達も無論秋までには帰国して、みんなで出勤できると思ってお引き受けたのです。ところが引いてみると、すっかり先方の意にかたが、私達の教べんをとっているところはシャトルのワシントン大学内にある東洋芸術研究所でしたが、その所長のロチャース氏から、引き続きもう半年程度居てもらいたいと頼まれたのですが、こゝの中日名人狂言会は日本で一番立派な狂言会であり全狂言師が出演することになっていて、説明して即座にお断りして、万作だけを残して私と悟郎と万作の嫁とを連れて帰ってきたような次第であります。それでこの狂言会を済ませて再び一月六日にこゝでは万之丞をつれて渡米します。

前後するが九月十五日、元能楽協会理事長・芸術院会員の橋岡久太郎(一八八四—一九六三)死去、享年八十歳。「狂言」紙のコラム「狂言人語」は「今年例年

云うに朝暮肌寒さを感じる今日此頃、秋風と共に橋岡久太郎先生の訃報を聞ききました。諸行無常、謹んで殊更名古屋と縁の深かった先生に哀悼の意を表わしますと共にそぞろ秋の淋しさをひしひし感じます」と弔意を寄せる。「観世」誌は十月号で計を知らせ、十一月号では追悼特集を組み、榎本芳枝編による年譜を掲載、故人の足跡を辿る。弔辞は観世元正宗家・灘尾弘吉文部大臣・高橋誠一郎日本芸術院長・喜多実能楽協会理事長・前田熊太郎淡交会総代、追悼文は八名が寄せているが、内の半数が能楽研究者・評論家というのも異色でなからうか。次に当地にあって故人と昵懇であった能楽協会名古屋支部長・幸清流小鼓方・田鍋惣太郎の追悼文を引用する。

「橋岡久太郎師を偲びて」 橋岡師と私は、地方楽師で舞台上では、一番水いおなじみと思えます。

明治三十五・六年、私上京、牛込矢来町の幸清次郎先生宅へ毎日通いました傍ら、大曲の観世宗家舞台(宗家清康師)にて研究会毎週能・囃子あり、其頃橋岡師、先代喜之師は宗家内弟子の時代。一・二年後大榎師上京され内弟子研究演奏中よく清康先生舞台へお出になり、藤戸や井筒等よくお舞い頂きました。又皆へ色々御注意伺いました。

久太郎・喜之師は小鼓を幸清次郎先生に稽古され、流儀小鼓立派にお打ちでした。三人で芸のお話よく致しましたものです。両師の御子息(当代)も皆流儀小鼓お立派です。

「ね」を发声することです。へ重なりて、都に、の「都」のハリに ついては、「て」の次に「エ」を发声しない無声の息でうかせて「都(ミヤ・ツ)コ」と发声すると「ミ」の音から自然にハリとなります。この方法をしないと、「ヤ」の音からハリとなります(これが多いように思います)。このことは、橋岡久太郎師が私によく云われていたことです。

また田鍋惣太郎は自著「小鼓芸話」「故人の思い出」の中で橋岡久太郎・観世喜之(初世、一八八五—一九四〇)と並べて次のように言う。「橋岡師の謡の面白さ、独特な間の魅力と云う人がありますが、同氏でも、二つ下の喜之(先代)氏でも、幸清次郎先生に鼓のお稽古を充分されて、お二人とも、幸清流の鼓を立派にお打ちになれた、その基礎から発するものでありましょう。開口についても野口(兼資)氏同様やかましかったようです。殊に橋岡師は、素人のお弟子の前でも口をワーワーと大きく開いて、両手をあげて押したり引いたりアウンの呼吸を指導してみえました。したがって、そのお弟子がたは、宗教的なまでに傾倒して皆さんウワツ、ウワツと独特の发声をされていきましたね」と。

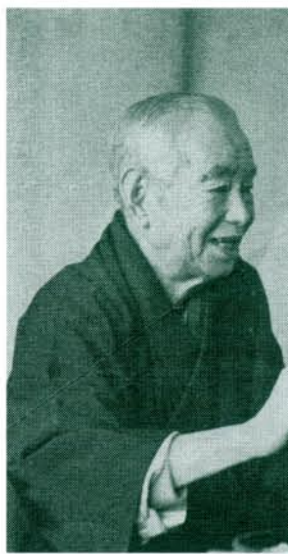
更に柴田初太郎(一八八九—一九八七)は私家版「婦童閑談」(昭和五十二年刊)の中で言う。「融」の十三段之舞は、早舞を十三段(五段・替五段・三段)で舞うものです。私は「融」の能を二・三回演じました。橋岡久太郎師は十三段之舞の場合、くつろいで楽屋に入り、一服されていまして、謡い出しは、上歯の裏に舌をつけてから息を呑み込んで「イ」を发声し、「ウ」は口を閉じるだけで发声します。「ベ」は「メ」(息を呑み込んで「ベ」と发声すれば「メ」となります)。「を」は「ウオ」と发声する。へ重ね、の「カ」と「サ」を息を呑み込んで切り、「カア」と「ア」の生字を出さないこと。「サ」は「サン」と「ン」を直ぐつけて「サン」で直ぐ口を閉すだけで「サン」となります)、つぎの

「融」の能は余り演じられませんが、橋岡久太郎師がお好きでして先生のおすすめで、私は一度演じました。

橋岡久太郎師に「紅葉狩」の稽古をつけていただいたことがありますが、次第のへしぐれを急ぐ紅葉狩が、「しぐれではな」と云われ、この一句だけに半年かかりました。

橋岡久太郎が名古屋で最初にシテを勤めたのは、記録に拠ると大正二年(一九一三)四月二十七日、呉服町能楽倶楽部舞台での観世流宗家継承披露能で十九歳。当日の番組は「翁」観世清久、「嵐山・白頭」橋岡久太郎、「弱法師」木下敬賢、「熊野・村雨留」観世清久、「道成寺」片山九郎三郎、半能「岩船」柴田邦彦、他に二調二番、狂言三番「三本柱」伊勢門水「無布施経」井上菊次郎「靱猿」野村又三郎、の大能である。シテ二番を勤めた新宗家清久は十六

「ね」を发声することです。へ重なりて、都に、の「都」のハリに ついては、「て」の次に「エ」を发声しない無声の息でうかせて「都(ミヤ・ツ)コ」と发声すると「ミ」の音から自然にハリとなります。この方法をしないと、「ヤ」の音からハリとなります(これが多いように思います)。このことは、橋岡久太郎師が私によく云われていたことです。



昭和41年刊、今井欣三郎・丸岡大二・榎本芳枝の編集による私家版『橋岡久太郎偲ぶ草』より転載

秋の清謡会(第29回)

十一月二十五日(土) 九時半始 名古屋能楽堂

Table listing performers and roles for the 'Autumn Clear Song Meeting' (秋の清謡会). Roles include 西王母, 羽衣, 蝉丸, 紅葉狩, 紅葉狩, 頼政, 松風, 玉鬘, 葛城, 求塚, 女郎花, 小督, 山姥, 仕舞, 鶺鴒, and 附祝言. Performers listed include 清沢一政, 須部 甫, 本多 和子, 川瀬 弘道, 保谷 毅, 神谷 謙一, 近藤富士雄, 紅葉狩, 川瀬 弘道, 本多 和子, 手嶋なみ江, 金井 邦夫, 高見かね子, 山内 志げ, 奥村 小浪, 不破 峰子, 石川 華子, 青木眞佐子, 堀尾 智子, 八根 敬子, 小島 恵子, 小林美和子, 河村総一郎, 福井四郎兵衛, 加藤 洋輝, 加藤 希世, 河村総一郎, 福井四郎兵衛, 加藤 洋輝, 加藤 希世, 小林美和子, 河村総一郎, 福井四郎兵衛, 加藤 洋輝, 加藤 希世, 河村総一郎, 福井四郎兵衛, 加藤 洋輝, 加藤 希世, 河村総一郎, 福井四郎兵衛, 加藤 洋輝, 加藤 希世.

「能の翻訳を考える」

12月15日～17日3日間 法政大学国際日本学研究会

野上記念法政大学能楽研究所、法政大学国際日本学研究センター、法政大学国際日本学研究所は、「能の翻訳を考える」文化の翻訳はいかにして可能か」をテーマに、12月15日（金）、16日（土）、17日（日）の3日間、法政大学市ヶ谷キャンパス・ボアソナードタワー126階スカイルホールでフォーラムを開催する。

この企画は、文部科学省21世紀COEプログラム採択「日本発信の国際日本学の構築」の計画の一環として行われる法政大学国際日本学研究会集である。

プログラムの概要は次の通り。

▽12月15日（金）
報告 大学院ゼミ「謡曲の英訳を読む」の報告 法政大学教授山中玲子氏
ワークショップ（千手） 法政大学教授ステイヴン・ネルソン

▽12月16日（土）
（田村） 法政大学教授ジョン・プロウカリング氏
▽12月16日（土）
研究報告「謡曲翻訳の歴史」 明治大学教授マイケル・ワトソン氏、講演・討議 「能翻訳を考える」 オーストラリア国立大学名誉教授ロイヤル・タイラー氏。
研究報告「フェノロサ・パウンド・小西基一」 翻訳における創造的誤解」 法政大学専任講師竹内晶子氏。
シンポジウム（1） 謡曲の翻訳をめぐる一 司会・山中玲子氏
▽12月17日（日）
研究発表（法政大学大学院生）
「和解の過程」(弱法師)と「リ秦王」における二組の父子を中心「なつかし」様々（井筒）（野宮）を中心として



熱田神宮能楽殿お別れ公演（10月23～24日）
①観世流能「翁」シテ梅田邦久
②愛好者による「お別れ大会」の素謡上演
(杉浦賢次氏撮影)

さようなら熱田能楽殿 能楽協会、愛好者で 4日間惜別の上演

昭和三十年に開館してから約五十年にわたり中部能楽界の中心となる能舞台として広く愛されてきた「熱田神宮能楽殿」は既報のように諸施設の老朽化にともない、今秋十月八日をもって閉館した。

この閉館にあたって、能楽協有名古屋支部と熱田神宮では、長年にわたって親しまれてきた熱田神宮能楽殿の最後に別れを惜しんで、10月24日、25日の2日間、協会支部の能楽師により「お別れ公演」を挙げる。能楽関係、神宮関係者、愛好者を招き、2日間にわたって開催。能「翁」、狂言「末廣」はじめ、能、舞囃子、仕舞、独吟など上演。

さらに、続いて10月25、26日の2日間、一般愛好者が出演して「お別れ大会」を催し、熱田神宮能楽殿に対する思い出とともに、能楽殿の閉館に惜別した。一般愛好者のお別れ能楽大会には、犬山城敬道能楽会、中日文化センター1、邦謡会、千早会、壺泉会、朝日カルチャーセンター、藤樹会、みどり野会、幸謡会、幸友会、富羅会、和謡会、郁謡会、恵謡会、楽謡会、奏会、橋北公民館謡曲教室、玉兔会、久田親正会、三交會、呉竹会、伝統文化こども能楽教室など各グループが出演した。

能「三輪」上演（12月23日） 五色の会第8回公演

「遊女の恋としての（班女）研究報告」ヨーロッパにおける能翻訳」トリア大学教授スタンカ・シヨルツ氏
シンポジウム（2） 能楽論の翻訳をめぐる一
「能楽論の翻訳をめぐる一」所感二つ・三つ」法政大学名誉教授文章氏、
「世阿弥の英語」プリンストン大学教授トム・ヘヤー氏ほか。
無料・参加自由
連絡先 東京都千代田区富士見2-17-1、法政大学能楽研究所
事務室 TEL 03-32664-9815、FAX 03-32664-9607

岡崎
金剛流・花朋会歌舞台・朋の会では、「五色の会」第八回公演を観る」をきたる十二月二十三日（土）祝花朋会歌舞台（岡崎市大西町奥長入47-4、電話0564-58762）で開催する。

演能は次のとおり。午後二時開演。

仕舞「実盛」宇高通成
狂言「伯母ケ酒」甥・野村小三郎、伯母・松田高義、後見・真下智行
能「三輪」シテ波多良良子、ワキ高安勝久

名古屋能楽堂定例公演12月公演

十二月三日（日）午前十時半始

能 蟬
泉 嘉夫
丸 飯富 雅介
後見 河村総一郎
久野 郁子
勘 松田 淳
高義 淳
八神 博
梅田 孝充
武田 邦弘
嘉宏 和久
和谷 英毅
長田 幸
加藤 領一

仕舞（喜多流） 清 経 長田 郷
舞囃子 紅葉狩 熊谷真知子
河村真之介
柳原富司忠
大野 誠
鈴村 昌美
加藤 敬
伊藤 雅子
羽多野 良子

仕舞（金春流） 天 鼓 鬼頭 尚久
地謡 佐久間祥夫
前田 芳樹
小島 樹

能 百
子方 坂口 侑
愛 侑
萬 杉江 元
福井四郎兵衛
鬼頭 義命
鹿取 希世

仕舞（観世流） 難 波 加藤 春枝
八神 孝充
地謡 高橋 瞭
久田 勘
幸親 博

神戸新春能

1月13日 神戸文化ホール
新春をかざる伝統芸能の定例公演「神戸新春能」は、2007年1月13日（土）神戸文化ホール、中ホールで催される。

午後一時開演。全席指定・一階席六千円、二階席五千円。
番組は次のとおり。
舞囃子「二人静」森壽子 佐伯紀久子
能「俊寛」シテ観世清和
狂言「棒縛」太郎冠者・茂山忠三郎、次郎冠者・善竹忠重
仕舞「高砂」勇海楽人、「屋島」笠田隆、「梅」吉井順一、「王髻」山村啓雄、「善知鳥」橋保向「山姥」下川宜長
能「殺生石」シテ久田勘
チケットはPコード3721765、Lコード56538

豊田市能楽堂 主催「新春能」

1月14日 能「二人静」
豊田市能楽堂では、新春1月14日（日）豊田市能楽堂で「新春能」を開催する。午後2時開演。

狂言（和泉流）「棒縛」シテ太郎冠者・三宅右近、アド主人・高沢祐介、アド次郎冠者・三宅右近
能（観世流）「二人静」シテ梅若万三郎、ツレ梅若紀長、ワキ森常好、アイ三宅近成
入場料／全席指定正面席六〇〇〇円、脇・中正面席四〇〇〇円
申込み／豊田市能楽堂（0565-358200）、チケットぴあ（0570-029999）

能の「作り物」を作るセミナー 名古屋能楽堂

能楽堂では、「能の「作り物」を作ってみませんか」と新しい企画で能への興味と関心をより高めようと「名古屋能楽堂・能「学」ワークショップ」として呼びかけている。

能の「作り物」は、竹を結び合わせ、布を巻く、ただそれだけで現物を象徴してしまう究極まで削ぎ落とされた舞台道具、本物の「作り物」をつくるワークショップセミナーである。

【日程】1月13日（土）（第1回）午前10時～12時、（第2回）午後2時～午後4時
1月14日（日）（第3回）午前10時～12時、（第4回）午後2時～午後4時
【内容】「半部」の半部屋、「楊貴妃」の小宮（午前）、「草子洗小町」の文台などを作る。

講師 今沢美和氏（観世流シテ方）
受講料 六百元（各回）
定員 各回10回
応募方法 はがきに住所、氏名、電話、希望の回（2つまで）を記入の上、名古屋能楽堂（名古屋市中区三の丸1-1-1）作り物係宛
電話 052-231-0008
FAX 052-231-875
6（申込みはFAXでもよい）
なお、参加者の中から抽選で1名に「半部」の半部屋を贈る。

歳末助け合い能は
定例公演に組入れ
能楽協会名古屋支部主催で行われてきた「歳末助け合い義援能」は、今年から名古屋能楽堂定例公演（12月3日公演）の一環として組入れて催されることになった。

中日文化センター 開講40周年記念能楽発表会

十二月九日（土）午前十時始
名古屋能楽堂
0120-53-8164

（要整理券・無料）
問合せ 中日文化センター

能 石

赤 武田 大志
白 古橋 正邦
橋 橋本 幸
河村真之介
加藤 洋輝
船戸昭弘
大野 誠
外山 圭一
須部 勲
清沢 敏彦
松山 幸親
高橋 瞭一

後見 梅田 嘉宏
武田 邦弘
地謡 須部 勲
清沢 敏彦
松山 幸親
高橋 瞭一

主 後見 今枝 郁雄
次郎冠者 井上 靖浩
主 人 井上 靖浩

【入場料】
前売三〇〇〇円（当日四〇〇〇円）
学生前売二〇〇〇円（当日二五〇〇円）
前売券取扱 名古屋能楽堂（052-231-0088）
市内各プレイガイド、チケットぴあ
ナイアパーク8階プレイガイド

戦後名古屋能楽史 ⑧

第十七章 竹尾 邦太郎

昭和二十八年 (一九六三)

十月十九日、中日名人狂言会が愛知文化講堂で行われる一方、熱田神社能楽殿では梅猶会の素謡別会、連吟二番「駒之段」飯田賢

「安達原」真柄米次、仕舞六番「盛久」河村鉦二「笹之段」佐藤太俊「小袖曾我」久田秀雄・塚本秀雄「松風」杉村竹翠「班女」加藤丈太郎「小鍛冶」殿島修二、素謡「清経」梅若盛義、仕舞二番「玉鬘」井戸良造「松虫」柴田初太郎、素謡「井筒」梅若三郎、仕舞三番「善知鳥」観世鏡之丞「玉之段」梅若三郎「殺生石」梅若猶義、素謡二番「藤戸」観世鏡之丞、別会の名に相応しく連吟二、仕舞十一、素謡四番の計十七番。

十月二十日は名古屋淡交会の中による故橋岡久太郎先生芸術院会員就任記念能。名目からして違和感を覚えるが、此の年の二月一日に芸術院へ推挙されて在任僅か七ヶ月半の九月十五日に死去、予て記念能は準備されていたのが急遽「故」をつけたもの、その間の事情は葬儀当日、霊前に捧げた淡交会総代・前田熊太郎の次の弔辞に詳しい。

嗚呼、敬慕いたして居ります先生、とうとうその御声を聞く事が出来なくなりました。今の今迄私共は、近く名古屋それに引続き大阪に催します先生芸術院会員御就任祝賀会の出陣も出来上り、一日と押迫その日を心おのきなながら練習に追はれ、ただ先生をお迎えしているもの温容お顔を拝したとき一念の折柄この計報に接し、社中一同は茫然として虚脱いたし失望と悲歎に沈む許りで御座います。

受け継がれ、先生の偉大なる功績は永久に残り燦然と輝き後世の燈台となり、又これを一層高揚するのが吾々の義務であり芸の向上進歩であります。

先生御安心下さい。一同は一層奮励努力いたします。希くは天上より御加護あらん事を謹んで御霊前に御祈り申し上げます。(観世) 昭和二十八年十一月より転載)

番組は舞囃子九、仕舞九、能四、独吟二、一調二、狂言一の計二十七番。能四番の中で前田熊太郎が「熊野・村雨留・膝行」を、ツレ橋岡久共、ワキ岡次郎右衛門、囃子を寺井三九丸・森重朗・渡部晴義、地頭観世元昭、後見奥善助・下田雄三で勤めている。なお観世元昭の挨拶があり、番外仕舞二番は「老松」橋岡久共「岩船」観世元昭。

十月二十六日は梅田邦久が主宰する名古屋謡曲仕舞教室の主催で鑑賞講座の第一回能楽教室。舞囃子「高砂」柴田初太郎、仕舞二番「紅葉狩」橋岡久「狸々」実川紀、連吟「羽衣」尾関健太郎、能「隅田川」片山博太郎、仕舞二番「屋島」柴田初太郎、「藤戸」片山慶太郎、狂言「附子」佐藤卯三郎、能「船弁慶」梅田邦久。

十月二十七日は秋の恒例の名匠鑑賞能で第四十五回。番組は能「景清・小返」観世喜之、狂言「千鳥」和泉保之、仕舞「笠之段」松岡龍馬、「花笠・笠之伝」梅若六郎、仕舞二番「松風」鈴木一雄「善知鳥」大江又三郎、能「狸々乱・双之舞」本田秀男・金春信高、脇に福王茂十郎、大鼓に下村英一の来演。「花笠・笠之伝」を下村英一と勤めた田鍋惣太

公演。弥勒会は大坂の囃子方四拍子の赤井藤男・大倉長十郎・山本孝・三島元太郎が結成した会で名古屋初演。番組は素謡「藤戸」生一泰知、仕舞四番「清経」杉村竹翠「柏崎」岡田光敏「天鼓」殿島修二「山姥」久田秀雄、独吟「鶴之段」鬼頭五朗、舞囃子「船弁慶」泉康強、能「井筒・物着」大槻文蔵、仕舞四番「屋島」梅若修一「巻扇」梅若善高「女郎花」泉嘉夫、「春日龍神」柴田初太郎、一調「龍太鼓」田鍋惣太郎・高安滋郎(謡)、狂言「佐渡狐」茂山七五三・茂山孝夫・木村正雄、仕舞二番「砦」大槻秀夫「実盛」梅若猶義、能「融・思立之出」十三段之舞「梅若盛義・囃子は弥勒会の四人、井筒・物着」の囃子方を除き三役も関西勢、味な催しである。

十二月十五日、泉嘉夫の主宰する壺泉会十周年記念大会、番外に仕舞二番「笹之段」林喜右衛門「玉之段」大槻秀夫、能「葵上・梓之出」泉嘉夫、があり此のあと青陽会による市内の中学・高校の鑑賞能もあるが実質的にはこれが能楽殿この年の納会。

秋の舞台から

第二十二回衣斐正宜後援会能と「名古屋能楽堂定例公演・初秋能第一部」青陽会

竹尾邦太郎

観世を除く四流に「藤栄」あるが、こゝ一世紀の間に宝生流で二度の上演をみるだけの稀曲。その一は昭和四十二年の名古屋宝生会定式能、シテ先々代宗家九郎・ワキ高安滋郎、そして三十九年ぶりの今回は近藤乾之助と野口敦弘。物語の展開は「鉢木」、芸尽しの処は「自然居士」に似る。

旅僧に姿を襲して下情視察の最明寺入道ワキ敦弘、怪しい塩屋の主ワキツレ塚弘に宿を乞い、訳有り気な少年(子方・阪口貴仁)に氣付き、素性を質せば叔父・藤栄シテ乾之助の跡を取られた先の地頭の遺児・月若と知り、所領の譲渡書を証に掛け合う事を約束するワキツレとの問答に、身分隠すといえ自ずから現われるゆつたりした風格のワキ。シテが太刀持アヒ融を伴い浦遊びに出ると分かり、

加藤総兵衛・太田重次郎「菊慈童」塚本秀雄、能「善知鳥」観世太加志、がある。師走に入つて一日、能楽協会名古屋支部・楽師会・乱能。舞囃子二番「屋島」寛三男「小袖曾我」佐藤秀雄、狂言「痺」増田一雄・六車真三、舞囃子二番「羽衣」河村鉦二、「山姥」助川龍夫、能「鷲」田鍋惣太郎、舞囃子「藤戸」鬼頭八郎、狂言「鳴子」西村欽也・福井啓次郎、舞囃子「安宅」寛三男、狂言「釣針」戸田秀雄・内藤泰二、能「船弁慶」鬼頭季信、鬼頭喜太郎、大槻文蔵・大槻秀夫・辰巳孝が来演。

十二月八日は名古屋宝生会定式能第七期第四回納会。素謡「山姥」辰巳孝、仕舞二番「加茂」馬場富夫「江口」倉本雅、能「女郎花」野口禄久、狂言「縄ない」井上松次郎、能「紅葉狩」内藤泰二。

能「絵馬」の斎宮

12月5日から特別展

斎宮歴史博物館では、「第10回伝統芸能サミット・齋(いつき)」の公演(①面所報)に関連して、12月5日から24日まで、斎宮歴史博物館で能「絵馬」の装束、面、作り物などの関係資料、写真パネルを展示する。観覧料無料(常設展示は要入場料)。斎宮は近鉄斎宮駅より徒歩15分。



名古屋和泉会第3回公演



レは切戸へ退き、代つてワキが扇で面隠して脇座にひっそり座着く。ケセ切(龍頭頭首)と申すも(この御代より起れり)、で立つ力は傘を両手に持ち、へまた君のお傘を龍頭頭首に持たせて我らもお供申さんと、舞台へ出ると、ワキに呼び止められ、傘を脇に置くと問答になる。シテに更に舞うよう伝えよ、と命じる不遜な態度のワキに気色ばむ能力、その様子も聞く態に「ノ松に佇立のシテは、些事に拘泥らぬ器量を示すように、では八揆を聞かそう、の返事。シテが反発するの期待を裏切られ、ワキの「急いで打てと言へ」とまでの暴言に切歯扼腕の能力は、もとより己れの主・鳴尾ではないシテの策を知る由もなく、「なう腹立や腹立や」と幕へ駆け込む。

（3）面よりつづき）
面を隠す扇を掴み捨てるまで、彼奴が憎みの激情に駆られる心象の鮮烈な描写力が素晴らしい。ワキの正体が分り恐ろしい。ワキは曲直を明らかにワキはシテにも慈悲を垂れて度量をみせ大団円である。

謹直厳格なワキ、機微濃やかな感情表現に舞づくしも堅固に美しいシテ、直情径行陽性のアヒ能力、それと力演で直人物の好舞台は大勢物の出入りの遅滞も無くきれいだっただ。〔1時間13分〕

「瘦松」

少なきを言う隠語。瘦松は山賊の獲物

ホクソ頭巾・大髭の山賊シテ靖浩、里帰りの女アヒ俊裕を長刀で脅し、身の回りの物を詰めた袋を強奪する。気丈な女も刃物には勝てず二ノ松へ逃れ「許して下され」と懇願するも如何にも口惜しげ。されば一ノ松まで近付き、袋の中味に氣を奪われて居る山賊の様子を窺うと、「いや仕様が」と一ノ松に戻り、「なうく嬉しや、これさへ取ればよい」と態勢を立て直す。形勢逆転、嵩に掛かって強請り出す女は山賊に輪を掛けた強欲ぶりを發揮、小刀を奪われ山賊が柄で無く鞘の方を握って差し出すのも象徴的。

キリも身ぐるみ剥がされ「許してくれい」と逃げる山賊を、女は「やるまいぞ」と追い込む。明けつ広げて憎めない山賊と勘定高い女、特徴がよく表現される。（18分）

「隅田川」

シテ狂女・正宜、面曲見・襟浅

黄・芒文白擦着付・無紅秋草文縫箔腰巻・淡萌黄水衣・男笠、篋を持ち重い感じに一ノ松へ運ぶ。さぞや長旅の疲労あろうかと思わせるが、佇む姿は両肩聳やかす様な、嫌に力が入っている様な、蟻こ張った印象で、いわゆる肩を落したというようには見えない。誘拐された子を尋ねるカケリの狂鳴が鎮まり、この世の身の不運を沁々吐露、千里隔たるも親は子を忘れないと聞くものを、とシテル処、地（乾之助・輝和ら）の哀調と相俟ち切ない。渡し場でのワキ船頭・能弘との問答・掛合は都鳥

に託す思い。我も亦いざ言問はん、と左手笠にやり、目付柱先へ遠く眺め、問へども問へども、と持籠大きく二ツ打ち下ろして苛立ちをみせ、一ノ松へ抜けては思へば限りなく遠くも、と面を薄くクモラせて一つとき感慨に耽る風情をみせる。と、そうはして居られずとばかりさりとては、と一氣に戻つて「こぞりて狭くとも、とワキに詰める勢いは、笠を後ろへ投げ捨て、持籠一ツ打ち迫るのも瀬戸際の必死。笠は後見が引いてしまいが、船中、シテの膝元が淋しくはなろうか。ワキの語は慎んだもの、諄々と語つてシテの胸中に滲み入るか、シテは身じろぎもせず「吉田の何某」で面や、クモルだけ、「遂に終つて候」で初めてシテの語が却って哀しみの深さを増す。大方は察したのであろう我が子のこと、ワキとの問答に事実を一つ々確認しつつつ努めて冷静でありたい気持ちも遂に堪えきれず、「これは夢かも、と安座双シテも悲痛。傷みや、とワキは介添えてシテを船から下ろして墓所へ案内すると、スミから塚を見込むシテ。クドキに我を忘れ、我が子は「この下に在るらめや、とワキに肉薄して肩を掴みか、らんばかりの激情をみせ、「この世の姿を、ではワキに縋りつく思い、詰めて二・三歩退ると安座に「母に見せさせ給へや、と双シテ。

念仏の段は、ワキ・シテ掛合に、「母の巾ひ給はんこそ」とワキ手ずから鉦鼓をシテの首に掛けると、我が子の為なら「この身も鬼鐘を取り上げて、と漸うシテの孫（坂口信四郎）とい、後見の愛と共に三代で勤める舞台となる。十二歳の梅若丸を四歳が演じる訳だが其処が能の象徴性、小さいほど悲劇的情趣が増し哀れも一入である。

キリは、「我が子と見えしは、と塚の前へ進み、塚の上の、と天辺を右手で左から右へ、左手で右から左へ、愛おしげに撫でさすると「浅茅が原となるこそ、と面クモラセたまま正直シ、二足退くと右膝をつき安座となつて双

「俊寛」

シテ祖父江修一、ワキ雅介が齋齋救免

状を受け取ると、康頼ツレ一政を促してさあ読めと手渡す無造作な態度。康頼はと云えば、押し戴いて有難く読み始めるが、そこに鬼界鳥でのシテの立場わかつたというものである。救免状に我が名が無いを知り、「さては筆者の誤りか、とワキに挑みか、らんばかりに居立つシテの驚愕は悲嘆に変わり、「こは如何に、と狷介な人にあるまじきシテに人間的な弱さをみせ、心情吐露するクドキからクセ、未だ諦め切れない一縷の望みは上ゲ端あと、繰り返し、また巻き返し救免状を見詰め、「こは夢か、と居立ち絶望の心に右ウケて立つと「夢ならば覚めよ、と救免状を投げ捨て（写真すると、今度は成経ツレ敏彦が勿体ないとかかり拾いに立つなど、三者の心理の機微よく現われ、修一力量十二分に發揮すれば、僧体のワキ雅介に存在感。（1時間2分）

「酢薑」

和泉の酢薑シテ高義は担げる竿に竹筒

を、棋津の薑売・又三郎は苞を下げる。二人が出会う街道、薑売の



初秋能「俊寛」祖父江修一（杉浦賢次氏撮影）

「安達原」

シテ嘉宏、面は深井に非ずや

は深井に非ずや、シテの若さに加齢するの意図があるろうか、唐織（か）



狂言「酢薑」野村又三郎、松田高義



「安達原」梅田嘉宏（杉浦賢次氏撮影）

「俊寛」

シテ俊寛・敏彦、鬼界鳥に勧請した熊

野三社に参詣のツレ康頼・甫・成経・孝充の帰途を、一酒と云うが杉桶の水を携え、出迎えて掛合になると、たまたま演能の当日はまさに「時は重陽、所は山路、谷水の、と彭祖七百歳の長寿を得た謂れの菊の酒の故事、そこに事寄せる狷介なシテの皮肉も、現実に戻れば「あら恋しの昔や、と天を仰ぐ心の上を見るが大仰に過ぎ、涙の悲境の素因、「水上は我なるものを、と左へ見るのも顔をしゃくく様で少々品位を欠く感みがあるが、救免状の段は佳。ツレ康頼との問答に自身の名を確かめんと受け取る状に目を通すシテ、救免使の役を果たして後

は我れ聞せずと端然と居るワキ勝久、一幅の絵（写真）になる。クセは上ゲ端あと、「もしも礼紙に

「采女・美奈保ノ伝」

シテ邦久、小書

で里女が旅僧に語る春日山の植樹の由来・春日明神の縁起を説く部分を省く。従僧ワキツレ雅介・宰を伴う旅僧ワキ元、里女シテ邦久の呼掛けで出会うと、春日明神参詣は後にして先づ猿沢池へ、と説得され、其処で回向を頼まれて応じると、その対象は帝の寵を失った後宮の女官で入水した采女、とシテの語。更にシテは采女入水時の現況をワキとの掛合で明かすが、両者の明晰な口跡が哀感を謳い上げるように素晴らしい。この哀感に添い「生ける身と思すかや、とワキへ袖アシラヒ、「我は采女の幽霊、と数歩出るところ、「池水に入りけり、と沈み下居るところ、面若女・襟浅黄・観世水文白擦着付・松皮地紋唐花

文白地唐織の楚々たる美女の儚さ



青陽会定式能「俊寛」シテ加賀敏彦、ワキ高安勝久



青陽会能「采女」シテ梅田邦久（杉浦賢次氏撮影）

威嚇する所、祈り伏せられ「今まではさしもげに、と打杖を扇に替え、返し句に立つて「漂ひ廻る、とスミ近く高く飛返り秋小屋へ視線を遣る所、など活き／＼した躍動感が湧えるが、恐ろしさ妖気といったものが出るのはこれから。（1時間1分・9月3日・名古屋能楽堂定例公演初秋能第一部）

俄に起り翳々たる送り笛（子）に橋懸を往くところ、一入の哀切。アヒは里人・友彦、これまでの経緯居語に沈痛な面持で語ると、ワキとの問答からワキの侍語。後シテは前の唐織を替え浅黄大口に淡浅黄長絹、藻をかぶった心に被

衣で一ノ松に出ると（写真）沈み下居。被衣のま、有難や、と謡い出し、「（心の水と）聞くものを、と被衣しずかに脱ぎ、「池の蓮の、と立つと、采女シテは真の姿を現わす。ワキとの掛合に最早成仏させて頂き、南方無垢世界に「生まれん事も、心強いこと、とワキに合掌すると、奈良朝の古、帝に仕えて才媛ぶりを發揮した采女

のエピソードを云うクリ・サシ・クセの大半を省き、クセ切へさるにても忘れめや、と曲水の宴の情景、「有明の月、を見上げ、「山郭公、を聞くところ、控え目な型に風情をみせ、「月に啼け、と序之舞。極く僅か右に傾く様に見える面が小首を傾げるふうで可憐、初段後に二ノ松へ抜けると勾欄干に寄り、右袖を内へ手繰って下を見ること暫時、それは曲水に臨み、袖を濡らさぬ様に流れてくる

盃待ち受ける姿を彷彿させる。静かに面を上げて袖に戻すと再び舞台へ戻り、常座で沈むなどあつて三段を舞上げると、キリでは「水滔々として、と招いて出るところ、「雨は窓隔を、と翳す型も美しく、地邦弘・正邦らの裡に一ノ松へ。「讚仏乘の、と左手ワキへ指すと「よく巾はせ給へや、と小廻り、「また波に、と扇で面を隠し沈んで下居、下居の間に扇を右に替ると立つて二ノ松をみてトメ、内面の充実した、しつとりした好舞台。番組は当初シテは幸江だったが都合で邦久の代勤の由、邦久いま風に云えばいつでもスタンバイの心掛け、日頃の修行の程が思われる。（1時間30分・9月9日・青陽会）

演能カレンダー

名古屋能楽堂

(能・狂言演能関係) (TEL 052-231-0088)

[平成19年1月]

- 3日(水) 名古屋能楽堂定例公演 (番組①面) (有料)
正月特別公演
6日(月) 学生能・狂言の会 (無料)
8日(水) 名古屋清韻会 (番組①面) (無料)
13日(月) 第44回狂言「鳳の会」 (番組②面) (有料)
21日(日) 万作を觀るの会 (有料)
28日(日) 名古屋宝生会定式能 (番組②面) (有料)

NHK放送予定(平成19年1月1日~3日)

NHK-FMラジオ新春謡曲狂言特集

- 1月1日(月) 11:00~11:50
番組「百万」(観世流)
シテ・観世清和、子方・観世三郎太、ワキ・森常好、アイ・三宅右近、地謡・岡久広、関根知孝、観世芳伸、上田公威、角幸二郎、笛・一噌庸二、小鼓・観世新九郎、大鼓・國川純、太鼓・観世元伯
●1月2日(火) 11:00~11:50
狂言「若菜」(大藏流)
シテ(大名)・山本東次郎、アド(太郎冠者)・山本則俊、アド(次郎冠者)・遠藤博義、立頭(小原女)・山本則直、立衆(小原女)・山本泰太郎、山本則孝、山本則重、山本則秀、笛・竹市学、小鼓・亀井俊一、大鼓・佃良勝、太鼓・金春國和
狂言「杭か人か」(和泉流)
シテ(大名)・野村又三郎、アド(太郎冠者)・野村小三郎
●1月3日(水) 11:00~11:50
能「熊野」(宝生流)
シテ・近藤乾之助、ワキ・田崎隆三、ツレ・水上輝和、地謡・東川光夫、和久莊太郎ほか
笛・一噌仙幸、小鼓・幸清次郎、大鼓・亀井忠雄
●NHK・教育テレビ・年始特集・新春能狂言
●1月1日(月) 7:00~8:00
能「翁〜打掛り〜」(観世流)
翁・観世榮夫、千歳・観世淳夫、三番叟・野村万蔵、面箱・野村扇丞、地謡・山本順之、若松健史、阿部信之、北浪昭雄、西村高夫、岡田麗史、柴田稔、馬野正基
翁後見・観世鏡之丞、清水寛二、狂言後見・小笠原匡、吉住講、笛・一噌隆之、小鼓・大倉源次郎、古賀裕己、田辺恭資、大鼓・河村眞之介
※1月2日 5:00~(日本時間)
ワールド・プレミアムで放送
●1月2日(火) 7:00~8:00
狂言「夷毘沙門」(和泉流)
シテ(夷)・野村万作、アド(有徳人)・石田幸雄、小アド(毘沙門)・野村萬斎、笛・藤田次郎、小鼓・幸正昭、大鼓・柿原弘和、太鼓・小寺左七
狂言「佐渡狐」(大藏流)
シテ(佐渡のお百姓)・茂山千之丞、アド(越後のお百姓)・茂山千之丞、アド(奏者)・茂山千作
※1月3日 5:00~(日本時間)
ワールド・プレミアムで放送
●1月3日(水) 7:00~8:00
能「枕草子」(喜多流)
シテ・香川靖嗣、ワキ・工藤和哉、ワキツレ・井藤鉄男、大日方寛、地謡・友枝昭世、粟谷能夫、大村定、長島茂、狩野一、友枝雄人、内田成信、金子敬一郎、後見・内田安信、中村邦生、笛・松田弘之、小鼓・曾和正博、大鼓・柿原崇志、太鼓・助川治
※1月4日 5:00~(日本時間)
ワールド・プレミアムで放送

能 楽 の 友

発行能楽の友社

名古屋市千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-7984
FAX (052) 733-2837
振替口座 00800-6-36393
購読料 1年 1100円
郵送の場合 1年 1800円
一部 100円

観世寿夫記念法政大学能楽賞

片山慶次郎氏 宮本圭造氏 受賞

法政大学(平林千教校長は、一九七九年(昭和五十四年)に「観世寿夫記念法政大学能楽賞」を設定し、すでに二十七回の贈呈を重ねているが、本年も各方面の識者の推薦による候補者について、選考委員(武田洋・法政大学常務理事、野村萬、みなもとこうろ、松本雅、表章、西野春雄、山中玲子)が慎重に審議した結果、第二十八回の受賞者として、シテ方観世流・片山慶次郎氏、能楽研究家・宮本圭造氏を決定した。

片山慶次郎氏

清楚で気品高い趣きと作品の内面に迫る深い精神性を併せ持つ氏の能は、観る者の心を打つ力に溢れている。若手の育成、能楽の充実と普及にも心を砕き、長年に亘り「能にしたいむ会」を主宰、京都の能楽界が一体となって企画し

催花賞

観世 元信氏 受賞

法政大学は、第十八回の催花賞の決定に当たって、各方面の識者から推薦された候補者について、法政大学能楽研究所と能楽賞選考委員とが慎重に選考した結果、受賞者として、観世流太鼓方・観世元信氏を決定した。

加賀藩の能楽

金沢能楽美術館(金沢市広坂一丁二二五)は、特別展として「加賀藩の能楽」利家から綱紀まで」を12月16日から新春1月28日(前期)、1月31日から3月11日(後期)として開催する。「加賀宝生」の隆盛は、藩政時

名古屋能楽堂演能案内

名古屋能楽堂定例公演

平成十九年一月三日(水) 午後二時始
名古屋能楽堂

能翁

翁長田 三番叟 鹿島俊裕 寛 福井 鮎一
千歳 佐藤 融 後藤嘉津幸 船戸 昭弘 竹市 学

狂言 三本柱

シテ果報者 井上菊次郎 アド 太郎冠者 井上 靖浩
アド 次郎冠者 今枝 郁雄
後見 佐藤 友彦

能 竹生島

高橋 瞭一 河村眞之介 加藤 洋樹
喜正 杉江 勝久 柳原富司忠 大野 誠

名古屋清韻会

平成十九年一月八日(祝) 午前九時三十分始
名古屋能楽堂

素謡 小督

富田 郁子 筑瀬 和子
山口たき子 久保田和代
川崎 朋子 青山 信江
伊藤 泰子 榎本 圭子
浅井 庸子 田中 紀代
田中 美蓉 岩田 正子

能 熊野

川崎あきる 寛 鮎一 竹市 学
荒木 賀光 竹市 学
荒木 賀光 竹市 学

能 遊行

寛 鮎一 竹市 学
荒木 賀光 竹市 学
荒木 賀光 竹市 学

能 維盛

加藤美智子 荒木 賀光 大野 誠
河村眞之介 荒木 賀光 大野 誠

能 松之段

河野カズエ 春日井夕紀子 山本美代子 谷口 寛子

能 山願

川崎 信義 後藤孝一郎 藤田六郎兵衛
富士道周明 観世 元伯

能 卒都婆小町

河村眞之介 観世 元伯
後藤孝一郎 藤田六郎兵衛
河村眞之介 大野 誠

能 定家

河村眞之介 観世 元伯
後藤孝一郎 藤田六郎兵衛
河村眞之介 大野 誠

能 石橋

河村眞之介 観世 元伯
後藤孝一郎 藤田六郎兵衛
河村眞之介 大野 誠

能 高砂

河村眞之介 観世 元伯
後藤孝一郎 藤田六郎兵衛
河村眞之介 大野 誠

能 通小

河村眞之介 観世 元伯
後藤孝一郎 藤田六郎兵衛
河村眞之介 大野 誠

能 安宅

河村眞之介 観世 元伯
後藤孝一郎 藤田六郎兵衛
河村眞之介 大野 誠

能 祝言

河村眞之介 観世 元伯
後藤孝一郎 藤田六郎兵衛
河村眞之介 大野 誠

能 仕舞

河村眞之介 観世 元伯
後藤孝一郎 藤田六郎兵衛
河村眞之介 大野 誠

能 御来場歓迎

河村眞之介 観世 元伯
後藤孝一郎 藤田六郎兵衛
河村眞之介 大野 誠

戦後名古屋能楽史 ⑧

〔第十八章〕 竹尾 邦太郎

昭和三十九年（一九六四）

昔風に言えば昭和甲辰（きのえ たつ）、現代史の中では画期的な...

一月二日、幸清流小鼓方の田鍋...

大蔵流狂言方・茂山弥五郎、新...

明治大帝がなくなられた直後、...

弥五郎の初来名は昭和六年（一...

わる以上、ヨシタケでもゼンタク...

茂山弥五郎

右者芸道格別の功勞に依り...

善竹姓を授与す

昭和三十八年十月四日七十九世...

（註、十月四日は弥五郎第八十...

前略―弥五郎が八十歳になる...

秋のことである。息子の大蔵弥太...

弥五郎は、水戸黄門が助さん格さ...

その後、弥五郎から、禪竹と言...

その後、弥五郎から、禪竹と言...

弥五郎が善竹姓を名乗ったの...

弥五郎が善竹姓を名乗ったの...

は、彼が八十歳の秋であった。...

ともあれ、弥五郎は、五人の息...

「いかにござりまするな、御...

一九七九年十一月十八日、五十...

一月十二日、金剛流春星会、故...

一月十二日、金剛流春星会、故...

一月十二日、金剛流春星会、故...

一月十二日、金剛流春星会、故...

一月十二日、金剛流春星会、故...

一月十二日、金剛流春星会、故...

お許しをいたゞき、今日この追善...

「巻絹・五段神楽」

「名古屋宝生会」「名古屋観世会」と「豊田市能楽堂ろうそく能」

「巻絹・五段神楽」

「巻絹・五段神楽」

「巻絹・五段神楽」

「巻絹・五段神楽」

「巻絹・五段神楽」

「巻絹・五段神楽」

「巻絹・五段神楽」

「巻絹・五段神楽」

「巻絹・五段神楽」

「巻絹・五段神楽」

「巻絹・五段神楽」

「巻絹・五段神楽」

「巻絹・五段神楽」

「巻絹・五段神楽」

「巻絹・五段神楽」

「巻絹・五段神楽」

「巻絹・五段神楽」

「巻絹・五段神楽」

「巻絹・五段神楽」

「巻絹・五段神楽」

「巻絹・五段神楽」

「巻絹・五段神楽」

「巻絹・五段神楽」

「巻絹・五段神楽」

「巻絹・五段神楽」

「巻絹・五段神楽」

「巻絹・五段神楽」

「巻絹・五段神楽」

「巻絹・五段神楽」

